

明治学院歴史資料館資料集

第19集

船はいづこにまよふとも
— 井深梶之助の和歌とその周辺 —

表紙図柄について

当館が所蔵する「井深アルバム」5冊のうち1冊に用いられている表紙図柄である。



写真1 井深夫妻肖像写真 撮影者Y. Ogihara 撮影年不明

当館所蔵

井深は晩年、花子夫人とともに訪れた軽井沢や別荘のあった逗子で詠作を楽しんだ。井深が天に召された後、親戚の児島三郎や真野文二は、手許に残る井深の和歌を紙に列記し、花子夫人宛に送っている。また、1941（昭和16）年12月に日本神学校を卒業した高崎毅が花子夫人へ宛てた書簡には「この五月頃鷺山先生より、私宅に所蔵の井深先生の筆の掛軸と詩を奥様の方へ知らせて呉れるやうにとのお話」があったことが記されており、井深自筆の韻文等が鷺山三郎を通じて夫人のもとに集められていたことが知られる。

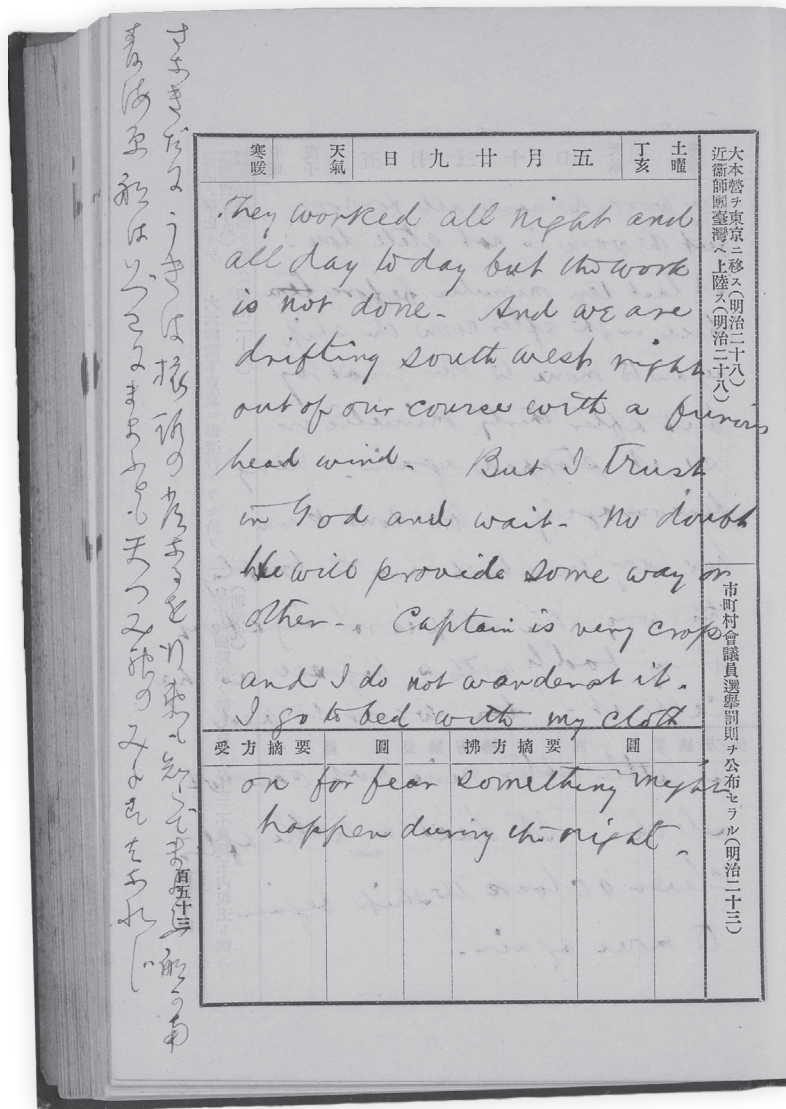


写真2 [井深日記] 明治30年5月29日条

当館所蔵

明治30(1897)年、井深はアメリカに向かう太平洋上で、蒸気船の故障により、漂流の危機に遭遇する。英語で記された日記の欄外には、当時の心境が和歌で書き記されている(18頁参照)。特に左端の「青海原船はいつこにまよふとも天つみ神のみ手ははなれじ」は、先妻勢喜子への書簡をはじめ、以後の説教の中でも引用された。

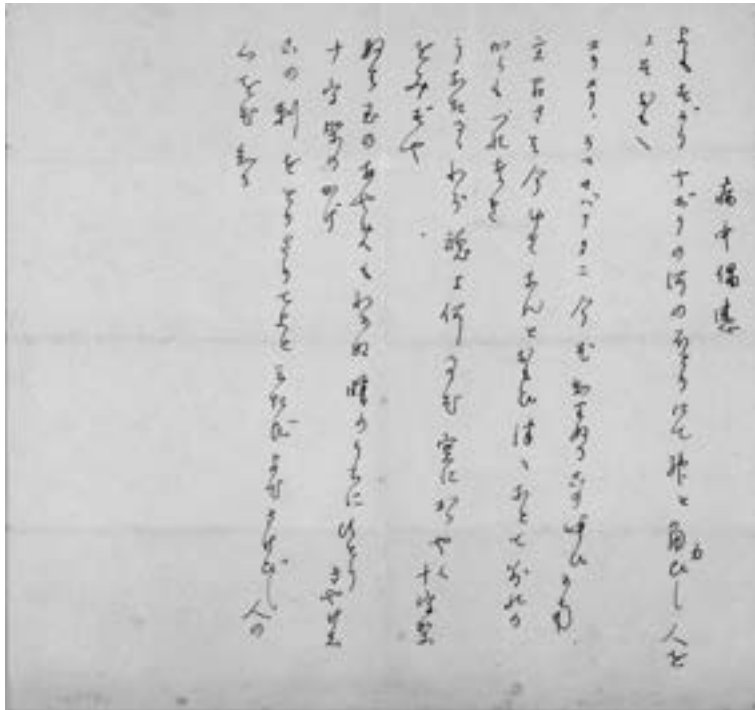


写真3 井深樞之助和歌「病中偶感」6首 [1925 (大正14) 年]

当館所蔵

聖書のことばがちりばめられた井深自筆の和歌六首(49頁参照)。「WT & Co」と透かしの入った紙片に記されており、1925 (大正14) 年の日記の裏表紙にあるポケットの中に折り畳んで入れられていた。

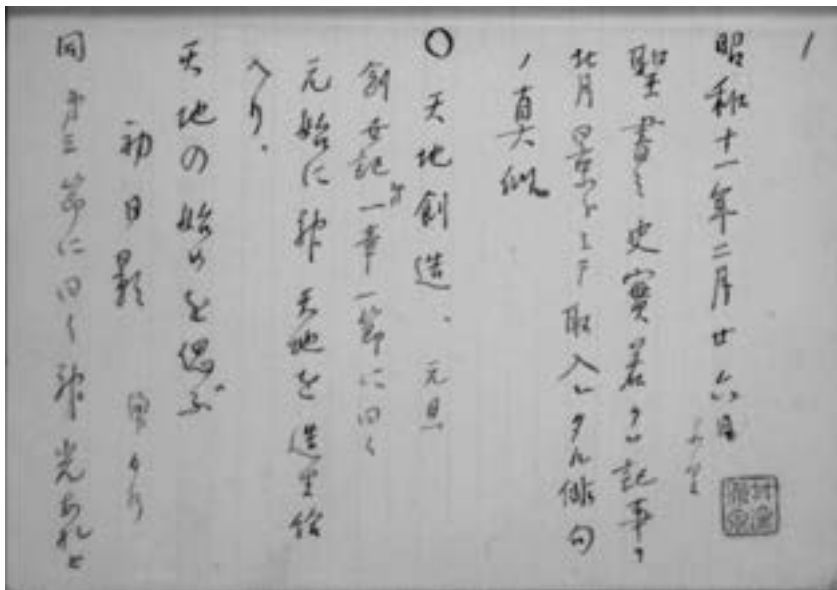


写真4 [聖書俳句集] 冒頭部分 1936 (昭和11) 年

当館所蔵

冒頭に「聖書之史実若クハ記事ヲ背景トシテ取入レタル俳句ノ真似」とある。市販のノートが用いられ、各頁右上には頁数が記されている。本文は12頁で終わっているが、あとの頁に「13」の数字のみが残る。

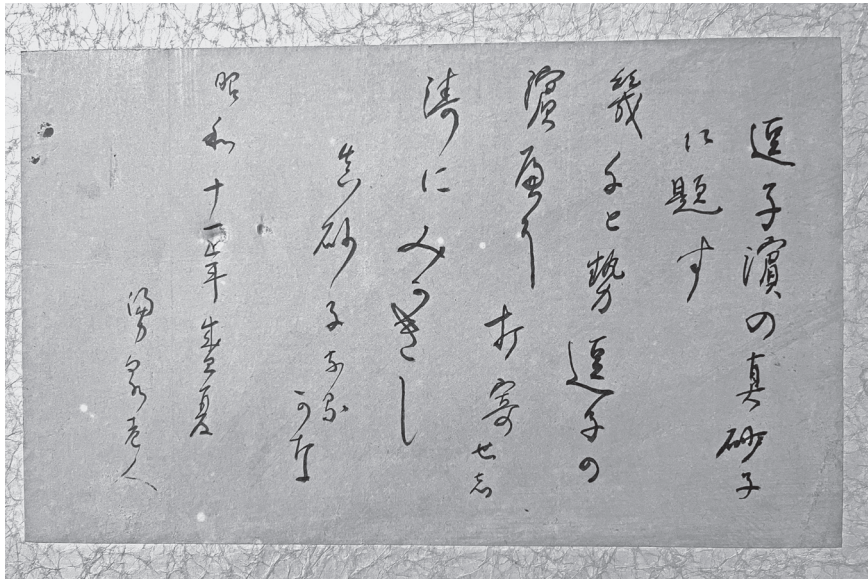


写真5 井深梶之助和歌「幾千とせ」額装 1936 (昭和11) 年

当館所蔵

井深は、逗子海岸で拾い集めた真砂と貝殻に当該歌を添えて身近な人たちに贈った(283・287番歌)。自筆の当該資料(289番歌)は2022年度に明治学院同窓会より当館へ移管された。



写真7 逗子海岸から見える富士山

(2022年11月撮影)

逗子海岸から見える富士山は、井深を詠作へといざなう存在でもあった。

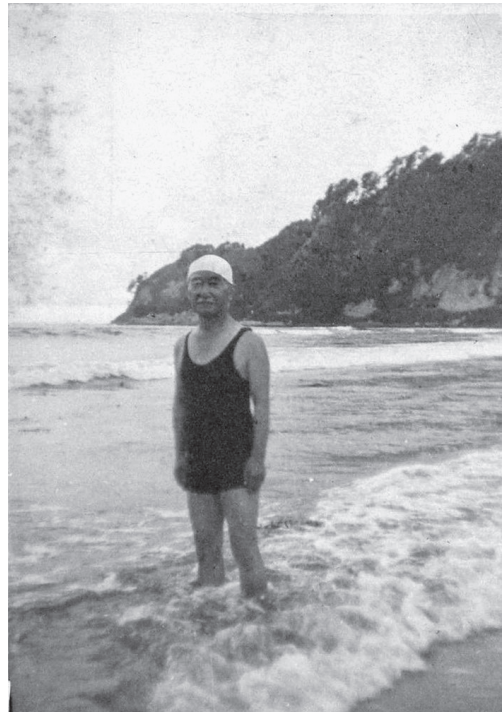


写真6 逗子海岸にて 1930 (昭和5) 年頃

当館所蔵

時折自らの水着の写真を親しい人々に贈っていた井深。その際に添えられた和歌も残っている(226・227番歌)。

明治学院歴史資料館資料集 第十九集

明治学院歴史資料館

はじめに

本資料集は、明治学院の第二代総理井深梶之助（一八五四―一九四〇）が詠んだ韻文、特に和歌に関する資料を当館所蔵の歴史資料の中から探し出し、集成したものです。ここには、彼の日記や説教講話集等に書き記された古歌や周辺の人々の詠草も含まれています。

既刊の『井深梶之助宛書簡集』を紐解いてみますと、井深の死後、花子夫人のもとに井深の詠んだ和歌や漢詩が集められていた様子をうかがうことができます。伝記編纂を見据えたものであったかと思われませんが、こうして集められた井深の韻文が、その後、世に出ることはありませんでした。今回このような形でこれらの韻文を集成し、皆様にお届けできますことを大変嬉しく存じます。

今回収録した韻文には、折々の彼の心情や思考が如実に映し出されています。これらを通して井深の内面に着目することは、従来の研究に新たな視点を加え、より多角的に井深を捉えることに通じるものと思われれます。また井深の詠んだ和歌や俳句は、伝統的な表現技法で詠まれているほか、聖書のことばを用いたものも多く見受けられます。日本古来の文芸とキリスト教が交わり、そして融合している一例といえるでしょう。当時の文化的・思想的背景や近代和歌史・俳諧史におけるキリスト教の影響を考える上でも、興味深い素材になると思われれます。

本書は、松本智子特任研究員をはじめとする、本館スタッフによってまとめられたものです。今後、井深梶之助研究はもとより、さまざまな分野の調査研究に本書を活用いただけましたら幸いです。

二〇二四年には、井深梶之助生誕一七〇周年を迎えます。人生の大半を明治学院と日本のキリスト教界に捧げてこられた井深先生への感謝とともに、ささやかではありますが、本資料集をお祝いの上、しるしとしたいと存じます。

二〇二三年三月

目次

凡例

解題 「船はいづこにまよふとも ―井深梶之助の和歌とその周辺―」 松本 智子 …………… 1 頁

資料編 1 井深梶之助関係韻文資料集成 …………… 13 頁

資料編 2 「聖書俳句集」二種 …………… 93 頁

資料編 3 「明治二十三年渡米日記」のあとに記された古歌 …………… 99 頁

主要参考文献一覧 …………… 103 頁

初句索引 …………… 105 頁

凡例

一、本資料集は、明治学院第二代総理井深梶之助（一八五四―一九四〇）が詠んだ韻文、特に和歌に関する内容を当館所蔵の歴史資料の中から抽出し、集成したものである。加えて、彼が日記や説教講話集等に書き記した古歌や周辺の人々の詠草も含んだ。なお、韻文の範囲は、俳句・狂歌・漢詩等に及ぶが、漢詩については、井深自作の漢詩のみを収録した。

一、本資料集は、解題および資料編1・2・3で構成される。資料編1は井深が詠んだ韻文および井深が書き記した古歌や他者の韻文を翻刻し時代順に排列した。資料編2は井深梶之助著「聖書俳句集」二種を翻刻した。資料編3は、「明治二十三年渡米日記」の後に書き記されている古歌二四首を翻刻した。

一、集成に当たっては左記の当館所蔵資料、既刊の書籍および明治学院大学図書館所蔵資料を調査した。なお掲載に当たっては、矢印以下のように略記した。

- ・〔井深梶之助日記〕一八九六（明治二九）年～一九三八（昭和二三）年 五三冊 ↓〔井深日記〕
- ・〔井深梶之助手帳〕一八八六（明治一九）～一九二二（大正一一）年 一〇冊 ↓〔手帳〕（資料ID）
- ・〔井深梶之助説教講話集〕・〔井深梶之助説教講話草稿集〕・〔井深梶之助講述録集〕・〔井深梶之助講義録〕
一八七七（明治一〇）年～一九三四（昭和九）年 二五四冊 ↓〔説教講話集〕（資料ID）
- ・〔渡米日記〕一八九〇（明治二三）年 一冊
- ・〔井深梶之助聖書俳句集〕 二冊 ↓〔聖書俳句集〕
- ・伊藤三千子氏寄贈井深家関係資料 ↓〔伊藤氏寄贈資料〕
- ・秋山繁雄編『井深梶之助宛書簡集』（明治学院、一九九七年） ↓『書簡集』
- ・『白金学報』 一九〇三（明治三六）年～一九二一（大正一〇）年
- ・児島三郎著『そぞろ言』（鎌倉雪ノ下教会、一九四三年） ↓『そぞろ言』
- ・真野文二著『蜂聲集』（私家版、一九四一年） ↓『蜂聲集』
- ・明治学院大学図書館所蔵貴重書 ↓〔明治学院大学図書館資料〕

一、韻文の掲載においては、井深の意図が分かるよう可能な範囲で前後の記述も含めたが、割愛した部分もある。

一、同じ内容の韻文であっても、別の資料に記されている場合には、重複を厭わず、それぞれを掲載した。

一、資料編においては、全ての韻文の頭に通し番号を付した。また、井深自作の韻文には通し番号の左に「*」（アステリスク）を付した。

一、脚注においては、韻文に対応する番号を付した。また、井深自身が詠んだ和歌や俳句について、表現や趣向が類似するものを「参考」として掲げた。井深が引用した和歌等については、判明するかぎり他出文献を示した。その他、適宜注記を加えたところもある。

一、脚注に引用した和歌と歌番号は『新編国歌大観』に拠った。『新編国歌大観』以外の引用については、適宜明記した。

一、脚注に引用した聖句は『日本聖書協会 新共同訳』に拠った。

一、翻刻は原則として原本の通り行った。ただし、通読の便を考慮して次のような校訂を行った。

・漢字は常用漢字を使用し、俗字や略字等は改めた。

・誤字・脱字・書き間違いと思われるものについては、右傍に〔ママ〕を付した。ただし、推定できるものについては、その内容を〔 〕で示した。

・合略仮名「ㇿ・ㇾ」等については「コト・トモ」等と翻字した。

・読みやすさを考慮し、適宜読点を補った。

・韻文については、原本において文中に書かれていたとしても、改行し、二字下げとした。ただし、部分的な引用の場合は、原本通りとしたものもある。

・見せ消ち等による本文中の訂正については、訂正後の本文のみを翻字した。ただし、韻文やそれにかかわる訂正については、推敲の可能性を考慮し、できる限り原本の状態を再現するよう努めた。

一、本文中には、現代社会において不適切と思われる表現が含まれているが、当該期の社会状況を伝える歴史資料として原文のまま掲載した。

一、本書の作成にあたっては、明治学院歴史資料館特任研究員 松本智子が担当した。編集実務および校正に関しては、同館職員 圓道弘子、小杉義信が担当し、同館職員 三上耕一、学芸員 亀元円の協力を得た。また、翻刻本文の校正に関しては、特任研究員 細井守の協力を得た。

資料の調査に際し、名古屋市立大学 加藤弓枝氏、若松城天守閣郷土博物館副館長 中岡進氏、同学芸員 湯田祥子氏に大変お世話になりました。記して謝意を表します。

【解題】船はいづこにまよふとも — 井深樾之助の和歌とその周辺 — 明治学院歴史資料館特任研究員 松本 智子

青海原船はいづこにまよふとも天つみ神のみ手ははなれじ

明治二四（一八九一）年、井深樾之助は初代明治学院総理へボン博士から新総理に任命された。一月六日、サンダム館講堂での就任式において、ヘボン博士が壇上で井深に手づから鍵を渡し、会衆に向かつて、「井深氏はその名の示す通り樾であります。私は明治学院といふ船にこの新しい舵をつけました。この船はこれからの様な方向に乗り出しても、此の舵は決して針路を誤りませぬまい」と総理職委譲の挨拶をしたことはよく知られている。

この日、井深にとつて、新たな人生の大航海が始まったといえよう。〔井深樾之助日記〕（以下〔井深日記〕とする）昭和九（一九三四）年二月七日条には、親戚にあたる児島三郎が送ってきた述懐の漢詩に対し、井深は次のように応じている（71頁）。

自古人生似航海 誰書航海無風波
遙風時有限行路 激浪亦將欲覆船
雖然我有在羅針 何疑平安入港口

この漢詩からも井深は先人たちと同じく、自らの人生を「航海」と捉えていることが分かる。いかなる航海であったとしても、自分には羅針があるから、船は無事に入港することを疑いもしないという。羅針と

は、方位を示すもの、進むべき道を示してくれるもの、すなわち井深にとつては神である。無事に入港するとは、穏やかな帰天を意味すると思われる。

最晩年となる昭和一四（一九三九）年、一時危篤を伝えられていた井深について、花子夫人は次のように語っている。⁽²⁾

〔前略〕気分も夜分よく寝られました時は翌日は一日確かりしてをりますが、概して午後特に夕方からは少し変なことを申します、『この船は何処に着くのか』などと航海をしてゐる心持ちなのでせうか、よくそんなことを申してをります。

この時、井深の航海は、まさに先の漢詩に思い描いた「平安入港」を迎えつつあった。

これまであまり注目されていないが、井深樾之助は時折和歌や俳句を詠み漢詩を作っている。本書には、一七歳から八五歳までの和歌一四六首、俳句四四句、漢詩三二編を収録するとともに、井深が引用した古歌や周辺の人々の詠草等一五六点を収録した。これらの韻文は、日記・手帳に所感とともに書き留めたもの、説教・講話や伝道活動の中で用いたもの、書簡の往復の際に交わされたものなど様々である。日記や説教講話集は片仮名で書かれている場合が多いが、和歌については殆どが変体仮名と漢字で記されている。以下、井深の記した和歌の概要と特徴を解説することにした。なお、文中の歌番号は資料編の通し番号と対応

する。

一、詠作時期について

左の表は、本書に収録した井深自作の韻文を制作年代順に整理したものである。

西暦	和暦	年齢	和歌	俳句	漢詩
1870年	明治3年	17	1		1
1897年	明治30年	44	8		
1898年	明治31年	45	8		
1899年	明治32年	46	2		
1907年	明治40年	54	4		4
1913年	大正2年	60	4		
1914年	大正3年	61	2		
1917年	大正6年	64	1		
1924年	大正13年	71	17		
1925年	大正14年	72	10		1
1926年	大正15年	73			2
1927年	昭和2年	74	2		1
1928年	昭和3年	75			2
1929年	昭和4年	76	5	2	1
1930年	昭和5年	77	4		1
1931年	昭和6年	78			3
1932年	昭和7年	79	7		
1933年	昭和8年	80	9	1	3
1934年	昭和9年	81	6		2
1935年	昭和10年	82	18	5	3
1936年	昭和11年	83	14	36	2
1937年	昭和12年	84	6		
1938年	昭和13年	85	7	1	3
作成年未詳・その他			11		

全体の約六割を和歌が占め、晩年に詠まれたものが多い。各時期の主な和歌を紹介する。

井深が詠んだ和歌のうち、もっとも早い時期のものは、明治三（一八七〇）年、井深一七歳、彼が故郷の会津を出て東京へ向かう途中で詠んだ次の和歌である（41頁）。

誓ひてし我が真心のかなはずはふた、びこえじ故里の山

上京する際の自らの強い決意を表している。こうした思いを和歌等で表現することは、ある意味当時の若者の常套であったようである。³⁾

これは、井深が大正五年（一九一六）九月二四日に高輪教会で説教を行った際の原稿「青年ノ都会生活ト其誘惑及ビ機会」の中に書き記されたものであり、漢詩とともに並べられている。

この後、井深の和歌を確認できるのは、日記等の資料の残存状況とも関わるが、四〇歳代半ばの明治三〇年から三二年にかけて、また明治四〇年、大正二年、同三年、同六年あたりに数首確認でき、大正一三年に一七首、それ以降も決して数は多くはないけれども、和歌を詠んでいた様子をはっきりとすることができる。

井深の詠作が目立つようになるのは大正一三年である。井深は、大正一〇年三月に総理の職を辞したが、その後も、神学部長兼教授を務めていた。七一歳となる大正一三年三月、井深はこれらの職をも辞し、神学部講師として勤めるのみとなった。同年八月二八日、静養のため軽井沢を訪れていた井深は、日記に狂歌と称して次のような一首を記している（45頁）。

世の中を離れ山辺の仮住ひ重荷おろして身も軽井沢

明治学院の重職を退き肩の荷を下ろした井深ではあったが、彼ののもとには、学院関係者が訪れては何かと相談を持ちかけたり、意見を聞きに來たりと来客は絶えなかつた。また、「井深日記」昭和八（一九三三）年二月冒頭に、

一月モ夢ノ間ニ飛去リタリ、引退ノ身ナガラモ、日本神学校ノ理事長、基督教聯盟常務委員、同国際教育委員、青年会同盟名誉委員長等ニテ一月中モ数回上京シ夜二入り帰宅、必ラスシモ散閑ノ人トモ

云難シ、

と記しているように、キリスト教界の発展に尽力するなど、引退後も多忙な日々が続いていた。とはいえ、それまでよりも和歌などの創作に勤しむ時間を手に入れたようで、和歌の詠作や詩作の数は増えている。井深は、大正一三（一九二四）年五月、友人の秋葉省像から書道の手ほどきを受けることを決め、翌年には雅号を「湧泉」と定めており、詠作や詩作の際にもこの「湧泉」を多く用いた。

晩年、和歌や漢詩のやりとりを行っていた児島三郎が、井深の死後、花子夫人に宛てた書簡（昭和一五年八月二一日付）の中で「昭和十四年五月三十日 翁八十六才を迎ふ 米寿までもと祈り甲斐なく再び重態又雅信に接せず」と書いているように、昭和一四年になると井深は危篤に陥ることもあったため、創作にいそしんでいられたのは、おそらく昭和一三年頃までであったと思われる。⁽⁴⁾ 本書に収録した和歌で、詠作年時の分かる最後のものは、昭和一三年四月二七日付、児島三郎宛の葉書に記された次の一首である（89頁）。

散際のすこし見苦し八重桜桜ハやはり吉野なりけり 湧泉

二、詠作の特徴

井深の和歌には、折々の情感を織り込んだ叙情歌、風景を詠んだ叙景歌、人の死に際して詠んだ哀傷歌、親戚との贈答歌、そのほか贈り物への礼状に添えられたものなどが見られる。

叙景歌に関していえば、桜・富士山などの実景を詠むこともあった。桜の開花を心待ちにし（292）、出掛けた先で目にした爛漫たる桜や自宅

の庭前に見える桜を愛でている（148・294）。また、晩年、鎌倉や別荘のある逗子で過ごすことも多かった井深は、相模湾のかなたにそびえる富士山を砂浜から目にもすることもあり、そこで和歌を詠じている（120・121・184）。

海は井深を歌詠みにした。井深の韻文の中には、海に関わるものが比較的多い（15・16・17・25・119・120・121・129・130・186・213・226・227など）。中でも渡米時の壮絶な実体験のもとで詠んだ冒頭の和歌は、後年まで井深の記憶に強く残っていたと思われる。当該歌は、「井深日記」・先妻の勢喜子宛書簡・説教講話集にそれぞれ含まれている。

〔井深日記〕では、明治三〇年五月二九日条の欄外に書かれており、英文の左横にくずし字で書かれた和歌二首のうちのひとつである（↓口絵写真2）。

妻の勢喜子に宛てた明治三〇年六月八日の書簡では、「自分事不幸にして未だ曾て和歌を学候事なし、然るに此度の航海にて苦敷マギレに俄に歌読みとなり候間、二三首御覧に入候」として記された三首のうちのひとつ（18頁）。蒸気船が故障し、三日三晩太平洋の真ん中を彷徨っている時に詠んだことが詞書から分かる。

〔説教講話集〕では「神の摂理」の中で引用されている（33頁）。井深は、明治四二年四月二五日の明治学院での説教のほか、大正六年一二月九日上大崎教会・同七年九月一五日桜井女塾において、自分たちが神の摂理のもとに存在することを聴衆に説いた際、自らの経験、すなわち、幼年の頃に弾丸の間を奔走したこと、会津籠城のこと、一昨年夏に大病に罹ったこと等と並べて、明治三〇年の渡米時のことを記している。乗っていた蒸気船が太平洋の真ん中で破損し、今にも漂流しそうな状況に遭遇したことを例としてあげ、冒頭の和歌を示したのであった。⁽⁶⁾

講話集の書き方からは、蒸気船の破損による海上漂流の危機は、会津籠城などと同じく死を覚悟せざるを得ない状況であった。そうした折に、神への信仰心とともに詠んだこの一首は、井深にとつて忘れることの出来ない和歌となったようである。

その他、井深の詠み方として興味深いのは、ラジオから聞こえる鳥の鳴き声を詠んでいることである(278・295・304)。屋外の鳥の鳴き声に耳を澄まし和歌を詠むことは近世以前にも見える常套的な趣向であるが、ラジオから聞こえる鳥の鳴き声を詠むのは、この時代特有の詠み方と言えよう。

いずれにせよ、井深はその折りに即した素直な詠み方をしており、技巧を凝らすことはない。井深自身が意識的かどうかは別として、和歌の型を利用して詠じているために、ある種伝統的な和歌の範囲に収まっているようにも見える。

一方で、伝統を踏まえながらも、諧謔を弄する和歌も多い。その典型が伊藤藤吉氏から贈られた摩擦用長把柄たわしへの御礼として詠んだ99番歌である。

足曳の山鳥の尾のしだり尾の長たわしをばながくもちひん

『百人一首』にもとられている柿本人麻呂の有名な「葦引の山鳥の尾のしだりをのながなし夜をひとりかもねむ」(『拾遺集』・七七八番歌)をもじったものであり、洒落に興じ、諧謔的である。冷静・厳格な井深の印象とは異なる一面を見せているが、本人としては意外と真面目に詠んでいるのかもしれない。

こうした諧謔性は、121番歌にも見え、「袖の浦に打いて、みれば白妙

の不二の高根は日に匂ひつゝ、」のあとに作者として「海辺の黒人」を添える。この和歌も『百人一首』として知られる「たごのうらにうち出でてみれば白妙の富士のたかねに雪はふりつつ」(『新古今集』六七五番歌)を下敷きとしたもので、作者の「山辺赤人」を「海辺の黒人」ともじっており、明らかに笑いを誘っている。

このほか、井深がキリスト者であることから自ずと現れた特徴として、伝統的な表現とキリスト教的な素材が歌の中に混じり合っていることが挙げられる。

例えば、大正一四年に詠まれた132番歌を見てみると、

よもすがらヤボクの河のほとりにて神と角力ひし人をこそおもへ

傍線部「よもすがら」は「一晚中」という意味で、和歌では初句に据えられることが多く、第三句末が「にて」となる用例もある。⁽⁷⁾ 井深の和歌の「ほとりにて」の「にて」のように場所を表しているものは見当たらないものの、従来の型は踏まえているといえよう。また、「人をこそおもへ」は、井深の和歌と同様、結句に用いられる用例が多い。⁽⁸⁾ 「よもすがら」「人をこそおもへ」という伝統的な和歌の言葉の間に、「ヤボクの河のほとり」・「神と角力ひし」という言葉、すなわち『旧約聖書』「創世記」三三章の内容が挿入されている。

更に、136番歌について見てみよう。

ぬは玉のあやめもわかぬ暗やみのうちにひとりさやけし十字架のかげ

傍線部「ぬは玉の」「あやめもわかぬ」「ひとりさやけし」は何れも伝

統的な和歌の表現である。⁹⁾ こうした言葉の連なりの後に、井深の和歌では「十字架のかげ」と続く。第四句に「ひとり」とあることから、「十字架の影」は「イエス・キリストの姿」を意味していると思われる。「ぬば玉の」は、通常「黒」や「夜」に掛かる枕詞で用いられるが、ここでは「あやめもわかぬ」と続くため、「真つ暗な」という実態を表す言葉として機能する。和歌全体の意味としては、真つ暗な分別もできないほどの闇の中に、ひとりはつきりと見えるイエス・キリストの姿、となる。

これらの例は、伝統的な和歌のことばを連ねつつ、そこにキリスト教的なことばを取り入れているように見える。しかし、井深の意図的な手法と捉えるよりも、もともと伝統的な和歌のことばや詠み方を教養として身につけていた井深がキリスト者になったことにより、キリスト教的なことばや発想が和歌の定型の中に入り込んだと考える方が自然であろう。¹⁰⁾

井深がキリスト教への信仰やその教義、すなわち聖書の世界そのものを意識的に詠む方向へと向かうのは晩年であり、本書にも収録した聖書俳句集へと集約されていく。

三、書き記した古歌や周辺の人々の和歌について

本書に収録した韻文の中には、井深が自ら詠作したもの以外に、周辺の人々の韻文を書き記したものも多い。「井深日記」と「説教講話集」では、それら韻文の特徴が異なる。

「井深日記」の中に見られるのは、他者からの贈歌が多く、その他はその時の自分の心情を言い表している古歌などである。「説教講話集」の中に見られるのは、主に説教講話の内容を補強するための引用であ

り、『古今集』などの勅撰集と『百人一首』が目立つほか、『平家物語』に見える今様（40ほか）、水戸黄門・一休禪師・赤穂義士が詠んだと当時伝えられていた和歌・俳句および狂歌（4・9・66など）も含まれている。

これらのほか、特に多く引用されるのが、上杉鷹山と明治天皇の和歌である。この二首について触れておきたい。

(1) 上杉鷹山の和歌

なせばなるなさねばならぬなにごともしらぬは人のなさぬなりけり

井深と当該歌との出会いは、明治三〇（一八九七）年に遡る（19頁）。井深は、同年一月一九日から二月一日までの間、伝道のため三浦徹らとともに仙台・山形を訪れた。「説教講話集」に記された当時の伝道記録を紐解くと、一月二六日条に次のように書き記されている。

三浦氏ト共ニ米沢市中ヲ見物シテ後上杉勝持氏方ニ転寓ス、氏ハ上杉家ノ分家ナリ、鷹山公ノ用ヒタル大小硯二面及ビ南亭余韻ト題スル写本ヲ見ル、感服スベキコト共アリ

井深は上杉家の分家である上杉勝持氏宅において、米沢藩第九代藩主・上杉治憲（鷹山）の遺文を編集した『南亭余韻』の写本を実見し「感服」している。¹¹⁾「なせばなる」の歌は、「南亭余韻」には含まれるが、井深が書写した「伝国ノ詞」ではなく、「壁書」の一部として知られているものである。¹²⁾ 伝道を終え帰宅して一週間後の「井深日記」明

治三〇年一二月八日条によると、「出院授業如常、上杉鷹山公ノ遺跡ニ付講話ヲ為ス」とあり、山形伝道において自らが感服した事柄をもとに、早速講話を行っている。

また、明治四〇年一〇月一〇日大会開會説教「第二積極的ノ教訓」の一節でもナポレオンの逸話と並べて鷹山の和歌を記している(29頁)。

更に、明治四二年の説教講話「信仰、覚醒ノ必要」(33頁)の中では、次のような記述も見える。

日本伝道ノ為ニ信仰ノ覚醒ヲ要ス、若シモ我が祝謝伝道ノ不成功ニ帰スルコトアラバ、ソハ人ナキガ為ニ非ズ、又金ナキガ為ニ非ズ、結局信ナキガ為ナルコトヲ知ラン、若シ芥種ノ如キ程ノ信仰アラバ此山ニ向ヒテ此処ヨリ彼処ニ移レト云フモソノ如クナラントイエスハ云ヒ給フナリ、其実例ハ希伯来十一章ニアリ、意思之方、何のその岩をも通す桑の弓

精神一到何事不成

上杉鷹山の歌

なせばなるなさねばならぬ何事もならぬは人のなさぬなりけり

井深は、この講話の内容を大阪北教会に於いてほか五回にわたり話している。ここで井深が伝えたかったのは、自らの目的を達成できないのは「人ナキガ為ニ非ズ、又金ナキガ為ニ非ズ、結局信ナキガ為」であり、「意思之力」すなわち信念があれば、目的は達成できるのだということであろう。そして、そのことを端的に示しているのが、「なせばなる」の歌であったと思われる。

(2) 明治天皇の和歌

目にみえぬ神の心にかよふこそ人のこゝろの真なりけり

この和歌は、明治天皇による明治四〇(一九〇七)年の詠草で、本書においては一〇カ所確認できる。

① (明治四〇年以降)

〔説教講話集〕「敬神ノ益」のうち(34頁)

② 大正三年

〔説教講話集〕「昭憲皇太后ノ崩御ヲ悼ミ奉ル」のうち(36頁)

③ 同

『白金学報』第三三号、井深梶之助著「昭憲皇太后の崩御を敬悼し奉る」のうち(37頁)

④ 同

⑤ 大正四年

〔説教講話集〕「何故ニ宗教ヲ必要ト為ス乎」のうち(37頁)

⑥ (大正七年)

〔説教講話集〕「実業ト基督教」のうち(39頁)

⑦ 昭和二年

〔井深日記〕(ID1201610441)一〇月八日記載カ(43頁)

⑧ 昭和三年

〔説教講話集〕「ラヂオ修養講座 イエスキリストノ神観ニ就テ」のうち(52頁)

⑨ 同

⑩ 同

〔説教講話集〕「クリスチアンハ何ヲ信ズルカ」のうち(55頁)

〔説教講話集〕「今は眠より覚むべき時なり」のうち (56頁)

⑩ 昭和五年

〔井深日記〕 一月二三日条 (59頁)

⑩は、当時井深の書道の師でもあった秋葉省像によつて揮毫された「目に見えぬ」の御製が、井深を通して長崎の東山学院草野芳槌へ送られている様子⁽¹⁶⁾がうかがえる。その経緯は不明であるが、このように明治天皇御製が揮毫され、人々の間でやりとりされている意味は何であろうか。そしてそもそも井深が当該歌を引用するのは何故なのか。

明治天皇の御製について、註釈をほどこしたものに小山左文二著『通俗聖歌謹釈』(松邑三松堂、一九一二年)がある。書名に「聖歌」とあるように、御製そのものが「神聖な歌」として捉えられていたことが分かる。「目に見えぬ」の当該歌も所収しており、次のような註釈がほどこされている。

(大意)「目には見えない神様の御心に通つて神様も御感応あらせられるのが、人の心の誠といふものであるぞよ。」といふほどの御こゝろで、「誠の心には、神様も感応しますますものであるから、人々皆この心を守つて、失はぬやうにせねばならぬぞよ。」とお諭しになつた有り難い御製でございます。諺に「正直の頭に神宿る。」といひ、菅公の歌に、「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らん。」とあるのも、その意味はつまりこの御製と同じでございます。

また、佐佐木信綱編『明治天皇御製集』(改造社、一九二九年)四四一頁「明治天皇御製集謹解」における当該歌の解説には、

至誠はただちに神明と感応するところを詠ませ給へり。天皇の御製は御聖徳と御人格との自然の発露にして、吾等国民に遺し給へる金玉の聖藻は、いづれも永久に欽仰し奉るべきものなるが、中にも「浅みどり晴れ渡りたる大空の」、「わが心およばぬ国の果までも」、「四方の海皆はらからと思ふ世に、」及、この目に見えぬの御製の如きは、天地の心直ちに大御心に響きしものときこえ奉るべし。

とあり、明治天皇御製が「吾等国民に遺し給へる金玉の聖藻」と褒め称えられ、その中でも「目に見えぬ」の当該歌は、「浅みどり」「わが心」の和歌とともに特別視されていることが分かる。

この御製は、キリスト教育者の井深にとつて、また別の意味も持っていた。③に掲げた『白金学報』第三三号の中で、井深は、昭憲皇太后の和歌「一人のみ思ふ心のよしあしも照し分くらん天地の神」に対して、明治天皇の御製「目に見えぬ神のこゝろに通ふこそ人のこゝろのことなりけり」と「好意対の教歌」であると述べている。

井深自身が「目に見えぬ」の御製を「教歌」と捉えていることに着目したい。教歌とは、人を教え導き、また、道徳的・思想的な影響を与えて望ましい方向に進ませるための教訓的な内容を分かりやすく説いた和歌のこと⁽¹⁷⁾で、道歌と同じような意味合いを持つ。

『女学雑誌』(五〇四号、一九〇〇年)雑録「社外詠草を待つるの微旨」に「歌の徳は天地をも動かすと云へり〔中略〕其子に教訓を与へんとする時など、累々たる数百言よりも、一首の血涙を吐かば、終生忘るゝことなるべし」とあるように、和歌には文章や口語表現にはない独特の力があると考えられていた。井深もこうした「歌の徳」に依拠して、明治天皇の御製を説教等の場で多用したものと思われる。

四、聖書俳句集について

本書に収めた井深樞之助自筆「聖書俳句集」二種について、それぞれの書誌を記す。

I. 「聖書俳句集」(ID1201610469) ↓口絵写真4参照

作成年は昭和十一年二月二十六日から同年三月一日頃。縦二〇糎、横一五・六糎のノート一冊。ノートの表紙に「PRINCE NOTE BOOK」と印刷されている。本来横書き用のノートを縦書きに使用。全二〇句を収める。一頁目右下に「井深湧泉」の落款あり。本文は表頁のみ記入され、頁右上に井深による頁数が13まで付されている。以降の頁は空白。

II. 「聖書俳句集」(ID1201610120)

作成年未詳。縦二〇糎、横一六・三糎のノート一冊。ノートの表紙に「NOTE BOOK」[SI.]と印刷されている。本来横書き用のノートを縦書きに使用。全九句を収める。本文は五頁表で終わり、以降の頁は空白。説教・講話の原稿と思われる用紙三枚が挿入されており、冒頭に「聖書トソノ道徳的感化 聖書の話」と題して書きはじめられているが、原稿は途中までが残存している状況。内容に「今回銀座四丁目ニ聖書館ガ立派ニ落成致シマシタノデ」とあることから、昭和八(一九三三)年に書かれたことが分かるが、「聖書俳句集」の作成年代との関わりは不明。

I・IIの内容は、Iの冒頭に井深自身が「昭和十一年二月廿六日より聖書之史実若クハ記事ヲ背景トシテ取入レタル俳句ノ真似」と記しているように、聖書に基づいて井深が自ら作った俳句を収め、それらに簡単な解説を付したものである。IIに記された九句のうち七句は、解説も含めIとほとんど同じ内容。I・IIいずれも、本文に修正が加えられてい



II 「聖書俳句集」冒頭部分

ること、および頁数が途中であることから、草稿の段階であることは疑いない。ただし、Iの冒頭に「昭和十一年二月廿六日より若クハ…ル俳句ノ真似」と記されているのに対し、IIの冒頭には「聖書俳句集」と明記され、「一 旧約聖書之部」と部立てをしていること、ならびに解説部分の頭に「註」という言葉を据えるなど、IよりIIの方が、一書として整えようとする意識がうかがわれる。また、自らの俳句に註を付すという行為のもとには、他人に見せることが前提としてあったようにも思われ、「俳句集」と言えるくらいのまとまった句数を想定して、日々句作を重ねていたのではないかと推測される。いずれにしても、井深の「聖書俳句集」は残念ながら完成を見ることなく途絶したことを、この二冊のノートが物語っている。

「明治二十三年渡米日記」のあとに記された古歌について

本書に収録した二四首の古歌について触れておきたい。

二四首の古歌が書かれているのは、縦一八・一種、横二三種の和綴の冊子である。⁽²²⁾ 全一五〇丁。一丁表の一行目に「渡米日記 日本東京 井深梶之助」とあり、井深が留学のために米国へ出発する明治二三（一八九〇）年八月九日から、留学先のユニオン神学校に到着する九月一日までの記録が一五丁裏の一行目まで書かれている。二行目から最終行までは何も書かれず、一六丁表一行目から和歌が始まり一八丁表の四行目で終わる。それ以降の一三二丁は何も書かれていない。渡米の記録と和歌は、いずれも井深の自筆である。双方が同時期の筆蹟か否かは判断しがたいところであるが、墨色等から、おそらく異なる時期のものと思われる。

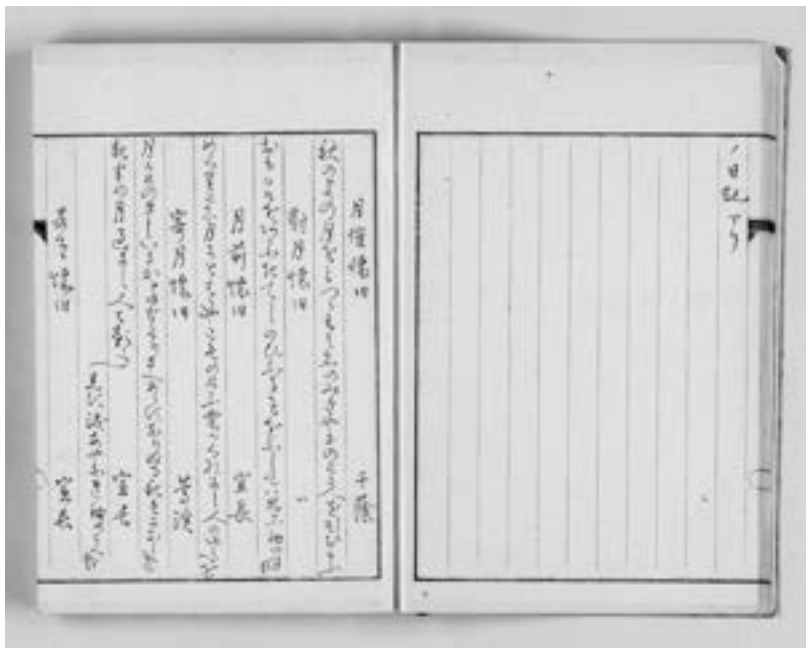
なぜこの場所に二四首の古歌が記されているのかについて、資料そのものにも、また他の資料でも記載を見出せないため、現在のところ不明と言わざるをえない。したがって、ここでは、井深によって書き記された古歌そのものに着目してみたい。

井深が二四首の歌題・作者・和歌を記憶で書いたとは考えにくい。恐らく何かの歌集を見ながら、心に留まった和歌を書き記したことが推測される。結論からいうと、書き記された和歌は、『類題草野集』⁽²³⁾からの抜き書きであると考えられる。⁽²⁴⁾ 『類題草野集』とは、文政五（一八二二）年、加藤千蔭門下の木村定良によって編纂された和歌初学者のための類題集で、下河辺長流・契沖・荷田春満・賀茂真淵ら江戸期の古学者・国学者をはじめ、小沢蘆庵・伴蒿蹊ら京の歌人の歌を四季・恋・雑に類題したものである。一万一一〇三首を収める。

二四首は、歌題・作者・和歌ともに、この『類題草野集』下巻・雑部にある二二首と恋部にある二首とほぼ同じである。二四首の排列について見てみると、本来の恋・雑の部立が逆になっているが、歌順そのもの

は、おおよそ『類題草野集』の排列に添った順番となっている。

二四首を一覧して、まず目に留まるのが、「懐旧」を含む組題の多さである。『類題草野集』の「懐旧」題は、素題の「懐旧」から始まり、組題の「月前懐旧」「対月懐旧」など全五八種が掲げられ、一〇八首の和歌の頭に置かれて列記されている。これら一〇八首の「懐旧」題の中



『明治二十三年渡米日記』のあとに記された二四首の冒頭部分

から井深が一六首を抜き出したことになる。

「懐旧」題の本意は昔をなつかしみ、慕いしのおこと。中世後期・近世期の家集では、老人が若き日をしのぶ歌のほか、人の忌日に詠まれた歌が散見される。『類題草野集』が典拠としたと思われる各家集を見てみると、たとえば、356番歌の初出である『鈴屋集』一五〇二番歌の詞書には「人の一周忌に、月を題にて」とあり、忌日に詠まれたことが分かる。

また、356番歌に見える「こそこのけふ」も、人の亡くなった翌年に詠んだ歌に使われることが多い。⁽²⁵⁾井深が知人の亡き夫人の一周忌に際し贈った和歌にも「去年の今日」が用いられる(33番歌)。「こそこの夏」(366番歌)、「過し」とせ」(371番歌)等も、詠者が一年前あるいは、この一年間を思いやっていることを示している。「其名のみさや(まやか)にのこる人」(354番歌)・「過にし人」(358番歌)・「ともにき、つる人ハなき」(366番歌)・「わすれえぬおもかけ」(371番歌)・「ともにみし人もやとりもなき」(373番歌)などは、既に眼前にいない特定の人を読み手に想起させることばである。また「雲かくれにし人」(356番歌)は亡くなった人のこと。小野古道の詠んだ374番歌に見える「からころもたちぬふ人」は妻のことであるが、『小野古道家集』⁽²⁶⁾の詞書によると「妻のなくなりにしを悲しみて」とあり、亡くなった妻を詠んだことが知られる。「手枕」(370番歌)・「よがたり」(359番歌)は、和歌の世界では男女の仲をイメージさせる言葉として用いられる。

以上のことを踏まえて考えると、想像の域を出ないが、井深が『類題草野集』から抜き出した和歌からは、一年前に亡くなった妻勢喜子への思いが見て取れ、その心のうちを代弁するような和歌が抜き出されているように思われる。

勢喜子の一周忌にあたる明治三二年三月二〇日の日記に井深は次のよ

うに記している(23頁)。

昨年今夜ノ日記ヲ読ミ断腸ノ思アリ、深更ニ至リテ眠ル不能

去年のけふひちの小衣ぬきすて、天津御国に入りし人はも

ここでも「去年のけふ」ということばが用いられ、356番歌の「雲かくれにし人」と同じく、亡くなった人を表す「天津御国に入りし人」が使われていることは注意される。

「明治二十三年渡米日記」を書いた残りの頁に、井深が和歌二四首を書いたのは、特別な意味はなく偶然であったかもしれない。ただし、こゝも考えられる。明治三年の留学は井深の初めての渡米の経験でもあり、既に勢喜子と結婚して一〇年目を迎えていた。子どもも四人生まれ、勢喜子のお腹のなかには五人目の子どもを授かっており、渡米中、父母とともに勢喜子への手紙のやりとりも頻繁であった。⁽²⁷⁾こうした当時の記憶が『明治二十三年渡米日記』へと井深を向かわせたのかもしれない。

井深は歌人でない。彼の心のうちをすべて歌に託せるほどの力量があったわけではない。そのため井深は、自らの心情を代弁するような和歌を『類題草野集』から書き出したのではなかったか。同時にそれは井深が自らの気持ちを表現する一方法だったのではないだろうか。⁽²⁸⁾

井深には和歌の師匠がいたわけでもなく、歌会などに参加した形跡もみられない。本書に収録した井深の詠草は一四六首である。井深の周辺において、歌集も残している真野文二・児島三郎・奥野昌綱に比べると、井深のそれは少ないと言わざるをえない。しかし、『書簡集』に見える

井深宛の書簡には、先方によって書かれた「返歌」「御歌を拝見」などの言葉が散見される。したがって、本書に収録した以外にも、井深の詠んだ和歌などの韻文は、まだまだ存在していた、あるいは今もどこかに存在しているものと思われる。

井深梶之助が人生の航海の中で詠じた韻文の数々が、今後、本書をきっかけとして更に見い出されることを心より願う次第である。

註

(1) 『明治学院五十年史』(鷺山弟三郎著、明治学院、一九二七年)二二七頁。

(2) 『明治学院時報』第八六号(一九三九年八月二〇日発行)「井深先生快方に向はる」による。

(3) 井深の周辺に目を向けてみると、新島襄が江戸を発って品川沖から函館に向かう際に詠んだ「錦きすばいかに帰らし古郷を思わす思ふけさの嵐に」および「武士乃思ひ立田の山紅葉にしきささればなと帰るへき」(『新島襄自伝 手記・紀行文・日記』八八頁、同志社編、岩波書店、二〇一三年)や、下田歌子が明治四(一八七二)年四月九日に詠んだ「綾錦着て帰らずば三国山またふたたびは超えじとぞ思ふ」(『下田歌子先生伝』九七頁、故下田校長先生伝記編纂所、一九四三年)と詠んだのも同様の例といえよう。

(4) 『書簡集』二九四頁によると、この後にも大儀見元一郎との和歌の贈答があった形跡は見られるものの、井深の詠草は現在のところ不明。

(5) 当該歌の詠まれた背景については、松本智子「井深梶之助、俄かに歌読みとなる」(『明治学院歴史資料館 News Letter』No.12 二〇二一年三月)参照。

(6) この「青海原」の和歌には異同がある。第二句が日記と講話集では「船はいづこに」となっているのに対し、書簡では「いづこに船は」となっている。書簡を書く際に推敲したようであるが、最終的には「船はいづ

こに」に落ち着いている。また、第四句が日記では「天つみ神の」になっているのに対し、書簡と講話集では「天つみ親の」となっている。何れも天上の神を指しており、「船はいづこにまよふとも」常にその神の御手によって導かれるという意を詠じている。

(7) 「夜もすがらとまもる月をまくらにてうちもねられぬ浪のおとかな」(『風雅集・九二二番歌・従三位基輔』の「まくらにて」の「にて」のように状態を表すことが多い。

(8) 例えば、「あさなあさな野べの霞をながめつつけぶりになりし人をこそおもへ」(『続詞花集・三九〇番歌・賀茂成助』)など。

(9) 用例を見ると、「荒れはててあやめもわかぬふる郷にひとり時しる軒のたち花」(『宗尊親王百五十番歌合・九一番歌・宗尊親王』、「萩のこゑひとりさやけし鳴く虫もおのがさまま秋をつくれど」(『後水尾院御集・一三三四番歌』)などがあり、「ひとりさやけき」まで調査範囲を広げてみると、「つきおそき峰の雲間を光にてひとりさやけき夕づつの影」(『芳雲集(実隆)・四一四六番歌』)のように結句が井深の和歌と同じく「の影」で終わる歌も見える。

(10) 井深の叔父にあたる西郷頼母や主君である松平容保も和歌に通じ、また井深が自身の回顧録で「習字の手本は、手紙の文例、願書の書式、唐詩の行草体及び和歌等で、極めて実用的であった」(『井深梶之助とその時代』第一巻、八頁、井深梶之助とその時代刊行委員会編、明治学院、一九六九年)と述べている通り、幼い頃から和歌に触れる機会は多かったと思われる。

(11) 井深の周辺のキリスト者、例えば、奥野昌綱や松山高吉にも同様の例は見られる。なお、奥野の和歌は『奥野昌綱先生略伝並歌集』(黒田惟信編、一粒社、一九三六年)、松山の和歌は『松山高吉史料選集 第三巻』(松山高吉史料選集編集委員会編、かんよう出版、二〇二二年)参照。

(12) 近代和歌史におけるキリスト教の問題については、既にいくつかの論考がある。兒山敬一「キリスト教短歌史論」(『城戸幡太郎編』『日本精神史論纂』、岩波書店、一九三五年)、小林幸夫「明治和歌とキリスト教」『聖

詠』の問題―(上智大学国文学論集、二〇〇四年)、小林修典「信仰を詠んだ人々―キリスト教短歌に関する文献の解説」(『キリスト教文化研究』所収)三一、二〇〇九年)参照。

(13) 当館所蔵資料ID1201610393。

(14) 『井深日記』の十一月二十六日条には、米沢市中を三浦氏と見物したところ、上杉勝持氏方へ転宿したことは記されているが、鷹山の遺文を見たことなどは記されていない。

(15) 『特別展 上杉鷹山の財政改革―国と民のしあわせ』(米沢市上杉博物館、二〇一二年)八頁参照。「壁書」は鷹山が跡継ぎの顕孝付の家臣に教育方針を示したものの。

(16) 他にも、「目に見えぬ」の和歌であるかどうかは定かではないが、『井深日記』昭和五年九月一〇月二十五日条には秋葉が明治天皇の御製を皇后の和歌とともに揮毫していることが記されている。また、当該歌ではないが、井深も明治天皇御製を揮毫して身近な人に贈っている(266番歌)。逆に、明治天皇の歌を贈られることもあった(『書簡集』二九四頁、井深梶之助宛大儀見元一郎書簡)。

(17) 『家庭週報』第六五六号(一九二二年三月二十四日)に掲載の「故大隈侯爵追悼会」の記事には、開会に先立って、「聖歌「目に見えぬ」を拝唱した」との記述がある。明治天皇の御製には、当該歌と同時期に詠まれた「目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり」があるため、右の記事中の「目に見えぬ」の和歌を当該歌と特定することはできないが、ここでも明治天皇の御製に対して「聖歌」と称していることが確認できる。

(18) 明治三七七年の明治天皇御製「あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな」のこと。「明治天皇御製集謹解」中で第二句を「晴れ渡りたる」とするのは誤りか。

(19) 明治三六年の明治天皇御製「わがこ、ろおよばぬ国のはてまでもよるひる神は守りますらむ」のこと。

(20) 道徳的な教訓をわかりやすく説き、精神修養のことを詠んだ和歌。仏

教や心学の精神を詠んだ教訓歌。

(21) 松澤俊二「よむ」ことの近代 和歌・短歌の政治学(越境する近代一一、青弓社、二〇一四年)第三章 明治天皇「御製」のポリテクスでは、日露戦争期以降、「御製」を教訓として読み、他者に示す人々も現れていること、また「御製」が「教訓的な御歌」として示され、人々の「心」を陶冶する手段として広宣されたことなどを指摘している。

(22) ID1201610854。当該資料の渡米の記録部分については、『井深梶之助とその時代』第二巻、一三二頁～一三六頁に翻刻がある。

(23) 木村定良編、文政五年刊。別称、草野集類題、草野集。一二巻一二冊。文政二(一八一九)年永室長翁序・清水浜臣序。

(24) 名古屋市立大学加藤弓枝氏より『類題草野集』からの抜き書きではないかとのご教示を得た。『類題草野集』には、抄出本の『掌中類題草野集』(江戸後期刊)があるが、井深の抜き出した和歌の全ては含まれないことから、『掌中類題草野集』ではなく『類題草野集』からの抜き書きと判断される。加えて、井深が直接『類題草野集』から抜き出したわけではなく、第三者が抜き出したものを転写した可能性も考えられるが、現状としてはひとまず井深自身の抜き書きと判断した。

(25) 例えば、「こそこのけふ」を用いた『秋篠月清集(藤原良経)』一五六七番歌の詞書は「西行法師まかりけるつぎの年、定家朝臣のもとにつかはしける」、また、『うけらが花初編(加藤千蔭)』一四〇六番歌の詞書でも「あね君こそこの正月末うせ給ひつるが、はや一めぐりになりければ」とある。

(26) 佐佐木信綱編、日本歌学全書・続第八編、博文館、一八九九年。

(27) 『井深梶之助とその時代』第二巻、一四〇頁～一九二頁参照。

(28) 同様の行為は、『井深日記』明治三一(一八九八)年八月二〇日条にも見える。これもやはり勢喜子が亡くなったあとで、古い書翰類を虫干ししていた井深は「種々ノ感ヲ起」し、古歌二首を日記に書き付けている(31・32番歌)。もとの歌集によると、それぞれ「人のなきあとにふるき文を見いだしてよめる」、「哀傷」となっており、亡き人への思いが詠まれていることは明らかである。

資料編1 井深樞之助関係韻文資料集成

明治一五年（一八八二）

〔説教講話集〕(D1201610160) 明治一五年一〇月二日於東京青年会

〔「パンティズム」ヲ論ズ〕のうち

神ハ万物ノ外ニアル者ラズ、世界ノ中ニアル者也、実ハ宇宙ニアル者ハ皆神ノアラハレニシテ神ノ外ニハ一物モナキ者也、神ト云フ者ハ我、彼ノ意識ナキ者也、唯自ラハ目ニモ見ヘザレトモ能ク万物ニリウ通シ万物ノ中ニ現ハル、所ノ洪大器量ノ精氣ノミ、譬ヘバ春陽ノ環来ル時ハ草木ノ花トナツテ現ハレ凋メバ元ニ帰ル、人ニアツテハ其精神トナツテ能力ヲ現ハシ死スレバ亦元ニ帰ルコト、器ニ盛テ海中ニ置キ、器破ル、時ハ其水ノ大海ト合一シテ最モヤ其形状ヲ存セザルガ如シ、或ル心学者ノ歌ニ

¹ 身ハふいごいでいる息ハ風なれや打はりみれば風も火もなし

と詠置シハ蓋此心ヲ詠シ者ナラカ

〔説教講話集〕(D1201610272) 明治一二年六月二四日於明治学院ほか

〔信仰の善戦〕のうち

昔ヨリ人ノ生涯ヲ様々ニ譬ヘタリ、或ハ之ヲ旅路ニ比シ或ハ之ヲ船路ニ譬ヘタリ、之ヲ旅路ニ比シタル心ハ人ノ生涯ハ艱難危険ノ元素ヲ含ムコトヲ示シタルモノナラン、譬ヘバ行路難非海非山却在人情反覆間ト云フ如シ、又之ヲ船路ニ譬ヘタルハ蓋其変動常ナラズ浮沈定リナク行末サヘ知り難キコトヲ歎キタルモノナリ、例ヘバ

1 江戸時代後期の心学者布施松翁（一七二五—一七八四）の聞き書きをまとめた『松翁道話』第五編卷之中（一八六四年刊）に、「稲荷大明神御託宣に」として当該歌が見える。第四句「打わりみれば」。

² 世の中ハ何にたとへん朝ぼらけ漕行舟のあとの白浪

と詠ミタルガ如シ

〔説教講話集〕(D1201610240) 明治二十二年二月八日於数寄屋橋教会

〔キリスト教徒ノ生命〕のうち

釈迦ハ天上天下唯我独尊ト呼ヒタリト云フ又仏徒ハ之ヲ世尊トモ仏トモ崇ムベシ、然レトモ

³ ほとけももとは凡夫なり凡夫もさとれば仏なり

と云フニ非ズヤ、夫レ釈迦ノ教ハ解脱ノ教ナリ、悟ノ道ナリ、故ニ誰レニテモ悟レバ即チ仏トナルヲ得ルナリ、故ニ尊キ者ハ釈迦自ラヨリモ其菩提樹ノ下ニ發明シタリト云フ悟リノ法ナリトス

明治二十四年（一八九一）

〔説教講話集〕(D1201610143) 明治二十四年一月

〔山上教訓講義〕のうち

第四節、哀。む。者。は。福。な。り。、其。人。は。安。慰。を。得。べ。け。れ。ば。な。り。、

世ノ諺ニ曰、笑フ門ニハ福来ルト、キリスト曰哀ム者ハ福ナリト、世間ノ諺トハ正反対ナリトス、然レトモキリストノ所謂哀レム者トハ何ノ意味ナルヤ、〔中略〕夫レ人が神ノ前ニ在テ虚心自ラ省ル時ハニハ先ヅ第一ニ感ズルコトハ徳ニ乏シキコトナリ、是レ第一ノ感覺ナリトス、第二ニ感ズルコトハ即チ我性情ノ悪シキコト既ニ神ノ前ニ在テ自ラ

² 『拾遺集』一三二七番歌・詞書「題しらず・作者「沙弥満誓」・初句「世の中を」。

³ 『平家物語』では、白拍子の祇王が清盛の命で舞を舞う際に歌った今様として「仏も昔は凡夫なり 我らも終には仏なり」と見える。岩波新日本古典文学大系『平家物語』下(梶原正昭、山下宏門校注、岩波書店、一九九三年)に収録されている「諸本異同解説」では、当該部分における諸本間の異同はない。井深の記す本文の典拠は不明であるが、井深と同時代を生きた小泉八雲(一八五〇—一九〇四)は「仏教に縁のある日本の諺」(『小泉八雲全集』第六巻所収、第一書房、一九三一年)の中で、「仏も元は凡夫」と「凡夫も悟れば仏なり」をそれぞれ立項し、これらを「国民の俚諺的な言葉」と記している。

罪人タルコトヲ知ラバ豈之ガ為ニ悲哀マザルヲ得ンヤト、誠ニ然リ、然レトモ竊ニ思フニキリストノ意味尚一層広遠ナルガ如シ罪惡ノ為ニ哀ムハ勿論ノコトナレトモ、単ニ罪惡ノ為ニ哀ムノミナラズ凡テ靈魂上ノ開發ニ於テ辛苦艱難ニ逢フ者ノ義ナルベシ、水戸黄門公ノ狂歌ニ曰、

⁴ 詩ハ唐詩歌ハ古今ニ住バ江戸楽シタヨリハ苦勞シタ人

ト、一寸人情ヲ穿チタル狂歌ナリ、若シ吾人ヲシテ完全無欠ノ人間タラシメバ哀ハ全ク無用ノ長物ナラン、然レトモ實際肉慾ノ厭制束縛ヲ免レント欲シテモガキツ、アル所ノ吾人ニハ悲痛憂哀ハ吾等ヲ真理ニ導クノ手引トナルナリ、蓋吾人ハ艱難辛苦ニ逢フテ初メテ吾ガ靈性ノ需用ヲ發見スルモノナリ、

明治二九年（一八九六）

〔井深日記〕明治二九年一月二日

本年御歌始寄山祝ノ題ニテ読タル人々ノ中ニ、神奈川県津久井郡長宇高某ノ歌ニ

⁵ 君か代の千とせを祝ふ言のはのちりも積りて山となるらん

〔井深日記〕明治二九年八月二〇日

日没後保田橋上ニ於テ納涼ス、当地ノ船歌一首ヲ聞ク

⁶ 鳥も通はぬ八丈が嶋へ やらるゝわが身はいとはねど

あとにのこりし妻や子が どうしてその日をおくるやら

4 〔説教講話集〕本文に水戸黄門の狂歌とあるが、出典未詳。井深が著した「山上教訓 第四回」〔福音新報〕第六号、一八九五年八月九日、九五頁）にも「或人の狂歌に」として当該歌が見え、「実に人は楽したよりは苦勞した人こそ話の出来るものなり」と記されている。

5 『東京朝日新聞』（一八九六年一月二二日）一頁「歌御会始詠進」の項に預撰歌として掲載。作者は「神奈川県津久井郡長正八位宇高正郎」。

6 「八丈追分」として伝わる民謡。〔井深日記〕によると、井深は同年八月一四日に霊岸島から船に乗って、対岸の房総半島にある保田を海水浴のため訪れている。

〔説教講話集〕(D1201610222) 明治二十九年九月十三日於明治学院ほか

〔明月二対スルノ感〕のうち

学生諸君、諸君ハ必ラズ一昨夜ノ明月ヲ眺メタルナラン、独リ諸君ノミナラズ東京百三十万ノ市民―盲目ノ人ハ是非モナシ、凡ソ具眼ノ人ニシテ一昨夜ノ明月ヲ眺メザルモノハ稀ナルベシ、試シニ問ハン、都下百万人ノ人民ハ如何ナル心ヲ以テ此月ヲ眺メタランカ、或ハ旧例ニ従ヒ月前ニ、ス、キ、尾花ヲ飾リ、柿栗団子ヲ供ヘ且食ヒツ、余念ナク明月ヲ眺メタル人モ多々アラン、〔中略〕或ハ此ノ如キ殺風景ヲ厭ヒ明月ノ下ニ独坐シテ

⁷ つくく〜とひとり向へバ我か身さへ月の中なるこ、ちこそすれ

⁸ 月みれば千々に物こそかなしけれ我が身ひとつの秋にはあらねど

トカロチタル歌人モアラン、諸君ハ如何ニ感ジタルカ、或ハ何ノ感モ起ザ、リシカ、是レ余ノ聞カント欲スル所ナリ、

明治三〇年（一八九七）

〔説教講話集〕(D1201610392) 明治三〇年一月一〇日於日曜日朝〔説教〕

〔タイトルなし〕

新年ハ何故ニ目出度乎、

十休和尚狂歌ニ田々閉松小冥土ノ途ノ十里塚田出度モアリ田出度モナシト、〔削除〕

蓋此問題ハ単ニ新年ノコトノミニ非ズ、元来人ノ世ニ生ル、ハ目出度コトナルカ否哉、是レ抑モノ問題ナリ、何トナレバ人生ソノ物ニシテ禍ナラシメバ如何ニシテ新年ヲ賀シ喜ブコトヲ得ンヤ、之ニ反シテ人生ニシテ既ニ幸福タラシメバ新年ヲ賀スベキノ理由モ

⁷ 『三草集(松平定信)』四九九番歌・詞書「月をよめる」。

⁸ 『古今集』一九三番歌・詞書「これさだのみこの家の歌合によめる」・作者「大江千里」、および『百人一首』二三番歌。

又存スベケレバナリ、然ラバ人ノ生命又ハ此世界ハ如何ナルモノゾ、賀スベキ乎将タ吊
スベキカ、古人ノ狂歌ニ

9 門松ハ冥土ノ旅ノ一里塚目出度モアリ目出度モナシ

ト、蓋シ世界―人生ハ一大謎語ナリ、故ニ見ル人ノ心次第ニテ色々ニ解セラル、或人ハ
世界ヲ非常ニ味気ナキ処ニ思フナリ、祇園精舎ノ鐘声ハ諸行無常、盛者必衰、会者必離
ノ真理ヲ告ルモノトナス、人生ハ夢幻泡沫、¹⁰露ト置キ露ト消なんモノトナス、

11 世の中ハ何にたとへん朝ほらけ漕行く舟の跡のしら浪

全ク意味モナク目的モナキモノトス、若シ人生此ノ如キモノナラバ、新年ハ決シテ賀ス
ベキモノニ非ルベシ、是レ所謂厭世主義ニシテ、仏教ノ如キ即チ是レナリ、

〔井深日記〕明治三〇年五月一〇日〔欄外〕

湯谷磋一郎氏ハ左ノ三首ヲ送ラレタリ

12 あめりかの高根に遠く時鳥なのるやいかにさやけかるらむ

13 はるくと八重の潮ちも安けらくさきくいましてはやかへりませ

14 あめりかのそらまではれて匂ふらん大和嶋根の有明の月

〔井深日記〕明治三〇年五月二日

曇天北風起り、寒気大ニ加ル、船又動揺ス、終日室内ニアリ食堂ニ出ルコト不能

*なかくに浪風あらしきの海を誰か太平とよびそめにけむ

9 原本では、二頁前に「一休和尚狂歌ニ曰ク」として一度当該歌が書かれているが、波線で消されている。再度この場所に記されるものの、「一休和尚」の部分が「古人」に変更されている。一休禪師の歌として、古くは上句のみ、あるいは下句を「馬駕籠もなく泊りやもなし」の本文で流布する。当該歌の形は、野花散人著「一休禪師諸国漫遊記」（立川文明堂、一九一一年）などの講談本や衆善会編「古今禅林佳話集」（衆善会、一九二〇年）、小西重直・石井蓉年選「一休禅師物語」（ヨウネン社、一九二九年）などに見える。

10 「露ト置キ露ト消」は豊臣秀吉の辞世の和歌「露とをき露ときえぬる我身かなにはの事は夢のよの中」からの引用。当該歌は大田南畝著『塩尻』（卷七六「秀吉聚楽落慶の時のうた」）や、同「半日閑話」（卷二二「太閤秀吉一首之事」）などに見える。

11 ↓2参照。

12 井深は、一八九七年五月八日、米ノースフィールドで開かれる万国学生基督教青年同盟会議に日本学生基督教青年会同盟の

〔井深日記〕 明治三〇年五月二十九日〔欄外〕

*¹⁶ さなきだにうきは旅路の常なるを行衛も知らでまよふ船かな

*¹⁷ 青海原船はいづこにまよふとも天つみ神のみ手ははなれじ

〔井深日記〕 明治三〇年六月七日〔欄外〕

*¹⁸ たこまなだ日の入るときぞしきしまのふじの高根の夜明なるらん

*¹⁹ 三千里なかきたびちも恙がなくなこまのさにつけるうれしさ

〔明治三〇年六月八日付井深せき子宛井深梶之助書簡〕 (ID1201610694)

自分事不幸にして未だ曾て和歌を学候事なし、然るに此度の航海にて苦敷マギレに俄に歌読みとなり候間、一二首御覧に入候。

海上不穩

*²⁰ なかなか浪風あらしき大うみを誰か太平とよびそめにけん

蒸気機関やぶれて三日三夜大洋の真中にさまよえるとき

*²¹ さなきだにうきはたびぢの常なるをゆくゑもしらでまよふ船かな

又

*²² 青海原いづこに船はまよふともあまつみ親のみ手ははなれじ

代表として出席するため横浜港より出航。『福音新報』第九八号（一八九七年五月一四日）によると、渡米する井深の送別会が五月九日に開かれ、その席上で湯谷礎一郎から和歌三首がはなむけとして贈られた。

¹⁵ ↓¹² 参照。井深が乗船したパサン号は出航翌朝より悪天候に見舞われ、強い波風によって激しく揺れるなど、航海は困難を極めた。この時の航海および井深の詠んだ和歌については、松本智子「井深梶之助、俄に歌読みとなる」〔明治学院歴史資料館News Letter〕No.12、二〇二一年三月）

参照。
¹⁶ 参考「ゆらのとをわたるふな人かちをたえ行へもしらぬ恋のみちかな」〔百人一首〕四六番歌・作者「曾禰好忠」。

¹⁷ 参考「しばしこそうきよのやみにまよふともつひに心の月はくもらじ」〔統現葉集〕七七一番歌・詞書「賢聖名字品、捨貪欲意入空道信の心を」・作者「よみ人しらず」。

²⁰ ↓¹⁵ 参照。

²¹ ↓¹⁶ 参照。

〔説教講話集〕(D1201610393)〔明治三〇年一月二十六日頃〕

〔南亭余韻〕のうち

伝国詞

天明五年二月七日御隠居御願済の日被進之

一、国家ハ

先祖より子孫へ伝候国家にして我私すべき物には無之候

一、人民ハ国家に属したる人民にして我私すべき物にハ無之候

一、国家人民の為立たる君にして君のために立たる国家人民には無之候

右三條御遺念有間敷候事

天明五巳年

二月七日 治憲 御華押

治廣殿

机前

²³ なせばなるなさねばならぬなに事もならぬハ人のなさぬなりけり

〔説教講話集〕(D1201610394) 明治三〇年二月八日於水曜日朝〔説教〕

〔上杉鷹山公ノ話(治憲、元徳院)のうち

上杉鷹山公ノ話

十六才ノ時九州ノ或小藩(秋月?)^(アヤ) ヨリ養子トナル、当時米沢藩ノ困憊、治憲ガ政治ノ

大方針、

大節儉 殖産興業、(硯石 硯箱)

儒道ヲ重ス、興謙館ヲ起ス、

22 ↓17参照。

23 上杉鷹山の和歌。原本では、当該部前方に、明治三〇年一月一日から二月一日までの仙台・山形で行われた伝道の記録が記されており、そのうちの一月二十六日条に次のように見える。「三浦氏ト共ニ米沢市中ヲ見物シテ後上杉勝持氏方ニ転寓ス、氏ハ上杉家ノ分家ナリ、鷹山公ノ用ヒタル大小硯二面及ビ南亭余韻ト題スル写本ヲ見ル、感服スベキコト共アリ」。井深は上杉家の分家において、米沢藩第九代藩主・上杉治憲(鷹山)の遺文を編集した『南亭余韻』の写本を実見している。井深が記した「伝国詞」は『南亭余韻』の一部であるが、「なせばなる」の歌は本来含まれておらず、同じく『南亭余韻』の「壁書」等に書かれているもの。ここでは井深自身が「伝国詞」の後に加えた。解題5頁参照。

伝国ノ詞

一、国家ハ先祖ヨリ子孫ヘ伝候国家ニシテ我が私スヘキ物ニハ無之候
 一、人民ハ国家ニ属シタル人民ニシテ我が私スベキ物ニハ無之候
 一、国家人民ノ為立タル君ニテ君ノ為ニ立タル国家人民ヲ無之候
 右ノ三条御遺念有之間敷候事

天明五年巳年二月七日

治憲 華押

治廣殿

机前

²⁴ 為せはなるなさねバナらぬ何事もならぬハ人のなさぬなりけり

明治三十一年（一八九八）

〔井深勢喜子肖像写真〕（ID2201790072）の裏、明治三十一年五月

²⁵ *むさしの海うみよりふかきたらちねのおやのめくみはゆめなわすれそ

明治三十一年五月 井深春子へ

〔井深日記〕明治三十一年六月二〇日

転宅後なき妻のことを思出て、

よまにつけあしきにつけておもふなりもしなき妻のありたらんかは〔削除〕

²⁴ ↓23参照。

²⁵ 当該歌は、一八九八（明治三一年）三月二一日、病により他界した先妻勢喜子（戸籍上はセキ）の肖像写真の裏に井深自身が書き記したもの。松本智子「井深梶之助、妻を思ひて和歌を詠む」（『心清き者は福なり―明治学院と井深梶之助―』明治学院、二〇二一年）参照。

*26 よきにつけあしきにつけておもふかなたよなきつまゆたにあらましかはと

〔井深日記〕明治三一年六月二日

連日霖雨

*27 なき人を忍ふこゝろをおもふてやなほはれかぬるさみたれの空

ほとゝきすをきゝて

*28 物おもふやとのゝきはの五月雨にこゝろしてなけ山ほとゝきす

〔井深日記〕明治三一年六月二日

身まかりぬるつまを思いでゝ

*29 〔すゑ挿入〕 つひにまたあひおふものとしりながらなとかわかれのかくもかなしき

〔井深日記〕明治三一年六月二三日

*30 さのみやはいかでなけかにかきりなきいのちののそみなき人のごと

〔井深日記〕明治三一年八月二〇日

古き書翰類ヲ虫乾シ種々ノ感ヲ起ス

31 あらさらん後しのへともいはざりしことのはのみそかたみなりけり 藤原基政

26 参考「見し人のあらましかはとしのぶかな世にたつきなくなるにつけても」〔季花集（宗良親王）七九二番歌〕。

27 参考「いにしへをしのぶの軒につくづく猶ふるさとの五月雨の空」〔続門葉集〕一六三番歌・詞書「故郷五月雨といふ事を」・作者「前権僧正憲深」。

28 参考「ほととぎす心してなけたち花の花ちるさとのさみだれの空」〔後鳥羽院御集〕四二三番歌・詞書「夏十五首」。「時鳥五月まつまのねをそへて物おもふ宿のね覚にぞ聞く」〔新続古今集〕二四七番歌、「おなじ心を（百首歌）たてまつりける時、聞時鳥」・作者「法眼慶融」。「物おもふやどの軒ばのまくずはら心になる秋かせぞふく」〔沙弥蓮愉集〕四六六番歌・詞書「題をさぐり侍りに、秋恨恋」。

29 参考「うき草のうき世の中としりながらのがれもやらぬ我ぞかなしき」〔永久百首〕五九六番歌・歌題「萍」・作者「大進」。

30 参考「さのみやはつらさにたへてながらへむかぎりある世の命なりとも」〔新後撰集〕一一九八

³² かたらひしきのふはうつ、けふはゆめおもひさためぬよにもあるかな 千蔭

〔井深日記〕明治三一年八月二七日

午後五時より湖幡氏ニ於テ亡妻君ノ一周年紀念会アリ、招カレテ出席ス、即チ二首蜂腰ヲ贈ル

^{*33} 去年の今日浮世をあとに基ある神の都に入りし人も

^{*34} さのみやハ物なおもひそかきりなきいのちの望なき人のこと

明治三二年（一八九九）

〔説教講話集〕(D1201610401) 明治三二年（一〇月二日）

〔倫理講話〕のうち

愛日

淮南子曰 聖人不^レズ貴^ニ尺璧^一而貴^フ二尺寸之陰^一

陶淵明詩 盛年不^ニ重^テ 来^一 一日難^ニ再^ビ 晨^{ナリ}

及^レ時^ニ 当^ニ勉^ス 勵^一 歲月不待人

少年易老学難成 一寸光陰不可輕

未覚地塘春草夢 庭前梧葉既秋声

古語曰 天地有万古 此身不再得

人生只百年 此日最易過

古今集

番歌・詞書「百首歌奉りし時、おなじ心（恨恋）を」、作者「平宣時」。

³¹ 『続後撰集』一二七三番歌・詞書「人のなきあとに、ふるきふみを見いだしてよめる」・作者「藤原基政」、結句「かたみなりける」。

³² 『うけらが花初編（加藤千蔭）』一三八六番歌・詞書「嘯月がにはかにやみて六月十七日にみまかりければ」、第二句「きのふやうつ」・第三句「けふやゆめ」。『類題草野集』雑部にも所収。

³⁵ きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよきて秋風のふく

愛日ノ意義如何、其理由如何?^(マ)

〔井深日記〕明治三二年二月四日

本多君ヨリ左ノ一首ヲ添ヘテ神戸通信ヲ送来ル

³⁶ 花の山梢にすかり入みれは霞とみしは匂ひなりけり

〔井深日記〕明治三二年三月六日

神戸へ返書ヲ認ム、一首ノ歌ヲ送ル

*³⁷ さま／＼のはなはあれどもマイオンハナにまされるはなぞよになき

〔井深日記〕明治三二年三月七日

一首ノ歌ヲ讀デ送ル

さま／＼の花はあれども my own Hana にまされるはなぞよになき〔削除〕

〔井深日記〕明治三二年三月二〇日

昨年今夜ノ日記ヲ讀ミ断腸ノ思アリ、深更ニ至リテ眠ル不能

*³⁸ 去年のけふひちの小衣ぬきすて、天津御国に入りし人はも

35 『古今集』一七二番歌・詞書「題しらず」・作者「よみ人しらず」。

37 〔井深日記〕翌日条に、削除されているが同歌が記されており、そこでは「マイオンハナ」が「my own Hana」となっている。

38 歌中の「人」は前年の同日（一八九七年三月二〇日）に死去した先妻の勢喜子。〔井深日記〕によると、この翌日、井深の父宅右衛門の三回忌とともに勢喜子の一周忌が行われた。

明治三五年（一九〇二）

〔説教講話集〕(D1201610405) 明治三五年一月四日於講話

〔薩摩琵琶「石童丸」ノ曲ヲ聞クノ所感〕のうち

第一、其厭世主義、即チ無常ヲ觀シテ逃世スルト云フコト、此曲ノ冒頭ノ語ニ曰ク、九州ノ探題加藤重氏ハ「無常ヲ觀ジ」云々、此話ノ「キーノウト」ナリ、基礎的觀念ナリ、是レ其不健全ナル分子ノ第一ナリ、固ヨリ吾人ハ往古乱世ノ時代ト現今ノ昭代トノ區別ヲ知ラザルニ非ズ、西行法師ノコト

³⁹ 取レバウシ取ラネバ人ノ数ナラズ棄ツベキモノハ弓矢ナリケリ

第二、加藤重氏ガ父子ノ關係ヲ無視シタルコト、即チ石童丸ハ我が実子ナリトノ確証ヲ認メナガラ之ヲ認ケルヲ拒絶シタルコト、然カシテソハ何ノ為ナルカトナレバ、彼ハ出家逃世ノ身ナルガ故ナリト云フニ過ギズ、豈是レ唯々人情ニ反スルノミナラズ、倫理ニ反スルノ主義行為ニ非ズヤ、元來仏教ノ極意ハ情欲ヲ解脱スルニアリト云フ、「ホトケ」ノ意義、平家物語ノ一節、平清盛ノ寵愛ヲ専ラニシタル岐王^{ママ}岐女^{ママ}ト仏御前トノ話、

⁴⁰ 仏モ元ハ凡夫ナリ凡夫モ悟レバ仏ナリ

云々、

明治三六年（一九〇三）

〔説教講話集〕(D1201610406) 明治三六年一月四日於指路教会ほか

〔至宝〕のうち

39 「太平記」「師直師泰出家事付薬師寺遁世事」所収。作者「薬師寺公義」。

40 ↓3参照。

本邦新年ノ一慣習ニ正月二日ノ初夢ト云フコトアリ、初夢ニ吉夢ヲ見ンガ為ニ宝舟ノ画ヲ床ノ下ニ敷テ寢ルノ慣習アリ

⁴¹ ながきよのとほのねむりのみなめざめなみのりふねのおとのよきかな

ノ一首ヲ宝舟ノ画ニ書添ヘルコト、〔中略〕第一、肉慾ノ満足、吾人ニ肉体上ノ需用アルコト、之ヲ満足セシムルノ結果ハ快樂愉快ナリ、耳目鼻口ヲ満足セシムル是レナリ、肉体上ノ需用ヲ満足セシムルハ一種ノ善タルコト勿論ナリ、然レトモ之レハ最ノ快樂ニ非ルコトハ明白ナリ、一時的ノモノニシテ永久ノモノニ非ズ、且夫レ肉体上ノ需用ハ吾人最高ノ需用ニ非ズ、寧ロ動物ニ近キ所ナリ、然レバ凡テ此需用ニ応スル所ノモノハ最高ノ宝ニ非ルコトヲ知ルベシ、

⁴² 善イ物ハ後ニ柱、前ニ酒、左右ニ女ニ懷ニ金〔補入〕

〔説教講話集〕(D1201610410) 明治三六年四月一九日於指路教会ほか

〔模範的祈祷〕のうち

⁴³ 心だに真の道にかなひなば祈らぬとても神や守らん

ト云フ古歌ハアレトモ、恐クハ神ヲ信ズル者ニシテ祈ラヌ者ハ非ルベシ、否、平素神ヲ信ゼザル者ト雖、人窮スレバ天ニ呼ブト云フ如ク、或時ハ自ラ祈祷ノ念ハ発スルモノナリ、

〔説教講話集〕(D1201610410) 明治三六年四月二六日於指路教会・明治学院ほか

〔模範的祈祷(続)〕のうち

神ノ聖名ノ崇メラレンコトヲ真実ニ祈ル者ハ躬自ラ之ヲ崇ムベキハ勿論ノコトナリ、真

41 『代集』三番歌、「廻文歌といふは、さかさまによむにもおなじ歌」として所収。第二句「とをのねぶりの」。

43 菅原道真の仮託歌集である『菅家御詠集』所収(武井和人著『中世和歌の文献学的研究』(笠間書院、一九八九年)第五章「菅原道真仮託家集・百首研究序説」ならびに第六章「附載翻刻資料―道真家集・百首」参照)。当該歌は道真の歌として近世から近代にかけて流布した。徳富蘇峰著『吉田松蔭』(民友社、一八九三年)の「第十八家庭における松蔭」にも「菅丞相の御歌に」として当該歌が見える。

心ヲ以テ此祈ヲ捧ルモノハ決シテ利己主義ノ人タルコト能ハズ、又卑劣ナル物質的ノ人タルコト能ハズ、必ラズ神ノ国ト其義ヲ求ムルヲ以テ第一ノ本務トナシ、神ノ榮ヲ顯ハスヲ以テ人生終極ノ大目的トナス所ノ人タラザルベカラズ、或人ノ発句ニ

44 のどかさよ願なき身の神まうで

ト云フコトアリ、察スルニ是ハ世間ノ人々が事ノ是非曲互ヲモ顧ミズ猥リニ神信心ト称シテ勝手気儘ナルコトヲ祈ルヲ諷刺シタルモノナラン、然レトモ又ハ未タ祈禱ノ何タルヲモ神ノ何タルヲモ知ラザル者ノ考ナリ

明治三七年（一九〇四）

〔説教講話集〕(D1201610287) 明治三七年四月三日於横浜フェリス女学校

〔敬神ト成功〕のうち

義理人情ヲ無視シ親ノ恩ヲモ兄弟ノ義ヲモ犠牲ニシテ肉欲的ノ生活ヲ為スヲ以テ真成功ト云フベキカ、如何、此ノ如キハ或ハ彼自身ノ目的ヲ達シタリト云フコトヲ得ベキモ人間ノ目的ヲ達シタリトハ云フベカラズ、否彼自分ノ目的モ達シタルヤ甚タ疑ハシ、如何トナレバ伝道者云ハズヤ、我我ガ心ニ言ケラク〔中略〕之ヲ読去り読来ル者、豊太閤ノ辞世ヲ思起サイルヲ得ズ

45 露とおき露と消えぬる我が身かな浪華のことハ夢の又夢

是レ果シテ真ニ太閤ノ辞世ノ歌ナルヤ否ヤヲ知ラザレトモ、孰レニシテモ能其真想ヲ現ハセリト云フベシ、

44 心学者奥田頼杖（一七九二—一八四九）の『心学道の話』初編（加藤咄堂監修、忠誠堂、一九二八年）の中に「古い句に、「長閑さよ願ひなき身の神詣」と申す句が御座りますが、是が誠の君子の行いじゃ」とあり、当該句が見える。また、吉田松陰が野山獄で妹千代に宛てた手紙の中にも「心学本に「長閑さよ願ひなき身の神詣」。神へ願ふよりは身で行うがよろしく候」（岩波文庫『吉田松陰書簡集』）とあり、徳富蘇峰著『吉田松陰』（前掲）の中にも上記書簡の一部として引用される。

45 ↓10参照。

〔説教講話集〕(D1201610412) 明治三十七年一月一日於西国教会

「キリストノ十字架ト犠牲献身」のうち

陸軍少尉石本権四郎氏ノ旧戦重傷ノ兄ヘノ書状

⁴⁶ 死ナバ今小春日和や狂咲

其他枚挙スベカラザルノ实例、然レトモキリスト教ニハ爱国心以上ノ犠牲献身ノ精神アリ

明治四〇年（一九〇七）

〔説教講話集〕(D1201610331) 明治四〇年八月一五日於箱根夏期講習会

「基督教品性論一班」のうち

キリスト信者ノ理想トスル所ノモノハ単ニ道德ニ非ズ、真理ニ非ズ、キリストト云フ活ケル人格タル事ナリ、是レキリスト教ノ道德ト他ノ道德ト全ク其趣ヲ異ニスル所ナリ、例ヘバ仏法ハ如何、釈迦ト信徒トノ関係、

「⁴⁷ ほとけも元は凡夫なり凡夫もさとればほとけなり」

ノ物語、或ハ孔子ト儒者トノ関係如何、孔子ノ説キタルハ堯舜ノ道ナリ、述而不作、信ジテ古ヘヲ好ム、キリストハ然ラズ、弟子ニ向テ曰ク、汝我ニ来レ、我ヲ信ゼヨ、我ニ従ヘ、我ハ即チ生命ナリ、途ナリ、真理ナリ、我ハ葡萄樹ニシテ汝等ハソノ枝ナリ、枝若シ樹ニ連ラザレバ自ラ果ヲ結ブト能ハズ、汝等モ我ニ連ラザレバ亦此ノ如クナラシ、

46 当該句の作者石本権四郎は、一九〇一（明治三四）年明治学院普通学部卒。当該句は『白金学報』第四号（一九〇四年二月）四三―四五頁に掲載された「消息」中に見える。ただし、第二句は「小春日和よ」。日露戦争中、石本が総攻撃前の旅順から彼の兄に寄せた最後の句。

47 ↓3参照。

〔説教講話集〕(D1201610331)

「明治四十年八月十五日箱根夏期講習会ニ於て」と「明治四十年十月十日大会開會説教梗概」の間

病聞之感

「*48 生来五十三 始成病床人

臥床既三週 此間多所学

病而始知得 健康之貴

又知不足誇 健康

健康 不可誇

人生固無定 常要最後 「(」内×で削除)

病中述懐

*49 生来五十始臥病 臥病三旬多所得

病而始知健康貴 且知健康不足誇

歲月滔々流不休 天地悠々自進化

死生有命不可知 由々只要日々臨終心

*50 さまざまのなやみは人の真心をきたへん為の火穂とぞ知れ

*51 いたつきの床に伏す身も心あらば神に事ふる道はありけれ

病床月

*52 いたつきの床の上よりなかむればいろつくしき秋の夜の月

*53 いたつきの窓にさし入る秋の夜の月の光ぞさやけかりける

52 参考「ながむればちぢにものおもふこれぞこのころづくしの秋の夜の月」(『千五百番歌合』一四三八番歌・作者「顕昭」)。

53 参考「あきのよの月のひかりのもるやまはこのしたかげもさやけかりけり」(『詞花集』九九番歌・詞書「関白前太政大臣の家にてよめる」・作者「藤原重基」)、「紫の雲の中よりさし出づる月の光ぞのどけかりける」(『栄花物語」)。

〔説教講話集〕(D1201610331) 明治四〇年一〇月一〇日

〔明治四十年十月十日大会開會説教概要〕のうち〔第二積極的ノ教訓〕の一節

我曾テ米沢ニ遊ビテ鷹山公ノ遺書ヲ見テ実ニ感服シタルコトアリ、同公ノ教歌ニ曰ク

⁵⁴ 成セバナル成サネバ成ラヌ何事モ成ラヌハ人ノ為サヌナリケリ

ナポレオン第一世ガ「不可能」ノ一字ハ辞書ヨリ刪去スベキモノナリト云ヘリシト東西
相對シテ面白シ、人間ノ意思ニシテ尚且然リ、況ンヤ全能ナル神ノ工(ワーク)ニ於テヲヤ、

明治四一年(一九〇八)

〔説教講話集〕(D1201610334) 明治四一年一月一六日於芝教会大挙伝道ほか

〔救之道〕のうち

抑モキリスト教ハ単ニ理ニ非ズ、法ニ非ズ、生命ナリ、キリストニ於テ神ト一致スル事
ナリ、此点ニ於テキリスト教ハ他ノ宗教ト大ニ其赴ヲ異ニセリ、例ヘバ仏法ノ如キハ釈
迦如来ヲ以テ本尊トナセドモ畢竟ズルニ彼ノ平家物語ノ歌ニモアル如ク

⁵⁵ 仏も元は凡夫なり凡夫もさとれば仏なり

ニテ詰ル所ざとりノ道ニ過ギズ、故ニ既ニ悟レバ釈迦モ仏ナリ我モ仏ナリト云フベク、
或ハ彼モ人ナリ我モ人ナリト云フコトヲ得ベキナリ、

55 ↓3参照。
54 ↓23参照。

明治四二年（一九〇九）

〔井深日記〕明治四二年一月一九日

昨日ノ御歌始ノ預選歌ノ第一ハ

⁵⁶ 君か代の幾千代こめてつもるらん小松が原のけさのしらゆき

〔説教講話集〕(D1201610331) 明治四二年五月一六日於高知教会

〔祈祷ノ教訓〕のうち

宗教ト祈祷ノ關係、古來何レノ國ニ於テモ祈願所ナキモノナシ、殊ニキリスト教ノ礼拝ハ即チ祈祷ナリ、説教ナクモ礼拝ハアラン、然レトモ祈祷ナクシテ礼拝ハアルベカラズ、個人トシテモ祈祷ハ其宗教的ノ生命ナリ、然ルニ世ニハ祈祷ノ必要ヲ認メザルモノアリ、⁵⁷ 心だに眞の道に云々、又

⁵⁸ 閑かさよ願なき身の神詣

なる句あり、恐クハ諷刺ノ歌、未タ祈祷ノ何タルカヲ知ラズ、又神ハ何タルヲ知ラザルヨリ起ル誤解ナリ、寧ロ何事のおわしますカハ知らねども云々ノ方、自然ノ宗教ノ發揮ト見ベシ、〔中略〕イエスハ屢々人ナキ所ニ往キテ如何ニ熱心ニ祈リタルカヲ見ヨ、ソノ将サニ捕ハレントスル夜ゲスセマネノ國ニ於テイエスハ如何ニ血ノ滴ノ如キ汗ヲ流シテ三次マデモ同一ノ言ヲ繰返シテ祈リタルカヲ見ヨ、然カモ我等ハクリスチアントシテ心だに眞の道に云々ト云ヒテ祈祷ヲ輕視スベキカ、否トヨ、使徒パウルハ汝祈祷ヲ恒ニセヨト云ヒ又絶ヘズ祈ルベシト云ヘリ、実ニ祈祷ハ人ト神トノ交通ノ梯ナリ

⁵⁶ 『東京朝日新聞』(一九〇九年一月一九日)五頁「光榮ある預選歌人」に掲載。勅題「雪中松」で詠まれた和歌で、作者は江崎牧子。

⁵⁷ 「心だにまことの道にかなひなば祈らぬとても神やまもらん」のこと↓43参照。

⁵⁸ ↓44参照。

⁵⁹ 板本系の『西行法師家集』雑部に見える「何事のおはしますをばしらねどもかたじけなさに涙こぼるる」(『西行法師家集』解題二番歌)のことか。

〔説教講話集〕(D1201610337) 明治四十二年七月一八日於女子基督教青年会

〔祈祷ノ教育、又ハ模範〕のうち

キリスト者ノ祈祷ノ内容等ハ祈祷ト云フト雖雲泥ノ差アル事

⁶⁰ のどかさよ願なき身の神詣

是レ蓋シ俗物ノ利己的ノ神信心ヲ戒メタル風刺ナリ、又

⁶¹ 心だに真の道にかなひなば祈らぬとても神や守らん

祈祷ノ何タルヲ知ラザル人ノ歌ト云ハザルベカラズ、

〔説教講話集〕(D1201610337) 明治四十二年八月五日於室蘭ほか

〔基督教ノ中心的事実〕のうち

キリスト教ノ中心的事実ハ即チイエスキリストナリトス、〔中略〕若シモキリスト教ハ単ニ悟ノ道ナラバ假令キリストナリトモソノ道サヘ悟得バ事足トナン、平家物語ノ一節ニ此意味ヲ明ニスル所ノ話アリ、平ノ清盛全盛ノ時妓王岐女ト云ヘル二人ノ愛妾アリケルガソノ越前ノ国⁽¹⁾ヨリ仏御前ト云ヘル一人ノ白拍子来ル、清盛之ヲ一目見シヨリ深ク寵愛シ一夕ノ宴ニ仏御前ノ前ニて岐王妓女ニ舞ヲ一サシ舞ヘト命ジタリ、殿ノ命ナレバ敢エテ否ムベキニハ非ザレドモ昨日マデソノ寵愛ヲ専ラニシタル我が身モ今日ハ他人ニソノ寵愛ヲ奪取ル、ト云フ如何ニモ人ノ榮辱ノ定リナキヲ歎ジテ謳出タルソノ歌ニ

⁶² 仏も元は凡夫なり凡夫も悟れバ仏なり

云々、〔中略〕此話ハ仏法ト釈迦トノ関係ヲ表ハスニ足ランカ、仏モ元ハ凡夫ナリ、凡夫モ悟レバ仏ナリ、要ハ悟ルト悟ラザルニアリ、ソノ道ヲダモ悟得バ釈迦ハ我ニ用ナシ

62 61 60
↓ ↓ ↓
3 43 44
参 参 参
照 照 照。

ト云ハン、然レトモキリスト者トキリストノ關係ハ此ノ如キモノニ非ズ、

〔説教講話集〕(D1201610337) 明治四十二年八月六日於室蘭伝道教会婦人会ほか

〔不朽之生命〕のうち

夫レ神ハソノ生ヲ給ヘル独子ヲ賜フホドニ世ノ人ヲ愛シ給ヘリ、此ハ凡テ彼ヲ信ズル者ニ云ヘルコトナクシテ永生ヲ受シメンガ為ナリ、(約^(約)三ノ十六)、凡ソ歴史ヲ読テ最モ悲惨ヲ感ズルハ英雄豪傑ノ末路、近クハ西郷隆盛、豊太閤ノ事、

⁶³ 露とおき露ときえぬる…

(ナポレオン第一世ノ事、セーヌ河辺ノ墳墓)〔中略〕又曰ク、人ノ齡ハ草ノ如ク、ソノ栄ハ野ノ花ノ如シ、風過レバ失セテ跡ナク、ソノ生ヒ出シ処ニ問ヘバ尚知ラザルナリ

⁶⁴ 夏草や兵者共の夢の跡

〔中略〕昨今室蘭半島ヲ包ツ、アル濃霧ノ中ニ立ツガ如ク朦朧トシテ遠キヲ弁ズル能ハザルナリ

⁶⁵ 世の中ハ何ニ譬ヘン朝ほらけ漕行く船の跡の白浪

ノ感ヲ免ル、コト能ハザルナリ、

〔説教講話集〕(D1201610345) 明治四十二年四月一八日於大阪北教会ほか

〔信仰、覚醒ノ必要〕のうち

日本伝道ノ為ニ信仰ノ覚醒ヲ要ス、若シモ我が祝謝伝道ノ不成功ニ帰スルコトアラバ、ソハ人ナキガ為ニ非ズ、又金ナキガ為ニ非ズ、結局信ナキガ為ナルコトヲ知ラン、若シ

⁶³ 豊臣秀吉の和歌「露とをき露ときえぬる我身かななにはの事は夢のよの中」↓10参照。

⁶⁴ 『猿蓑』(元禄四年刊)所収。松尾芭蕉が奥州高館にて吟じた句。のちに『おくのほそ道』(元禄一五年刊)所収。

⁶⁵ ↓2参照。

芥種ノ如キ程ノ信仰アラバ此山ニ向ヒテ此処ヨリ彼処ニ移レト云フモソノ如クナラント
イエスハ云ヒ給フナリ、其実例ハ希伯来十一章ニアリ、意思之力、

⁶⁶ 何のその岩をも通す桑の弓

精神一到何事不成

上杉鷹山の歌

⁶⁷ なせばなるなさねばならぬ何事もならぬは人のなさぬなりけり

〔説教講話集〕(D1201610345) 明治四十二年四月二十五日於明治学院ほか

〔神の摂理〕のうち

我等人類ハソノ特別ナル摂理ノ下ニ生存スルコトヲ疑フコト能ハズ、何ニ由テ之ヲ知ル
カトナレバ、イエスキリストノ教訓ニ由リテ之ヲ知り且自己ノ実驗ニ由リテ愈々深ク之
ヲ信ズト答シノミ、単ニ議論ノミニテハ覚知シ難シ、自己ノ経験、幼年ノ時彈丸ノ間ヲ
奔走ス、会津籠城ノ事、渡米ノ際太平洋ノ真中ニテ蒸気機関破壊シテ将サニ漂流セント
シタル事

⁶⁸ *青海原舟ハ何処に迷ふとも天津御親(ママ)のみ手は離れじ

○一昨年夏大病ニ罹リタル時ノ感

⁶⁹ *死生雖有命不可知 只要日々臨終心

去十九日夜、六合川橋上ニ於ル汽車ノ衝突、

⁶⁶ 赤穂義士の一人で、子葉とい

う雅号を持つ俳人大高源吾(一六
七二―一七〇三)の句。当該句は

源吾の代表句のひとつとして『俳
人百家撰』(緑亭川柳編、博文館、

一八九四年)に載るほか、『講談
忠臣蔵』(博文館編刊、一九〇九

年、第二句「岩をも通せ」、『赤
穂実録 浪花節』(桃中軒如雪口

演、岡本増進堂、一九一〇年)、
『赤穂義士銘々伝』(邑井一著、集

栄館、一九一八年)など、講談で
もよく知られた。

⁶⁷ ↓23参照。

⁶⁸ ↓17参照。

⁶⁹ ↓49の漢詩にはほぼ同じ形で含
まれる。

明治四三年（一九一〇）

〔説教講話集〕(D1201610341) 明治四三年二月五日於青山学院講堂

〔奥野昌綱翁ノ就眠ニ就キ〕のうち

本年夏余ハ一日ヘボン博士ヲ訪問シタル時、博士ハ特ニ奥野ハ尚存命ナルカト問ハレタリ、余ハ答ヘテ尚無事ナリト云ヒシガ、今ヤ氏ハ博士ニ先チテ往レヌ、

（天父待我）

70 天に在す父は待らんとく行かんこゝろせかるゝ世の旅路かな 昌綱

我等今奥野昌綱氏ノ生涯ヲ追懷スルニ当リテ第一ニ記憶スベキハ同氏ハ我が国ニプロテスタント基督教ノ伝ハリテ以来最初ニ教師職ニ就キシ一人タルノミナラズ、最モソノ年長者タリシコトナリ、

明治四四年（一九一一）

〔説教講話集〕(D1201610408) 明治三五年六月二八日於両国教会ほか

〔敬神ノ益〕のうち

夫レ人ノ道德ニ於テ第一ニ必要ナルハ真実ノ心ナルベシ、真実ハ百徳ノ本ナリ、其心ニ真ナクバ智モ勇モ取ルニ足ラズ、〔中略〕概シテ神ヲ信シ敬フ人ト信ゼザル人ト孰レカ最モ真ヲ重ズルカト問フ人アラバ前者最モ能ク真ヲ重ズト云フヲ憚ラザルナリ、試ミニ神ヲ敬フ人同志ノ信用ト神ヲ信ゼザル人同志ノ信用ノ厚薄如何ヲ見ヨ、試ミニ

71 （御製 目ニ見えぬ神の心に通ふこそ人の心の真なりけり）〔補入〕

70 黒田惟信編『奥野昌綱先生略伝並歌集』（一粒社、一九三六年）第二編「道のしをり」の「教理の歌」の部に所収。詞書「天父待我」。奥野昌綱（一八二三—一九一〇）は、和歌を海野遊翁（一七九四—一八四八）に師事。本多庸一は「奥野翁は和歌が上手で苦もなく出来た。翁の詠歌にはなかなか佳いがある」（高木壬太郎編『本多先生遺稿』、日本基督教興文協会、一九一八年）と評している。

71 明治天皇による明治四〇（一九〇七）年の詠草。『明治天皇御集』（文部省、一九二二年）では、詞書「神祇」結句「まことなりけれ」。井深による本講話集の最初の執筆は明治三五年であるが、その後大正三年まで諸教会における説教等に計一〇回用いられた記録が文末に残っている。原本で確認すると、「御製」および「目ニ見えぬ」の和歌は井深の筆跡ではあるが、書かれた位置や万年筆の色を前後の本文と比較すると、後日補入されたものと判断される。一〇回の説教のうち、御製が詠まれた明治四〇年以降に行われている

神ヲ敬フ国民ト神ヲ敬ハザル国民ニ於ル信用如何ヲ考ヘヨ、

大正二年（一九一三）

〔井深日記〕 大正二年一月二日

午前文六ト共ニ山川総長ヲ訪問シテ挨拶ヲナシ、ソレヨリ博多停車場ニ往キ楼上ニテ午餐ヲ喫シ太宰府ニ往ク、初詣ノ人雑踏ス、二日市駅ニテ下車シ、鉄道馬車ニテ天満宮ニ往ク、神社ハ見ルニ足ラズ、後ノ山上ニ登レバ眺望中々ヨシ、奈良ニ似タル所アリ、帰途観世音寺ノ木像梵鐘等ヲ見、都督府ノ旧跡ヲ見、二日市ノ停車場マデ歩行ス、昨日ト違ヒ今日ハ晴天無風、散策ニハ最モ良キ天気ナリキ、午後四時帰宅ス、来ル七日ニハ盛ナル「ウソカヘ」アリト聞テ

*72 何事ぞ「真の道」を教へたる神の祭に「うそ」のやりとり

〔井深日記〕 大正二年一月二七日

帰途病院ニ寄ル、お咲、おとよ、おしづ等訪問中ナリキ、文二氏モ来ラレタリトノコト、先日ノ狂歌ニ対シ返歌アリ、

⁷³ なぎもせず語りもやらぬうそのとりうそは語らぬ教なるらん

中々面白シ

のは、明治四四年七月二日（明治学院）、大正三年二月一五日（千葉教会）、同三月一日（学院寄宿舎）、同三月八日（横浜海岸教会）においての四回であり、このいずれかの段階において御製が補入されたものと推測される。

⁷² 井深は、大正元（一九一二年）一月一八日から、日本基督教伝道局の用務のため満州に出張し、その帰途、長女千代子とその夫荒川文六が住む福岡に立ち寄り、大正二年の正月を迎えた。二日には菅原道真を祭る太宰府天満宮に参詣。天満宮では、毎年一月七日に木製の鳥の鸞うそを社頭において参拝者が交換し合い、吉兆を招くという「鸞替」が行われる。当該歌は、この神事を詠じたもの。第二句「真の道」は道真の和歌「心に真の道にかなひなば祈らずとも神や守らん」に拠る↓43参照。

〔井深日記〕大正二年一月三十一日のあとの「補遺」欄

真野文二氏の返歌

⁷⁴ なぎもせずかたりもやらぬうそのとりうそは語らぬをしへなるらむ

よりて又よめる

^{*75} うそからもまことの出るためしありときくはまことかうそのとりかへ

^{*76} なにしおは、ふかくはせめしうそのとりうそもまこととほる世なれば

^{*77} はしめからうそとしりつ、うそのとりかへてよろこぶりそ人ぞうそなれ

大正三年（一九一四）

〔説教講話集〕(D1201610346) 大正三年五月十三日

〔昭憲皇太后ノ崩御ヲ悼ミ奉ル〕のうち

第四、最後ニ尚一ツ申スベキハ至尊ノ御身ニオハシナガラ常々学問ヲ怠リ給ハズ、殊ニ歌道ニハ最モ達シ給ヒシ事ナリ、陛下ノ如何ニ能ク民情ニ通シ義理ヲ理解シ給ヒシカハ御歌ヲ拝誦シテモ之ヲ知ルベキナリ、

⁷⁸ あさしとてせけばあふる、川水のこゝろや民の心なるらむ

の御歌ノ如キ其一例ナリ、又陛下ハ鬼神ヲモ動スト云フ和歌ノ道ニ達シ給フト同時ニ神ヲ敬フ心篤クオハセシ事モ推察スルコトヲ得、

⁷⁹ 一人のみ思ふ心のよしあしも照し分くらん天地の神

⁷⁸ 昭憲皇太后が詠んだ一八七七（明治一〇）年の詠草、詞書「治民如治水」（『現代短歌全集別巻』佐佐木信綱編、改造社、一九二九年、「昭憲皇太后御歌集」三一六頁）。

⁷⁹ 昭憲皇太后が詠んだ一八七九（明治一二）年の詠草、詞書「慎独」（前掲『現代短歌全集別巻』「昭憲皇太后御歌集」三七二頁）。初句「人しれず」。

ノ御歌ハ明治天皇ノ御製

⁸⁰ 目ニ見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりける

と好一對ト申スベキカ、

『白金学報』第三三号（大正三年七月一日）二一四頁

「昭憲皇太后の崩御を敬悼し奉る（井深樞之助著）」のうち

最後に尚一つ申べきは故陛下が常に学問を怠り給はず殊に歌道には最も熟達し給ふた事
であります、陛下が如何に能く民情に通じ如何に明に義理を解し給ふたかは左の御歌に
拠ても推知することが出来ます。

⁸¹ あさしとてせけばあふる、川水の心や民のこゝろなるらむ

又故陛下が敬神の念篤くおはせし事も御歌に依て知ることが出来るやうに思はれます。

⁸² 一人のみ思ふ心のよしあしも照し分くらん天地の神

の御歌は明治天皇の御製

⁸³ 目に見えぬ神のこゝろに通ふこそ人のこゝろのまことなりけり

と好一對の教歌と存じます。

〔説教講話集〕(D1201610347) 大正三年二月於芝教会ほか

「何故二宗教ヲ必要ト為ス乎」のうち

(1) 例セバ「誠実」ノ徳ニ就テ一考セヨ、誠実ハ百徳ノ本タルハ人ノ皆認ル所ナリ、

83 82 81 80
↓ ↓ ↓ ↓
71 79 78 71
参 参 参 参
照 照 照 照

不誠実ナル善人アリトハ想像スル能ハズ、試ミニ思へ、神ヲ信ジソノ賞罰ヲ畏ル、者ト其誠実ノ心ニ於テ果シテ相違ナカルベキカ、我ハ固ヨリ凡テ神ヲ信ゼザル者ハ悉ク不誠実ナリトハ断言セズ、然レトモ隠レタル見給ハ神ヲ信セザル者ハ動モスレバ自ラ欺キ又人ヲ欺キ易キコトハ争フベカラザルノ事実ナリトス、何トナレバ此ノ如キ人ハ他人ガ知サレバ己ノ外ハ秘密ヲ知ルモノナシト思ヒテ遂ニ誘惑ニモ陥ルナリ、サレバ明治天皇ノ御製ニモ

⁸⁴ 目ニ見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけれ

トアルニ非ズヤ

〔井深日記〕 大正三年五月一五日

彦三郎ヨリ礼状ヲ送ル其中ニ一首アリ

⁸⁵ なき人の昔かたりに夜ふけてほと、きすなく白金の里

〔井深日記〕 大正三年七月三一日のあとの「補遺」欄

福岡ナル荒川千代子ヨリ一首の狂歌を添へて藍胎塗（藍）の硯箱を贈りこしければよめる

⁸⁶ 藍胎（藍）の中にもこまれるまこ、ろは千代も八千代も忘れざらん

⁸⁷ 朝な夕な筆とるたびにおもふかな箱にもこまれるふかきこ、ろを

大正四年（一九一五）

⁸⁴ ↓71参照。

⁸⁵ ↓「なき人」は、父井深宅右衛門（明治三〇年没）と井深の先妻勢喜子（明治三一年没）のこと。〔井深日記〕によると、前日の大正三年五月一四日、二人の記念追悼のため白金の井深宅に弟彦三郎ほか親類縁者が集い、午後一〇時過ぎに散会した。

⁸⁶ 参考「ちはやぶるひらのの松の枝しげみ千世もやちよも色はかはらじ」（『拾遺集』二六四番歌・作者「大中臣能宣」）、「もろこしのあめのしたにぞありときくてる日のもとをわすれざらん」（『新古今集』八七一番歌、作者「大江千里」）。

⁸⁷ 参考「つくばやまふかくうれしと思ふかなはまなのはしにわたす心を」（『詞花集』三七三番歌・作者「肥後」）、「ながれての末ひるきよにしのぶかなそのみなものふかきころを」（『大江戸倭歌集』一九一八番歌・作者「林直方」）。

〔説教講話集〕(D1201610350) 大正四年四月一〇日於富士見町教会ほか

〔福音トハ何ゾヤ〕のうち

キリスト曰ク、健康ナル者ハ医師ノ助ケヲ求メズ、但病アルモノ之ヲ求ムト、実ニ然リ、世ニ疾病ナクバ医師ト医薬ハ無用ノ長物ナラン、然レトモ一旦大患ニ罹リタル時ハ医師程必要ナルモノハナシ、然ラバ要ハ吾人ニ医師ヲ要スル病アリヤ否ヤト云フニアリ、事実果シテ如何、古歌ニ

⁸⁸ 心だに真の道に適ひなば祈らぬとても神や守らん

ト云コトアリ、此ハ道德上医師ノ助ヲ求メザル人ノ歌ナラン

〔説教講話集〕(D1201610352) 大正四年六月二四日於函館商業会議所

〔実業ト基督教〕のうち

聖書ニ神ヲ畏ル、ハ智慧ノ本ナリト云フ事アリ、如何ニ知識アリトモ手腕アリトモ、神ヲ畏レ敬ヒ自ラ欺カザル心アル人ニシテ始メテ真ニ信用スルニ足ル人トナルナリ、先帝ノ御製ニモ

⁸⁹ 目に見えぬ神ノ心ニ通ふこそ人の心の真なりけり

トアリ、是レ即チ実業ト宗教トノ関係ニ付テ敢エテ実業家諸君ノ反省ヲ促ス所以ナリ、

〔井深日記〕 大正四年一〇月四日

昨日汽車中ニテ宮川氏ノキリストトソノ使命ナル小冊子ヲ読シニ香川影樹(歌)ノ歌トシテ

⁹⁰ よしのやまかすみの奥はいかならん見ゆる限は桜なりけり

⁸⁸ ↓43参照。

⁸⁹ ↓71参照。

⁹⁰ 宮川経輝著『基督と其使命』(警醒社、一九一四年、二九頁)所収。ただし、香川景樹の歌集『桂園一枝』および『桂園一枝拾遺』には見えない。

トアリ、又スモーキング・グラスヲ以テ太陽ヲ見ルト云フコトアリ、余リ甚シキ誤故手紙ノ端ニ注意シタリ

⁹¹ 吉野山露のおくは知らねども見ゆる限は桜なりけり

ハ八田知紀ノ歌ナリ

大正五年（一九一六）

〔井深日記〕 大正五年一月五日

沼沢氏頓死ニ付幾回も思出たる、

⁹² あすありとおもふ心のあたさくら夜半にあらしのふかぬものかは

ノ古歌ナリ、是レ決シテ他人ノ事ニ非レバ今日ハ遺書ヲ認メタリ、今後毎年今頃ニ之ヲ認ムル事トセント欲ス、

〔説教講話集〕(D1201610351) 大正五年九月一七日於〔明治学院〕寄宿舎

〔自然ヲ通シテ神ヲ見ヨ〕のうち

今ヤ正ニ初秋ノ時ナリ、秋ハ如何ナル時ナルカ、外国人ハ知ラズ我等日本人ニハ秋ト云ヘバ必ラズ月ヲ連想ス、名月ハ秋ノ月ナリ

⁹³ 白雲ニ羽打かはし飛ぶ鷹のかずさへみゆる秋の夜の月

此一句ヲ詠ジテモ秋月サヤケキ影ハ想像セラル、但シ何故カ日本ノ秋ノ歌ハ十中八九迄ハ悲哀ノ調ヲ帯ビタリ、

⁹¹ 八田知紀の歌集『しのぶぐさ』（共同出版社、一八九四年）一三頁に「ひと、せはな見にもものしける時」と詞書して所収。のち鎌田正夫、金丸俊胤編『八田知紀歌集』（日本警察新聞社、一九一四年）にも所収。その他、落合直文編『新撰歌典』（博文館、一八九一年）七四頁、「三月 名所」部、佐佐木信綱著『和歌世々のあと』（博文館、一九〇八年）七三頁などにも当該歌が見える。いずれも第二句「かすみのおくは」。

⁹² 『親鸞聖人絵詞伝』（舜恕・慧観ほか編、源隆為画、寛政一二年真淳序）巻一や『親鸞聖人正統伝絵記』（柳宝浄編、日進社、一九〇三年）などに所収。日記中の「沼沢氏」は、井深の妹くにの夫で、前年二月二日に死去した沼沢七郎のこと。

⁹³ 『古今集』一九一番歌・詞書「題しらず」・作者「よみ人しらず」。

94 月見れば千々に物こそ悲しけれ我身ひとつの秋二はあらねど

何故ニ見^{〔月カ〕}ヲ見レバ悲クナルカ西洋人ニハ一寸理会ノ出来ヌコトナリ

〔説教講話集〕(D1201610355) 大正五年九月二四日於高輪教会

〔青年ノ都会生活ト其誘惑及ビ機会〕のうち

回顧スレバ今ヲ去ル四十有六年即チ明治三年ノ春、初メテ故山ヲ辞シ单独ニテ六十五里ノ道ヲ六日懸リ七日目ニ漸ク東京ニ着シ、暫時シテ芝山内ノ某寺院ノ薄暗キ一室ヲ居間トシテ与ヘラレ、英語ノ勉強ヲ始メタル時ノ感想ハ今尚忘ル、コト能ハズ、ソノ時ニハソナ言葉ノアルコトサヘ知ラザリシガ、今日ヨリ思ヘバ正シク一時懐郷病ニ罹リタルナリ、暫時ハ食事サヘ厭フ程寂莫ノ念ニ打レタリキ、故郷ヲ出ル時ニハ

*95 男兒立志出郷関 業若不成死不還

埋骨豈唯墳墓地、人間到处在青山

*96 誓ひてし我が真心のかなはずはふたゝびこえじ故里の山

杯ト口吟シタレトモ實際他郷ニ出テ、見レバ中々思ノ外ノモノナリ、〔中略〕余ハ現代ノ気風ニ就テ少シク感心シ難キ事アリ、ソハ他ニ非ズ人ヲ冷評シ貶ム事ニ於テハ一般ノ新聞雑誌ノ句調、更ニ遺憾ナシト雖モ人ノ長所ヲ認識シ大人ヲ敬慕スルニ於テ甚タ客ナル事、是レナリ、盲目的英雄崇拜ハ余モ之ヲ取ラズ、然レトモ吾人ハ徒ラ二人ノ弱点ヲ冷評シ他ヲ蔑如スル事ニ依リテ我が人格ヲ高尚ニスルコト能ハズ、寧ロ大人哲人ヲ崇敬シ景慕シテ之ニ倣フベキナリ、古キ川柳ニ

97 つまらぬといふは小さき知恵袋

94 ↓8参照。

96 参考「ふたたびはこえじと思ふ陸奥のいはでの関に鶯のなく」〔桂園一枝〕三一番歌・詞書〔関路間鶯〕↓解題2頁参照。

97 三森竜山編『禅林世語集 参禅必携』(白山書院、一九四一年)所収。

ト云へり

大正六年（一九一七）

〔説教講話集〕(D1201610358) 大正六年五月六日於横浜海岸教会ほか

〔信仰ト祈祷ト断食ト（能力の源）〕のうち

曾テ万国学生青年会同盟大会ノ時、十六ヶ国ノ代表者此歴史的祈念碑ノ周圍ニ立チ互ニ
手ト手トヲ取りテ円ヲ作り、各々自国ノ国語ヲ以テ聖書ノ一句ヲ暗誦シタルコトアリ、
古語ニモ

精神一到何事不成

ト云ヒ、又

⁹⁸ 何のその岩を透す桑の弓

抔トモ云ヘド、只人ノ精神ノミナラズ全能ノ神ニ信頼スル信仰ノ力ニ由レバ、真ニ山ヲ
モ移スコトヲ得ベキナリ、

〔井深日記〕 大正六年九月一七日

盛岡伊藤藤吉氏ヨリ摩擦用長把槁〔たわし〕ヲ贈来ル、依テソノ返礼ニ

⁹⁹ 足曳の山鳥の尾のしだり尾の長だわしをばながくもちひん

大正七年（一九一八）

98 ↓66参照。

99 参考「葦引の山鳥の尾のしだりをのながながし夜をひとりかもねむ」〔拾遺集〕七七八番歌・詞書「題しらず」・作者「人まろ」〔百人一首〕三番歌。

〔手帳〕(D1201610441)〔大正七年一〇月八日頃〕

¹⁰⁰ 目にみえぬ神の心にかよふこそ人のこゝろの真なりけり

大正八年(一九一九)

〔説教講話集〕(D1201610362) 大正八年八月一七日於旭川教会ほか

〔我等何ヲ為スベキ乎〕のうち

¹⁰¹ 何ノソノ岩ヲモ透ス桑ノ弓

我等ハ先ヅ此ノ如キ確信ヲ要ス、然レトモ此ノ如キ確信ハ偶然ニ生ズルモノニ非ズ、
イ
エス曰ク、サレド此歎ハ祈祷ニ由ラザレバ出ルコトナシト、故ニ我等ハ先ヅ第一ニ熱誠
ヲ以テ此能力ヲ神ニ求ムルヲ要ス、

大正一三年(一九二四)

〔井深日記〕大正一三年一月五日

新年ニ真野文二氏へ左ノ狂歌ヲ送りシニ昨夜返歌ヲ送り来ル

¹⁰² 立かへる春をまたはや焼野よりもえ出るものは草ばかりかは 蜂声

〔井深日記〕大正一三年一月六日

三浦徹氏ヨリ新年の感ト題シ

100 前後には当該歌に関する説明が何もないため、どういう経緯で何故ここに記されているのかは不明。

101 ↓66参照。

102 日記本文には「真野文二氏へ左ノ狂歌ヲ送りシニ」とあるが、書き留められているのは真野文二の返歌のみ。真野文二は井深の妹咲子(さく)の夫。「蜂声」は真野の雅号。

¹⁰³ 新しき年は賜へど新なる力かへらぬ身をいかにせん

ト申来ル、依テ直チニ

*¹⁰⁴ 老が身も神のめくみに驚のごと若返るこそうれしかりける

又

*¹⁰⁵ 外なるはよし(ママ)壊るとも内なるは日に新たなるいのちなりけり

ト返しタリ

〔井深日記〕大正一三年五月一〇日

旭川木村へ慰安ノ一書ヲ贈ル、左の一首を添へタリ

*¹⁰⁶ 幼児の我に来るを許せよと祝し給ひし主をこそ頼め

〔井深日記〕大正一三年八月二五日

初秋ノ歌一首ヲ読ミ、真野、津田、三浦、秋葉等へ送ル、曰ク

*¹⁰⁷ 秋来ぬと目にもさやかに見えにけり雲場が原の茅の穂波に

〔井深日記〕大正一三年八月二八日

今朝狂歌一首ヲ得タリ、

¹⁰⁴ 「詩篇」一〇三篇五節「長らえる限り良いものに満ち足らせ驚のような若さを新たにしてください」に拠る。当該歌は、井深が一九二四（大正一三）年二月一五日に、大川正（一九二二年明治学院神学部卒・台北神学校教授）に宛てた書簡（『明治学院時報』第九九号、一九四〇年一〇月二〇日発行所載）にも含まれる。結句「うれしかりけれ」。

¹⁰⁵ 「コリントの信徒への手紙二」四章一六節「たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます」に拠る。

¹⁰⁶ 「幼児」は、木村輝子のこと。井深の三女春子と木村良夫の子カ。（井深日記）によると五月七日に亡くなった。

¹⁰⁷ 参考「あきさぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる」（『古今集』一六九番歌・詞書「秋立つ日よめる」・作者「藤原敏行」）。（井深日記）によると、この年、井深は、妻花子とともに七月一日から九月八日まで軽井沢に滞在。「雲場が原」は、

*108 世の中を離れ山辺の仮住ひ重荷おろして身も軽井沢

〔井深日記〕大正一三年八月三〇日

真野氏ヨリ返歌アリ、曰ク、文二

109 絵にみゆるす、きの穂波打よせてみやこに知らぬ秋風やふく

咲子

110 木の葉ちり尾花なみよる軽井沢むべ山風に秋のみゆらん

〔井深日記〕大正一三年九月冒頭

先日送リタル初秋ノ和歌ニ対ニシテ津田栄子ヨリ返歌アリ、

111 軽井沢静けき秋の初風に向が原の茅なびくらん

112 此までも涼くなりぬ軽井沢ゆかるく送るか秋の朝風

伊藤一隆氏より狂歌に対する返歌あり

113 汗かゝぬやうにつとめて汗をかく人をうらやむ夏の日ながし

〔井深日記〕大正一三年九月五日

終日降雨、軽井沢ノ避暑モ既ニ過キ避暑客モ大抵帰途ニ就キ頓ニ寂寥ヲ感ズ、句あり

*114 夏過きてもはや衣も軽井沢気も軽くして家に帰らん

軽井沢の地名。真野文二の歌集『蜂聲集』二〇頁に、「軽井沢にある井深梶之助氏より薄の絵葉書に」として所収。

108 ↓ 解題2頁参照。

109 井深の詠んだ107番歌への返

歌。

110 右に同じ。作者の咲子は真野

文二の妻で、井深の妹。

111 井深の詠んだ107番歌への返

歌。

112 右に同じ。

113 右に同じ。

〔井深日記〕大正一三年二月二日

花子早朝ステーションホテルニ真野文二氏ヲ訪レ鎌倉別荘ノ一部借受ノコトヲ依頼シ快諾ヲ得タリ、文二氏今朝出発帰省セラル、同氏ヨリ過日ノ初雪に付

¹¹⁵ 古いぬれば数かさなりて初雪もめづらしからずなりにけるかな

ト読ミ送タレバ直チニ

*¹¹⁶ いつ迄もたまほしきはをさなさの物めつらしき心なりけり

ト返シタリ

〔井深日記〕大正一三年二月四日

木村家ニ於テ東京移住披露ノ為、親類・親友八十名ヲ中央亭ニ招キテ午餐ヲ供シタリ〔中略〕千代か崎なる木村家の新築を祝ひて

*¹¹⁷ 名にしおふ千代がみ崎の新すまる千代に八千代に榮えゆくらむ

狂歌、

*¹¹⁸ 大崎の千代がみ崎の新築はなほさきくもめてたかるらん

〔井深日記〕大正一三年二月四日

快晴微風、午前午後共ニ散歩ス、海岸ニ往キタレトモ寒カラズ、山色連天ノ意ヲ以テ一首ヲ読ム

115 〔井深日記〕一二月三日条に「今日ハ寒ク初雪降ル」とある。

117 参考「わが君は千世にやちよにさざれいしのいはとなりてこのむすまで」〔古今集〕三四三番歌・詞書「題しらず」・作者「よみ人しらず」。

119 参考「なごのうみのしほぢはるかながむればくもたちまじるおきつしらなみ」〔広田社歌合承安二年〕一〇九番歌・歌題「海上眺望」・作者「懐能」。「山色連天」は、次項目の日記本文に記されるように勅題。〔井深日記〕によると、この年、井深は、妻花子とともに一二月二日から翌年一月一日まで、鎌倉にある真野の別荘に滞在。

120 参考「たこのうらにうち出でてみれば白妙の富士のたかねに雪はふりつつ」〔新古今集〕六七五番歌・詞書「題しらず」・作者「赤人」、『百人一首』四番歌。

121 ↓120参照。

122 参考「夏の夜の夢ちにきなく時鳥さめても声は猶残りつつ」〔新拾遺集〕二二三番歌・詞書「題しらず」・作者「後鳥羽院」。「わすれては夢かと思ふおもひきや

*119 相模の海かなた遙かに眺むれば雲井に浮ぶ三宅嶋やま

〔井深日記〕大正一三年二月三〇日

曇タレトモ寒カラズ、鎌倉ハ避暑ヨリモ寧口避寒ノ地ニ適スルガ如シ、少クモ病後保養ノ人ノ為ニハ然リトス、午前ハ花子同道買物ニ出懸ケ、午後ハ一人ニテ極楽寺ヨリ稲村が崎袖の浦ニ行海上ヲ見ル、ソノ時、山色連天ト云フ勅題ニ因テ

*120 袖の浦に打出てみれば白妙の不二の高嶺は雲かくれつ、

又同所より不二山を見たる、絵はがきにした、めて真野氏に送る

*121 袖の浦に打いて、みれば白妙の不二の高根は日に匂ひつ、 海辺の黒人

〔井深日記〕大正一三年二月三二日のあとの「補遺」欄

折にふれて

*122 夏の夜のゆめかと思ふ七十路の過＊にし方をふりかへりみて
*123 人の世はゆめにはあらじ天地をしろすめす神いますのあらん限りは
*124 ひとの世は夢にはあらじキリストの御足の跡し尋ね進まば
*125 人の世をなてとかなとゆめと思ふらん
*126 七十路の坂をはこゆとも尚さきによづべき峰のありとこそ知れ

雪ふみわけて君を見むとは」(『古今集』九七〇番歌・詞書「惟喬のみこのもとにまかりかよひけるを、かしらおろしてをのといふ所に侍りけるに正月にとぶらはむとてまかりたりけるに、ひえの山のふもとなりければ雪いとふかりけり、しひてかのむろにまかりいたりてをがみけるにつれづれとしいと物がなしくてかへりまうできてよみておくりける」・作者「なりひらの朝臣」)。『蜂聲集』四〇頁によると、「井深梶之助より」夏の夜の夢かと思ふ七十路の過ぎにし事をふりかへり見て」といひおこせければ」とあり、当該歌を真野に贈ったことが知られる。真野の返歌は「七十ちのよはひかぞへて何かせむいやかぎりなきいのちおもへば」。

126 参考「ななそちの老のさかゆく山こえてなほいろふかきもみちをぞ見る」(『続後撰集』一〇八〇番歌・詞書「九月十三夜十首歌合に、行路紅葉」・作者「祝部成茂」)。

大正一四年（一九二五）

〔井深日記〕 大正一四年一月冒頭

*127 東海春秋七十二 更拜天恩又迎新

*128 いつまでもたまほしきは青年わか者の世におくれさる心なりけり

〔井深日記〕 大正一四年一月二〇日

今日ハ宮中御会始ニテ皇族方其他ノ歌夕刊ニ発表セラレタリ、但選歌中別段感服スベキモノナシ、愚詠ハ鎌倉滞在中ノ実感ニテ左ノ如シ

*129 相模の海海原遠くなかむれは雲間に浮ぶ沖津嶋山（或ハ）

*130 さかみの海ふりさけみれは久方の雲井に浮ふ三宅嶋山

〔井深日記〕 大正一四年二月三一日

高知富田氏ヨリ国産ノ蒲鉾ヲ贈来リタルニ依リ、其返礼トシテ味附海苔壺函ヲ贈ル、横山氏ヨリ又々岡山市横山製ノカステラ蒲鉾ヲ贈来ル、依テ狂歌一首ヲ讀ミテ送ル、

*131 聞て好し見て良し食ふて更に良し横山製の鮮魚カステラ

〔井深日記〕 大正一四年（日記の裏表紙にあるポケットの中に和歌六首を書いた紙片あり）

病中偶感

129 『朝日新聞』一九二五年一月二一日夕刊に、勅題「山色連天」で詠まれた皇族ほかの詠草が掲載された。

130 参考「あまの原ふりさけ見ればかすがなるみかさの山にいでし月かも」（『古今集』四〇六番歌・詞書）もろこしにて月を見てよみける」・作者「安倍仲磨」、および「百人一首」七番歌、「山たかみふりさけみればひさかたの雲のみをゆくぬのびきのたき」（『雅有集』三七一番歌）、「ふじのねをふりさけ見れば久方の天雲の上に雪ぞ降りたる」（『八十浦之玉』一七六番歌・詞書「布土の山を見て」・作者「多気綾足」）。

132 『旧約聖書』「創世記」三二二章に拠る。

133 『新約全書』（米国聖書会社、日本横浜印行、明治二〇年）「馬太伝」第二十七章四六に「エリエリラマサバクタニと呼りぬ之を訳バ吾神わが神なんぞ我を遣たまふ乎と云る也」とあり。

134 参考「うき世にはゆき消えなんと思ひつつおもひの外になほぞほどふる」（『源氏物語』「幻」のうち）。

*132 よもすがらヤボクの河のほとりにて神と角力ひし人をこそおもへ
*133 エリエリラマサバクタニ今ぞ知りぬるこの呼びかな

*134 主召さは今ゆきなんとおもひつゝなとて別れのかくもつれなき
うなたるゝわが魂よ何事ぞ空にかゝやく十字架をみずや

*135 ぬは玉のあやめもわかぬ暗のうちにひとりさやけし十字架のかけ
*137 この刺をとりさりてよと三たびまでさげびし人の心をぞ知る

大正二五年（一九二六）

〔説教講話集〕(D1201610369)〔大正二五年六月二〇日以降〕

〔タイトルなし〕

人或ハ問ハン、何故ニキリストハ変ラザル乎、凡テ人ノ思想ト行為トハヨシヤ賢愚ノ別
ハアリトモ到底変化ヲ免レザルコトハ人皆ノ認ムル所ニ非ズヤ、詩篇ニ曰ク、夫レ人ノ
齡ハ草ノ如ク、ソノ榮ハ野ノ花ノ如シ、風過クレバ失セテ跡ナク、ソノ生出シ所ニ問ヘ
バ尚知ラザルナリト、

¹³⁸ 夏草や兵共の夢のあと

¹³⁹ 露とおき露と消えぬる我が身かな浪華の事は夢のまた夢

是レ個人ノ運命タルノミナラズ、大抵ノ国家モ亦此ノ如シ、

〔井深日記〕大正一五年六月五日

文雄六甲山麓ノ新居近日落成ノ趣ニ付、祝ノ印トシテ家具代金五拾円ヲ贈リ、且額幅各

135 参考「まちわたる月より外に
なにごとそおのれもそひて出づる
白雲」(草徑集(大隈言道))九二
四番歌・詞書「山雲」。

136 参考「荒れはててあやめもわ
かぬふる郷にひとり時しる軒のた
ち花」(宗尊親王百五十番歌合
四六番左・九一番歌・宗尊親王、
「つきおそき峰の雲間を光にてひ
とりさやけき夕づつの影」(芳雲
集(武者小路実隆))四一四六番
歌)。

137 「コリントの信徒への手紙
二」第二章一〇節に拠る。参
考「さざ浪や志賀の花ぞのみるた
びにむかしの人の心をぞしる」
(千載集)巻第一・春歌上・六七
番歌・詞書「日吉社の歌合とて人
人よみ侍りける時、よめる」・作
者「祝部宿禰成仲」

138 ↓64参照。
139 ↓10参照。

一枚ヲ揮毫シテ与ヘタリ、額ハ文雄ノ望ニ依リ和氣靄然ノ四字、幅ハ

*¹⁴⁰山光照檻海色入窓

ノ八字ナリ

〔井深梶之助書幅〕〔伊藤氏寄贈資料〕のうち、ID302070014 大正一五年初夏

大正十五年初夏

〔関防印〕「淡如水」

*¹⁴¹山光照檻海色入窓

題于六甲山麓文雄新居 湧泉〔落款〕「井深梶之助」〔湧泉〕

〔井深日記〕大正一五年七月二一日

加藤咄堂ノ「死及死後」ト題スル放送講演ヲ聞ク、発音明晰ナレトモ声ハ少シクサビ気味ニテ感好キ声ニ非ス、話ノ筋道ハ能ク一貫セリ、結局ハ道德觀念及ビ信仰ニ由テ此問題ヲ解決スルノ外ナシト云フニアリ、句アリ曰ク

¹⁴² 飛込んだ力で浮ぶ蛙哉

要スルニ自力仏法ノ意ナリ、

〔説教講話集〕(D1201610370) 大正一五年八月八日於東山荘

〔我山にむかひて目をあぐ〕のうち

固ヨリ我等ノ仰キ見ル不二山ニ二ツハ無シト雖モソノ我ラノ心ニ反射スル姿或ハ我ラガ

¹⁴² 三森竜山編『禅林世語集 参禅必携』(白山書院、一九四一年)所収。

此上ニ対シテ抱ク感想ハ十人十色ナルベシ、蓋ソノ思ハ人ノ環境ニモ依リ年齢ニモ依ラシ、同一ノ明月ニ対シテモ歡喜ニ堪ヘザル人モアリ、或ハ特ニ千々ニ物ノ哀レヲ感ズル人モアル如ク同山ニ対シテ人ノ思ハ様々ナラン、

¹⁴³ 心あてに見し白金雲はふもとにて思はぬ空に晴る、不二山の嶺

ト只管ニソノ崇高ナル姿ニ打タルモアルベク、或ハ又、

¹⁴⁴ 敷島の大和心を人間はバ富士の高根の雪と答へん

ト彼ノ頂ニ残レル白雪ノ真純サニ憧マツル、者モアルベク、或ハ又、

¹⁴⁵ 千たび見て千たびめづらし風雲の姿定めぬ不二の芝山

ト其姿ノ千変万化到底満足スベカラザル所ニ感興ヲ抱ク人モアラン、

昭和二年（一九二七）

〔井深日記〕昭和二年一月冒頭

願くは我らに己が日を数ることを教へて智慧の心を得しめ給へ 詩篇九十ノ十二

人生非夢

*¹⁴⁶ 人の世は夢にはあらし天地をしろしめす神の在すかきりは

143 『琴後集(村田春海)』一〇五一番歌および『類題草野集』下巻・雑部所収。いずれも詞書「富士の山に雲のはるるを見て」・結句「はるるふじのね」。

144 参考「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」。この歌は本居宣長の和歌として人口に膾炙するが、家集や短冊懐紙等には見えない。佐佐木弘綱編『和歌よ、のあと』(博文館、一九〇八年、六二頁)に「肖像自讃」と詞書して当該歌が載るように、宣長の肖像画に自讃として書かれた和歌として知られる。ただし、井深が記すような下句「富士の高根の…」とする和歌は不明。

145 『千々廼舍集(千種有功)』(佐々木信綱編『日本歌学全書』続第七編、博文館、一八九八年、七二頁)所収。詞書「不二」。

〔説教講話集〕(D1201610374) 昭和二年二月二十七日於東京中央放送局

「ラヂオ修養講座 イエスキリストノ神観ニ就テ」のうち

私ノ話題ハイエスキリストノ神観、即チ神ノ觀念ト申スコトデアリマスガ、或ハ修養講座ト神ノ觀念ト何ノ交渉ガアルカト不審ヲ懷カル方ガアルカモ知レマセヌ、ソレモ一応御尤デアリマスガ、然シ能ク考ヘテ見マスト、精神修養ト云フ事ハ只処世ノ道ト云フヤウ事バカリデナク、ソノ根本タル所ノ正意、誠心、即チ良心ノ問題ニマデ往カネバナリマセヌ、ソウナリマスト、明治天皇ノ御製ニモ

¹⁴⁷ 目にみえぬ神の心に通ふこそ人の心の真なりけり

トアリマスル如クハ遂ニ神ト云フ所マデ遡ラネバナラヌト考ヘマス、

〔井深日記〕昭和二年四月九日

午後、秋葉氏ニ行キ書道ノ教授ヲ受ク、帰途木村ニ立寄り暫時休憩ス、長者丸一帯ノ桜花方々爛漫タリ、今年ハ例年ヨリ一週間位後レタルヤウナリ、

夕日が岡に花をなかめて

*¹⁴⁸ 花をめて花に別れをしみつ、夕日が丘に日はくれにけり

〔説教講話集〕(D1201610372) 昭和二年七月一日於富士見町教会

「我山に向ひて目を拳く我が助けは何処より来るか、詩篇百廿一の一」のうち

我が邦人ノ自然界ニ対スルハ単ニ所謂風流ノ心ニシテ其処ニ何等道德及ビ宗教的意味ハナキ者ノ如シ、若シモ此ニ之レ有リトセバ月ヲ見テモ花ヲ観テモ所謂物ノアハレヲ観ズト云フコト即チ諸行無常ヲ観スルコトアルノミ、恐ク思慮深ク真面目ナル日本人ノ最モ

深く共鳴愛吟スル所ノ和歌ハ此感想ヲ謳ヒタル者ナラン、例ヘバ¹⁴⁹西行ノシギ立ツ沢ノ和歌ヤ¹⁵⁰芭蕉ノ古池ノ句ヤ夏草ノ句ノ如キ是レナリ、「中略」日本ニ於テ山ト云ヘバ申ス迄モナク先ヅ第一ニ富士山ヲ唱フルガ、今試シニ富士山ヲ讀ミタル二三ノ有名ナル歌ヲ見ルニ或ハソノ高く天空ニ聳フルヲ驚キテハ

¹⁵¹心あてに見し白雲はふもとにて思はぬ空にはるゝふじの根（春海）

と謳ヒ或ハその姿ノ千変萬化窮ナキニ感ジテハ

¹⁵²千たび見て千たびめつらし風雲の姿さだめぬふじの芝山（有功卿）

ト讀ミ、或ハ亦ソノ千年ノ雪ヲ頂ク姿ノ清ケサニ打レテハ

¹⁵³敷島の和心を人問ばふじの高根の雪と答へよ

と謳出タルモアリ、然レトモ或ハ遙カニ富岳ノ空間ニ聳フルヲ仰キ見テモ或ハソノ絶頂ヲ極メテモ之ニ対シテ我が助ケハ何処ヨリ来ルヤ、我が助ケハ天地ヲ造リ給ヘル神ヨリ来ルト云フ心ヲ言著ハシタル者アルヲ知ラズ、

〔井深日記〕昭和二年二月二二日

漸ク和田仙太郎及ビ神戸大嶋義胤氏ノ為ノ揮毫各二枚即チ前者ノ為ニハ天祐自助ノ横額ト¹⁵⁴あさみどりの一首、後者ノ為ニハ天高氣清ノ額トあさみどりの一首ヲ揮毫シテ發送ス、未タ吾ガ意ニハ満タザレトモ先ヅ以テ借金ヲ消シタル如キ感アリ、

149 西行の詠んだ「こころなき身にもあはれはしられけりしぎたつさはの秋の夕ぐれ」のこと。『山家集（西行）』・四七〇番歌・詞書「あき、ものへまかりけるにちにて」、および『新古今集』三六二番歌所収。

150 松尾芭蕉の「古池や蛙とびこむ水のおと」（貞享三年刊『はるの日』所収）、および「夏草や兵どもが夢の跡」（元禄四年刊『猿蓑』のち元禄一五年刊『おくのほそ道』所収）のこと。

151 ↓143参照。

152 ↓145参照。

153 ↓144参照。

154 現在、井深の和歌に「あさみどり」を用いたものは見当たらない。

〔説教講話集〕(D1201610374) 昭和二年二月二十六日於愛宕山上放送局
 「クリスマス講演」のうち

先ヅ第一、クリスマスハ主トシテ家庭的親愛喜悅ノ祭日デアリマス、恐ラクキリスト者ノ家族ニ於テハ一年三百六十五日中此日程喜バシク楽シイ日ハアリマスマイ、殊ニ子供達ニ取テハ之レ程待遠イ楽イ日ハアリマセン、我々ハ日本ノ御正月ト云フコヲ考テ見レバ幾分カソノ心持ガ判ルト思ヒマス、アノ御正月ト云フ言葉ノ中ニハ云フニ云ハレヌ一種独特ノ暖カ味〔ガ〕籠テ居リマス、ソコデ、

¹⁵⁵元日や昨日の鬼が礼に来る

杯ト云フ様ナ川柳モある訳デ、昨夜迄ハ額ニ青筋立テ、論判シタ人モ一夜明レバ心機一転、恵比寿顔ヲシテ礼廻ニ来ルト云フ様ナ訳デアリマス、

昭和三年（一九二八）

〔井深日記〕 昭和三年一月冒頭

*¹⁵⁶七十四年又加一 幸逢昭和戊辰春

〔説教講話集〕(D1201610375) 昭和三年二月十九日於桜井女塾

「クリスチアンハ何ヲ信ズルカ」のうち

クリスチアンハ何ヲ信ズルカヲ述ンニ、第一ニ天地万物ノ創造者タル唯一ノ神ヲ信ズル者デアアル、先ニ引イタ所ノ信仰ニ由テ我ラハ諸ノ世界ハ神ノ言ニ由リテ造ラレタルヲ悟ルトハ即チ之ヲ謂フノデアアル、然ラバ目ニ見ヘヌ唯一ノ神ヲ信ズルトハ如何ナル意義デ

155 大淵涉編『新撰発句拾万集』下（駉々堂、一八九三年）所収。

アルカ之レ次ニ起ル疑問デアラウ、〔中略〕然ラバ、クリスチアンハソノ目ニ見エザル唯一ノ神ヲ如何ニシテ知り且ツ信ズルカ、之レ次ニ来ル疑問デアラウ。若シモ形アリ見ユル者ナラバ目ニテ之ヲ見ルコトヲ得ルデアラウ。然レトモ神ハ靈ニシテ形ナク自以テ見ルベカラザル者デアル。クリスチアンノ神ハ偶像ニ非ズ、又人ノ手ヲ以テ造管セラレタル宮殿神社ノ中ニ住ミ給フ者ニモ非ズ、明治大帝ノ御製ニモ

¹⁵⁷ 目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけり

トアル如ク真ノ神ハ人ノ目ヲ以テ仰見得ベキ者ニ非ズ。〔中略〕「天文」の語、天文地理、日月、星辰、山岳、河海、動物、植物（芭蕉佐渡の海の句）△

〔欄外〕△¹⁵⁸ 荒海や佐渡に横ふ天の河

〔井深日記〕昭和三年一〇月一七日

壺中庵ノ詩、一首ヲ得タリ、

*¹⁵⁹ 有山有海又有泉 静観自得壺中天

〔井深日記〕昭和三年一〇月二九日

明治学院高等商業部主催全国書道展覧会へ参考品トシテ揮毫半截三枚ヲ出ス、一ハ功不可以虚成名不可以偽立ノ十二字、二ハ碧雲天紅葉地ノ六字、三ハ

*¹⁶⁰ 有山有海又泉石 静観自卜壺中天

ノ十四字ナリ

157 ↓71参照。

158 松尾芭蕉『おくのほそ道』（元禄一五年刊）所収。この句は、芭蕉がおくの細道の旅の途中で書いた俳文「銀河序」にも見え、新潟県の出雲崎に泊まった時に吟じたことが知られる。

159 松本智子「井深梶之助の別荘「壺中庵」のこと」〔明治学院歴史資料館News Letter No14〕二〇二三年三月）参照。

160 当時の全国展覧会の様子を映した写真が「卒業アルバム」創立十周年記念写真帳（当館所蔵、ID1201610001）にあり、会場の壁面に当書も見える。

〔説教講話集〕(D1201610377) 昭和三年一月二十五日於日本橋基督教会

「今は眠より覚むべき時なり」のうち

固ヨリ是レハ天地ノ主タル全能ノ神ノ妙ヘナル摂理ニ依ルトハ云へ、明治天皇ヨリ今上天皇ニ至ルマデ我が皇室ノ一視同仁公平不偏ナル皇謨ノ賜トシテ感激ニ堪ヘザル所デア
ル、然ラバ我ラハ此神ト君トノ嶋恩ニ対シテ如何ニ報イ奉ルベキ乎、是レ此際我ラガ最
モ真面目ニ考究スベキ問題デアラネバナラヌ、〔中略〕若シモ彼等ニシテ誠意ヲツツテ神
ヲ敬ヒ畏ルル心ガアルナラバ此ノ如キ人ヲ欺キ己ヲ欺テ収賄若クハ贈賄シテ私腹ヲ肥ス
ト云フ如キコトハ出来ヌ筈デアアル、明治帝ノ御製ニ

¹⁶¹ 目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心のまことなりけれ

トアルガ畢竟スルニ此ノ目ニ見エヌ神ノ御前ニ在テ自ラヲ歎カヌ誠心欠如シテ居ル所カ
ラ種々ノ誘惑ガ附込ムノデアアル、

昭和四年（一九二九）

〔井深日記〕 昭和四年一月冒頭

*¹⁶² 渋柿も熟せば甘し年の功

〔井深日記〕 昭和四年一月二五日

真澄ノ病氣懸ニテ何事モ手ニ付カズ、氣ヲ転セシガ為ニ久振ニテ揮毫ヲ試ム、一枚ハ
西山知義氏ヨリ小口亮氏ヲ経テ依頼シ来タル扁額即チ清心保真ノ四文字ヲ書上ゲ、ソノ
外ニ

*163 有山有海又林泉 卜得湘南壺中天

ノ一一句ヲ揮毫シタリ、
(44)

〔井深日記〕 昭和四年二月冒頭

*164 洪柿も熟せば甘し年の功

〔井深日記〕 昭和四年三月二四日

午後松沢氏来訪、青年会同盟及び諸青年会職員有志者ヨリノ花料壹百六十円ヲ贈ル、諸方面ノ同情・親切、実ニ感激ノ至ニ不堪ス、人ノ同情ハ此ノ如キ受難ノ時ニ顕ハル、ナリ、但、親子ノ情ニ於テハ断腸ノ思ナキ能ハザルナリ、

*165 わすれんと思へばいと、わすられじ忘れかねぬる此思かな

〔井深日記〕 昭和四年三月二八日

午前、真澄焼骨ヲ納メタル函ヲ閉鎖シタリ、其内ニイエスノ言乃チ我ハ復活ナリ、生命ナリ、我ヲ信ズル者ハ死ルトモ生キンノ一節ト死ハ勝ニ吞レタリトノ一句ト

*166 わすれむと思へばいと、わすられてわすれかねぬる此思かな

ノ一首ヲ書シテ入ル

165 参考「わすれんとおもへばいとどわすられぬ君心みにわすれじとのみおもひわたらむ」(『うけらが花初編(加藤千蔭)』一五五八番歌、および『類題草野集』下巻・雑部所収。いずれも詞書は「相聞」)。井深の三男真澄は一九二六

(大正一五) 年秋渡米、オーバリン、コロンビア両大学にて修業し、一九二八(昭和三) 年秋以降南カリフォルニア大学に転じて学業に励んでいたが、冬になり発病し、養生叶わず一九二九年二月五日、加州ロスアンゼルス市ホワイトメモリアル病院にて永眠(三男井深真澄の訃報通知の書簡) ID1201910132)。

166 真澄の葬儀は三月二〇日、埋葬は二八日に執り行われた。

〔井深日記〕昭和四年三月二十九日

真澄ノ遺骨ヲ青山ニ葬リテ後、

*167 地につける軀はちりにかへるとも靈は天国に昇らさらめや
 *168 塵はちりに帰らばかへれ形なき靈は天国のものこそしれ知らすや

〔中略〕

真澄が異郷にて大患にかゝり希望をもちて世を去りし日を偲びて

*169 死は勝に呑れたりとの聖言のまことしるけき今日のかしこさ

〔説教講話集〕(D120161037) 昭和四年九月於新築富士見町教会堂礼拝式

〔何故ノ伝道ソヤ〕のうち〔本文全体を赤線で削除〕

第一ニ挙ゲネバナラヌノハ我ガ邦ニハ仏教モアリ神道モアリ、数百年ノ歴史ヲ有シ政治ニモ道德ニモ密接ノ関係ヲ有スル所ノ従来ノ宗教ガアルデハナイカ、然ルニ何ヲ苦ンデ尚ソノ上ニキリスト教ヲ輸入セントスル乎、日本国民ノ為ニハ日本従来ノ宗教デ事足ルデハナイカ、固ヨリ仏教ヤ神道トキリスト教トノ間ニハ儀式上ニモ教義ニモ多少ノ相違ハアルデアラウ、然シナガラ畢竟スルニ真ノ道ニ二ツアル筈ハナイカラ、帰着点ハ一ツデハナイカ、古歌ニモ

170 わけ登る麓の路は異なれど嶺には一ヶ月を見る

ト云フ歌モアルデハナイカ、

167 真野文二は真澄の死去に際し、「井深真澄氏の外国にてみまかりしをいたみて」と詞書して次のような和歌を詠んでいる。「夢とのみ思ひなされて今もなほ君かへります心地こそすれ」〔蜂声集〕八一頁。

168 「塵はちりに」は、キリスト教の葬儀の際に用いられる祈祷文 [Earth to earth: ashes to ashes, dust to dust (土は土に、灰は灰に、塵は塵に)] (『旧約聖書』「創世記」三章一九節に由来) に拠る。

169 「死は勝に呑れたり」は、文語訳(大正改訳)『新約聖書』「コリント人への前の書」一五章五四節に拠る。

170 「わけのぼるふもとの道はことなれど同じ高嶺の月を見るかな」わけのぼる麓の道は多けれど同じ高嶺の月をこそ見れ」の形で流布する。後者は『一休和尚全集』(光融館、一八九八年)にも見え、作者を「一休禅師」とする用例もある(内ヶ崎作三郎編『人生日訓』、大日本図書、一九一五年)が、多くは出典未詳。古歌として引用されることが多い。

昭和五年（一九三〇）

〔井深日記〕 昭和五年一月二三日

午後秋葉氏ヨリ送來リシ同氏ノ揮毫ヲ長崎東山学院草野芳槌氏へ郵送ス、¹⁷¹明治帝ノ目に見えぬ神の心にノ御製ヲ小玉版箋全紙ヲ横ニ書レタル者ナルガ二三度書直シタル由ナレトモ上出来トハ思ハレズ、秋葉氏ハ矢張仮名字ハ不得意ノヤウナリ、横書キハ殊ニ困難ト思ハル、

〔井深日記〕 昭和五年六月冒頭

植村季野刀自病床の歌（六月八日永眠）

¹⁷² 我はたれかくも恵に包れて病の床におそれかしこむ
¹⁷³ つくられし者の生死は我ならずさればまかせん恵のみ手に
¹⁷⁴ みめくみはわがみまか^{（つと）}かりし人の上にあふれこぼれて我にかゝりぬ
¹⁷⁵ 大み手にけふも抱かれてすくるかなとこ世にさむるしの、めまちて
¹⁷⁶ 人々の愛につゝまれ今日もまたしの、めの空仰くうれしさ
¹⁷⁷ み位は大空たかく地の面はみとりしたゝるもすそかんばし
¹⁷⁸ 勝ちて占むかぶとのひもをいやかたくむすぶもみ手のみたすけとしる

〔井深日記〕 昭和五年七月九日

西鎮氏ヨリ喜寿祝ストテ

¹⁷⁹ 玉の井の深き聖旨を身にうけて胸にあふるゝ活ける真清水

171 明治天皇御製「目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心の真なりけり」↓71参照。

172 植村季野は植村正久の妻で、一九三〇（昭和五）年六月八日死去。『植村正久とその時代 第五卷』（二〇六九頁）の「三好務牧師葬儀之辞」の中にこれらの和歌についての記述がある。『植村正久夫人季野がことども』六三頁参照。

180 真清水の湧きて流る、梶川に汲みて（いせ）医さん千万の人

〔井深日記〕昭和五年八月三〇日

文雄ヨリ劉建中ト申ス支那人来神シタルニ付、其揮毫一枚ヲ贈来ル由申来リタルニ付、自分モ半切二枚ニ揮毫シテ之ヲ贈ルコトトナス、ソノ一ハ

*181 有山有海又林泉 卜得湘南壺中天

ナリ

〔井深日記〕昭和五年九月冒頭

頃日在グラスコウの真野文二氏より

182 槌の音の絶えねの川と聞しかど船の煙も立すなりけり

ト読ミテ来リシカバ、返シニ

*183 槌の音はたえねばたえねタエネ川学びの道は絶えずあらなん

(ぬなるらん)

ト読ミタリ、 註 グラスコー大学ハタイン川畔ニ在リ

〔井深日記〕昭和五年九月六日

早天海岸ヲ散歩シ富士山ノ旭ニ映ズルヲ観テ一首ヲ得タリ、

*184 朝まだき逗子の浦よりなかむれば朝日に匂ふふじの貴さ

183 参考「玉のをよたえなばたえねながらへばしのぶる事のよわりもぞする」(『百人一首』八九番歌、作者「式子内親王」)。

184 富士山については、(井深日記) 同年九月八日条にも「海岸ヨリ眺メタル旭ニ映ズル富岳ノ光景ハ何時モ高崇譬フルニ物ナシ」と記している。

〔中略〕真野氏ヨリ

¹⁸⁵ わたつ海のはては相模の浜なれや君たゝすみて見てやあるらん
ト申来リケレバ

*¹⁸⁶ あさなぐ相模の浜に打出て君か舟路のやすきをぞおもふ

ト返ス

〔井深日記〕昭和五年二月一七日

真野氏ヨリ羽根ぶとんヲ贈ラレタレバ、

*¹⁸⁷ あたゝかき羽根のふとんに包まれて君がなさけをゆめにみるかも

ト読ミテ贈リタレバ、其返シニ

¹⁸⁸ 羽根衣かつきて君はあたゝかきゆめをむすぶと聞くぞうれしき

トアリケリ

〔井深日記〕昭和五年二月三日

八十子サンノ草庵ヲ訪フ、存外ニ元氣ナリ、保科近恵翁ノ¹⁸⁹「さゝき囀る」ノ半切ト
父上ノ¹⁹⁰「世を知らずめばみやこも暦なき」ノ半切ヲ贈リタルニ大ニ喜バレタリ

¹⁸⁷ 参考「常不人国山乃」秋津野乃 垣津幡篤 夢見鴨」(万葉集)一三四五番歌・読人不知。前日、井深は真野より欧州土産として羽根ぶとんをもらった。

昭和六年（一九三二）

〔井深日記〕昭和六年二月一三日

会津白虎隊唯一ノ生存者飯沼貞雄氏ハ昨日仙台ニ於テ病死シタリト時事新報ニ見ユ、ソノ辞世ニ

¹⁹¹ 過し世は夢か現か白雲の空に浮べる心地こそすれ

〔井深日記〕昭和六年六月一八日

夕刻大儀見元一郎氏来訪、¹⁹² 白虎隊ノ歌二首ヲ携来リテ示ス、

〔井深日記〕昭和六年七月二四日

海岸ノ楽焼店ニ於テ小花瓶ニ

*¹⁹³ 有山有海又林泉 ト得湘南壺中天

ノ一句ヲ書ヒテ焼カシメタリ、

〔井深日記〕昭和六年八月四日

勝治ハ此ニ来リ久振ニテ一日ノ清遊ヲ享樂シ大満足ニテ帰京ス、自分ヨリハ「長生在清心寡欲」ノ句ヲ半切ニ認メ、又小型ノ壺ニ

*¹⁹⁴ 有山有海又林泉 ト得湘南壺中天

ヲ揮毫シタル楽焼ヲ記念トシテ贈与シタルニ是亦大喜ノ様子ナリ

191 『時事新報』（一九三二年二月一三日）では、「同氏（飯沼貞雄）は生残つたことをことを恥ぢてか白虎隊のことは殆ど口にしなかつたが左の如く感想を詠んで居る」として当該和歌を掲載。

192 「〔書簡〕山色新・白虎隊を詠んだ詩」（ID1201610631）に「白虎隊」と詞書されて書かれた次の二首のことかと思われる。「まこ、ろは花とも見まし君かため蕾ながらもつよく匂ひて／惜まれて蕾の花ハちりにけり飯もり山に荒むあらしに おほきみもと」。

〔井深樞之助書幅〕（明治学院大学図書館資料）昭和六年晩夏

*¹⁹⁵ 蝸角卜居心自閑 蠅頭臨写眼能明

昭和辛未晩夏

七十八叟壺中庵湧泉書〔落款〕「湧泉」「井深樞之助」

〔井深日記〕昭和六年九月二五日

午前小石川松平子爵邸ニ参リ、一昨日御話アリタル正之公十一才ノ時揮毫ノ扇面（但未
タ確証ヲ欠ク者也）及ビ容保公ノ

¹⁹⁶ 散る花を惜し人の言の葉に閑のなこそは名を留めけれ

ノ御揮毫ノ幅ト野矢常方ノ短冊一枚ヲ献上シタルニ、子爵ヲ始メ同夫人及ビ御後宮様モ
御同席ニテ之ヲ見テ大ニ御満足ニテ厚ク御礼ヲ述ベラレタリ、尚、先ニ或人ヨリ献ジタ
ル容保公ノ御筆ト称スル者ヲ示シ、且多数ノ同公ノ御短冊ヲ取出シテ之ト比較シテ疑点
ヲ指摘セラレタリ、

〔説教講話集〕（D1201610384）昭和六年一月二五日於日本橋基督教会

〔患難と練達〕のうち

古ヘヨリ患難身ヲ玉ニスト云ヒ、又俗ニ苦勞人ト云フ言葉モアリ、本當ニ能ク義理人情
ヲ理会スル立派ナ人物ニナルニハ相当ノ患難辛苦ヲ経験スル必要ガアルコトハ古人モ常
ニ言フタ所デアアル、世間ニ水戸黄門ノ歌トシテ伝ヘラル、所ノ一首ノ狂歌ガアル、曰
ク、

¹⁹⁶ 会津若松市所蔵の和歌短冊
に、松平容保の「義家なこそこの閑
の図に ちる花をなけきし人の言
のはにせきの名こそは立残りけ
り」がある（『平成二十八年度若松
城天守閣郷土博物館秋季企画展図
録 松平容保』（若松城天守閣郷
土博物館、二〇一六年）五四頁参
照。

197 詩は唐詩歌は古今に住まば江戸楽したよりは苦勞した人

若シモ是レガ本當ニ水戸黄門公ノ歌デアルナラバ、幕府時代所謂御三家ノ一デ而モ副將軍ノ地位ニ居リ何不自由ノナキ身デアリナガラ、真人間ニナルニハ相當ノ苦勞ノ必要ヲ認メラレタノハ、流石名君ト申サネバナラヌ、保科正之公ト山崎闇齋ノ話、尚又、

198 うきことの尚この上につもれかしかきりあるみのちからためさん

ト謳フタ憂國ノ士モアリ、

〔説教講話集〕(D1201610379)〔昭和六年〕(「患難ト練達」の文章の後に少しあけて次の二首のみ記入)

199 うきことのなを此上に積れかしかきりある身の力ためさん

200 詩ハ唐詩歌ハ古今ニ住まば江戸楽したよりは苦勞した人(苦勞人)

昭和七年(一九三二)

〔説教講話集〕(D1201610384) 昭和七年七月三一日於鎌倉教会

〔聖パウロノ体験ニ就テ〕のうち

古イ言葉デアルガ、患難身ヲ玉ニスト云フコトガアル、又水戸黄門ノ狂歌ニ

201 詩ハ唐詩歌ハ古今ニ住バ江戸楽シタヨリハ苦勞シタ人

〔ト〕アル、世俗的ノ意味ニ於テモ人物ヲ磨クハ多少ノ患難辛苦ガ必要ガアル、

197 ↓4 参照。
198 後世のものであるが、三森竜山編『禅林世語集 参禅必携』(白山書院、一九四一年)に熊沢蕃山の歌として載るほか、谷口澄夫・宮崎道生編『増訂蕃山全集』第七卷(名著出版、一九八〇年)一六一頁「五 蕃山先生和歌」に所収。

199 ↓4 参照。

200 ↓4 参照。

201 ↓4 参照。

〔井深日記〕昭和七年一月一四日

原胤昭氏ヨリ今年八十二成タリトテ、

²⁰² 若きよりヤソだくと囃された御蔭で今日は八十の寿

ト申シ来レリ、其返シニ

²⁰³ 八十の春迎ふる君は幸なれや昔ながらのヤソの元気で

(又ハ君ぞめでたけれ)

〔井深日記〕昭和七年一月一六日

荒川美智子ノ死ヲ惜ミテ

²⁰⁴ 梅の花みるにつけても思ふかな春にそむきてゆきし少女を

²⁰⁵ ちる花をみるにつけても思ふかな春をも待たでゆきしいとしご

〔井深日記〕昭和七年四月一〇日

上京中ノ荒川夫妻ハ近親ノ人々即チ真野夫妻、沼沢久仁、片山とよ、ゆき子、木村夫妻
及ビ佳寿枝²⁰⁶、磯子、我等及ビ清見ヲ丸ノ内会館ニ招キ、美智子埋葬式ヲ無滞結了シタル
謝意ヲ表スル意味ヲ以テ午餐ヲ饗シタリ、席上文二氏ハ忘レナ草ノ造花アリタレバ之ニ
因ンテ左ノ一首ヲ読レタリ、

²⁰⁶ 忘る、な忘るまじとの言の葉も今はかたみとなりけるかな

余も亦途中桜花の満開せるを見テ読ミタル一首ヲ披露シタリ、

203 参考「さびしさはむかしながらの山なれやふりにし寺のゆきのあさあけ」〔長慶天皇千首〕一〇五番歌。

204 「少女」は前日死去した荒川美智子のこと。井深の長女千代子と荒川文六の三女で、当時一八歳であった〔荒川信夫著『父・荒川文六』(一九七一年)所収「荒川文六年譜」参照)。参考「うもれ木をみるにつけても思ふかなしづめるま、の人もありやと」〔明治天皇御集〕宮内省、一九二二年)、「す、む世を見るにつけても思ふかなわが國民のうへはいかにと」〔同〕。

205 「いとしご」は204番歌の「少女」と同じく荒川美智子のこと。

206 参考「わかれちにうかりし月のめぐりきていまはかたみとみるもはかなし」〔雅有集〕四二五番歌。

*207 咲く花に向ひてなをも思ふかな春にそむきて行きし乙女子
 *208 名にし負ふわすれな草をしをりにてなかくと、めんけふのつとひを

〔井深日記〕 昭和七年一〇月二三日

零時三十分ヨリ目黒雅叙園ニ於テ木村佳寿江幸田家へ嫁入披露ノ午饗ヲ開ク、〔中略〕、食後庭内ヲ散歩シ片山ノ技術ニテ一同活動写真ヲ取ル、之ニテ佳寿江ノ結婚モ首尾能結了セル、予ハ席上例ノ駄句ヲ物シタリ、

*209 めくまれし幸田の佳寿江水清しその行末やめてたかるらむ
 *210 めくまれし佳寿江の流水清く幸田のみのり豊かなるらん

昭和八年（一九三三）

〔井深日記〕 昭和八年一月冒頭

*211 七十九年又加一 歡迎八旬更生春

〔井深梶之助書幅〕〔伊藤氏寄贈資料〕のうち、ID3302070023）昭和八年一月一日

*212 七十九年又加一 歡迎八旬更生春

昭和癸酉元旦

八十翁湧泉

207 参考「咲くはなにむかひてもまづ思ふかな静なるよにしづかなるみを」（『三草集（松平定信）』三六三番歌・詞書「はなを」）。
 209 佳寿江は井深の三女春子の子。

〔井深日記〕 昭和八年一月七日

荒川千代子ヨリ勅題朝の海ノ和歌一首ヲ送来リシ故、之ニ対シ柄ニモナキ俳句ヲ吟ジテ返シタリ

*²¹³朝日影なみまにをとるはるの海

〔井深日記〕 昭和八年四月二日

明日ハ木村敬子ト藤村四郎ノ結婚ニ付左ノ一句ヲ色紙ニ揮毫シテ贈ル、

祝藤村四郎木村敬子両君之婚姻

*²¹⁴藤木二邨合為一 協力欲建理想郷

〔説教講話集〕 (D1201610387) 昭和八年

〔昭和八年七月九日文雄 健次、清見三名ノ主催に依リ自黒町雅叙園ニ開かれたる自分八十歳の賀に際して〕
のうち

パラチブスに罹つて入院した時偶ま作つた漢詩の真似（本当の詩に非ず）がある、曰く

*²¹⁵生来五十始臥病 臥病三句所得多

病而始知健康貴 也知健康不足誇

歲月滔々流不止 天地悠悠自進化

死生有命不可知 只要日日臨終心

是は勿論本格の漢詩では無い、平仄（平）もなければ、韻も踏んでない、耳ならずその意味に於ても極めて平凡であるが、唯結句の唯要日日臨終心だけ少し異つてゐて一言釈明の必

要があるかも知れぬ、即ち果してその意味が言著て居る（ママ）どうか分らぬが、自分の考では此一句の中にキリスト信者の人生観を含めた積である

〔説教講話集〕(D1201610387) 昭和八年

〔昭和八年七月九日文雄、健次、清見三名ノ主催に依り目黒町雅叙園ニ開かれたる自分八十歳の賀に際して〕に挟まれた「祝詞ニ対スル答辞」のうち

*216 生来五十始臥病 臥病三旬所得多

病而始知健康貴 也知健康不足誇

歲月滔々流不休 天地悠悠自進化

死生有命不可知 只要日日終終心

結局、只要日日臨終心ノ意味、ジョンウエリレート某英国貴婦人トノ問答ノ話

述懐

*217 *はらからの心つくしにはけまされやすけくこふる八十路山かな

*218 八十路やまけふこふるともまたさらによつへき峰のありとこそしれ

*219 つくし「サバヤ」なんちからのかきりみちのため八十路翁となりはつれとも

〔井深日記〕昭和八年七月一〇日

磯子来り、大連清見、福岡荒川、若松和田ノ三人ニ記念ノ写真、色紙、袱紗トヲ郵送ス、昨日ノ来賓ハ高円寺井深おとせ老人、同一男氏、勝治夫妻、真野夫妻、沼沢くに、八重子、文雄、健次夫妻、片山、木村両夫妻、文六氏夫妻代理康夫夫妻ナリ、全ク水入ラズノ近親者耳ノ祝筵ナリキ、荒川及ビ清見夫妻ノ来ル能ハザリシハ残念ナリキ、此折

述懐ノ蜂腰ハ

*220 はらからの心尽しに力つきことなく越ふる八十路山かな

*221 八十路山けふ越ふるともさらにまたよつへき峯のありとこそしれ

*222 人の世の八十路の坂^はをけふ越えぬむべき道は尚半はにて

*223 つくさなんいのちのかきり道のため八十路翁となりはつれとも

〔井深日記〕 昭和八年八月三一日

岡見正氏へ半切一枚ニ

*224 沿澗涛声喧戸外 捲簾山色入窓来

ヲ揮毫シテ是正ヲ請フ、

〔井深樞之助書幅〕（明治学院大学図書館資料） 昭和八年晩夏

*225 沿澗涛声喧戸外 捲簾山色入窓来

昭和癸酉晩夏於湖南壺中庵

八十翁湧泉書〔落款〕

〔井深日記〕 昭和八年九月一日

今日ハ大地震十周年記念日デ、東京ニテハ種々ノ催シモアル由ナルガ、自ラモ十年前ノ今日ヲ回想シテ感慨無量ナル者ガアル、自分一個人トシテ感謝ニ堪ヘザルハ、当時病後神経衰弱ノ為メ漸ク四五町ヲ散歩シ得ル位ナリシニ、漸次健康ヲ恢復シテ十年後ノ今日

全ク無病ノ身体ト成リタルコトナリ、先日海岸ニテ水着ノ俣取りタル写真ニ題シテ狂歌
二首ヲ讀ミタリ、

*226 西東隔もあらぬ大海の水に親む気味のよさかな

*227 千よろづと波間に跳る若人の中に一人の翁ありけり

交はる翁こそ我

〔井深日記〕 昭和八年九月三日

鷺山氏ノ為メ予テ約束ノ扁額虚心者福矣ノ五字ト別ニ

*228 沿澗涛声喧戸外 捲簾山色入窓来

ノ半切ヲ揮毫ス、

昭和九年（一九三四）

〔井深日記〕 昭和九年一月冒頭

*229 東海春秋八十一 感謝天恩復迎新

〔井深日記〕 昭和九年一月二六日

片山千鶴子ヨリ手編のシャツを贈り来ル、依テ其返礼トシテ色紙二枚ヲ贈ル、其中一枚
ニハ老鶴万里心ノ五字、他ノ一枚ニハ左ノ狂歌一首ヲ認ム、

226 この頃、井深は自らの水着の
写真に歌を添えて親しい人々に
贈っていたようである。詠草は不
明であるが、「井深日記」昭和八
年八月二二日条にも「鷺山氏へ先
日来訪ノ礼状旁水着ノ写真一枚ト
自分ノ八十回ノ誕辰ヲ迎フル拙詠
五首ヲ贈ル」とある。口絵写真6
のほか、井深アルバムの中には井
深の水着の写真が数点残ってい
る。

*230 千鶴能が手あみの衣身につけて風も嵐も雪も物かは

〔井深日記〕昭和九年二月七日

児島氏ヨリ六十春秋夢夜過帰来湖南宿漁家不語棹歌身途險園裏春光養蘭花ト述懐ノ詩ヲ賦シ来リタレバ、之ニ対シテ和音ニハ非ザル無音ノ狂詩ヲ賦シテ答ヘタリ

*231 自古人生似航海 誰書航海無風波

遙風時有阻行路 激浪亦將欲覆船

雖然我有在羅針 何疑平安入港日

呵々

〔説教講話集〕(D1201610388)昭和九年五月六日於白金基督教会

〔現代ニ於ケルキリストノ教会〕のうち

今朝ノ説教ノ題ハ現代ニ於ケルキリストノ教会デアアル、即チ現在世界ニ於ケルキリストノ教会ハ彼ノ派、此派ノ差別ナク、全体トシテ如何ナル立場ニアルカ、〔中略〕然ニ之ヲ考ルノニハ此ニ一ツノ先決問題ガアルト思フ、即チキリストノ教会ト云フ者ハ時ト場合トニ依ツテ変化スル者カドウカト云フ疑問デアアルガ、是ハ我等ノ根本思想ニシテ大切ナ問題デアルト思フ、然ラバ夫レハドウカト云フニ見ヤウ次第デ或ハ然リトモ否トモ答ヘルコトガ出来ル、〔中略〕コリント前書ニモ我童子ノ時ハ語ル所童子ノ如ク、思フ事童子ノ如ク、論ズル事モ童子ノ如クナリシガ、人トナリテハ童子ノ事ヲ棄タリトアツテ此ハ自明的ノ事実デアアルガ、併シ「我」ナル者ハ童子ノ「我」ト成人シタル後ノ「我」トハ別ナ人間デアルトハ云ハレヌ訳デアアル、ソコデ「三ツ児ノ魂百マデ」ノ諺モアル訳デアアル、或古歌ニ

230 初句「千鶴能が」は、鎌倉時代の武将安達泰盛の娘千代能が詠んだ「千代能が頂く桶の底ぬけて水溜らねば月も宿らず」の初句を踏まえるか。この和歌は、鎌倉市の海蔵寺門前にある「底脱ノ井」(そこぬけのい)の名前の由来と伝えられ、また、月岡芳年(一八三九―一八九二)の浮世絵「月百姿千代能」などでも知られる。

231 ↓ 解題1頁参照。児島三郎が井深に贈った漢詩については、『そぞろ言』二八〇頁に「〔昭和九年〕三月五日―江村氏に答ふ」として、ほぼ同様のものが見える。

²³² 若盛やよいつ方へ往きにけん知らぬ翁を後に残して

ト云フ句モアリ、如何ニ昔日紅顔の美少年ガ知ラヌ間白髪ノ翁ト成果テモ、ソノ人ノ「我」ト云フ者ハ同一デアルト申サネバルマイ

〔井深日記〕昭和九年五月二二日

正午、東京YMCAニ於テ大儀見氏九十才祝賀会ヲ開ク、〔中略〕大儀見氏挨拶ヲ為ス、氏ノ歌ニ曰ク

²³³ 身のふみし跡を尋ねて来ませよとまつむしのなく大森の里

大儀見氏ハ耳ハ聾シタレトモ氣ハ慥カニテ思想混同ノ形跡ハ少シモ認メズ、其歌ニ因リテモ之ヲ知ルベシ

『書簡集』二七八頁

〔昭和一五年八月二二日付井深花宛児島三郎書簡 井深湧泉翁の雅懐〕のうち

○昭和九年六月廿九日病床の吟

^{*234} もろ人よ心静めて聞けよかしむさしの原になく虫の声

^{*235} 虫の声いつもかなしと思ひしに松虫のみはうれしかりけり

^{*236} 人はみな早くくとよふ中になれのわれみ一人何を待つらん

〔井深日記〕昭和九年九月六日

木村良夫妻及ビ真野文二氏へ手紙ヲ出ス、愚詠一首アリ、

²³² 「わがさかりやよいつかたへゆきにけむしらぬおきなにみをばゆづりて」〔住吉社歌合嘉応二年〕一三番歌・作者「藤原清輔」のことか。

²³⁴ 歌の頭に朱で合点と丸印あり。

²³⁵ 歌の頭に朱で合点と「、」あり。

²³⁶ 歌の頭に朱で合点あり。

*237 コマ牛の足の歩みハおそくともやめずば嶺も極めざらすマば

『書簡集』二七九頁

〔昭和一五年八月二日付井深花宛児島三郎書簡 井深湧泉翁の雅懐〕のうち

○昭和九年九月八日翁病ひ癒え逗子壺中庵に入る

*238 こま牛の足のあゆみはおそくともつひには(傍線・傍記本)やまずば嶺をきはめざらめや

昭和一〇年（一九三五）

〔井深日記〕昭和一〇年一月冒頭

*239 八十一年又加一 老齡幸逢更生之春 湧泉

〔井深日記〕昭和一〇年一月二日

原胤昭氏依頼ノ絹地式枚ニ揮毫ス、其一ハ

*240 八十の手習せんと試筆かな

其二ハ、七十路会の前途を祝す

*241 七十路とよびしも今は一昔いざや進んもろともに八十路はおろか百とせまでも

238 歌の頭に朱で合点・丸印・「」あり。

240 この「八十の」の句と次の「七十路と」の歌は児島三郎も見えており、『書簡集』二三八頁、児島の井深宛はがき（昭和一〇年一月七日付）には、次のように見える。「玉吟拝誦八十の試筆といふ御感詠すらくとして且力強さの誇りさえ味ハれ近來之御雅懐と存じます 又七十路会への御奨励も佳作満点／還暦のあと振りかへる四度かな／では句にならず、今後五年を経て初めて古稀の句でも考へることに致しませう」。

『書簡集』二七九頁

「昭和一五年八月二一日付井深花宛児島三郎書簡 井深湧泉翁の雅懐」のうち

○昭和十年一月二日

*²⁴² 奇しきかな神の恵そのはかりなき死しも起すもそのみわがわがゆぐみは取清練・傍記朱

こゝろは

『そぞろ言』昭和一〇年一月二日

井深翁よりお歌給はりければ

*²⁴³ 奇しきかな神の恵みのはかりなや死マツししをも起すそのみ恵は

〔井深日記〕昭和一〇年一月九日

児島三郎、真野文二両氏へ左の狂詩ヲ送ル、人言ニ

*²⁴⁴ 「去年盛暑病魔ノ襲フ所トナル 再起期シ難シト

何ゾ知ラン 去夏半死人 今春健康人タラントハ 自驚

天父固ヨリ 全能 聖靈一動スレバ則チ百魔遁逃ス」

〔井深日記〕昭和一〇年二月二二日

児島楚竹氏ヨリ雪下ノ竹の図ヲ画きて贈り来リタレバ之ニ題シテ一句を返す

*²⁴⁵ 雪に伏し風にまかする身なれどもたゆまぬ節のありとこそしれ

242 歌の頭に朱で合点と「、」あり。

243 この後に児島三郎の返歌として「白かねも黄金も君に望みなし神の恵のみちたれる身は」とあり〔そぞろ言〕。

245 参考「なよ竹の風にまかする身ながらも撓まぬ節はありとこそ知れ」(309番歌)。『書簡集』二三八頁、一九三五(昭和一〇)年二月六日付井深宛児島三郎はがきに、「此度は返歌に代へて竹の雪を描き候ところ画にならず笑止ニて候」とある。

又、病後の立春ト題シテ、

*²⁴⁶春立ちて気もはれくと天気かな残んのゆきはその俣にして

指²⁴⁸集
参考「寒過ハルハキヌラシ 暖来良思アサヒ 朝鳥アサヒ
滓鹿能山尔カスガノヤマニ 霞軽引カスミケリ「万葉集」一八四四番歌・読人不知。

〔井深日記〕昭和一〇年二月二日

午前九時過、花子同伴下落合三丁目原胤昭氏方ニ赴ク、同氏ガ特ニ催シタル七十路会ニ出席セン為ナリ、出席者ハ我等夫妻ノ他ニハ和田秀豊、貴山幸次(マツ)二氏耳ナリキ、山本秀煌氏ハ差障アリ欠席、自分ハ七十路会ヘ記念ノ為メ書画帖巻冊ヲ寄附シタリ、而シテ直チニ之ヲ同会記念帖トシテ各自揮毫シタリ、原氏ハ単ニ励ノ一字ヲ書シ、和田氏ハ聖恩ト題シテ一首ノ和歌ヲ書シ、自分モ亦左ノ一首ヲ書シタリ、

*²⁴⁷一輪の桜の花にも知られけり天地しらす神のみめぐみ

同日原氏ノ好意ニヨリ心尽ノ料理ノ昼食ヲ共ニシテ後二時過散会、三時過帰宅セリ

〔井深日記〕昭和一〇年三月二日

昨夜来雪降り、今朝ハ銀世界ヲ呈シ再ビ冬来ノ感アリ、

*²⁴⁸冬過て春きにけりとおもひきや六花とび散る白金の里

『書簡集』二七九頁

〔昭和一五年八月二日付井深花宛児島三郎書簡 井深湧泉翁の雅懐〕のうち

○昭和十年三月廿三日

*249 冬すぎて春来にけりと思ひきや六花とびちる白金の里
 *250 金沢の瀬戸のわたりは今いかに海辺の雪やきよけかるらむ

『そぞろ言』昭和一〇年三月三日

井深湧泉翁より

*251 冬すぎて夏来(つむ)にけりと思ひきや六花飛び散る白金の里
 *252 金沢の瀬戸の渡りは今いかに海辺の雪やきよけかるらむ

『書簡集』二七九頁

昭和一五年八月二日付井深花宛児島三郎書簡、井深湧泉翁の雅懐」のうち

○昭和一〇年三月廿七日

*253 柴の戸をおとなふ人も稀なるに春を忘れぬ庭のうぐひす
 *254 わがために明けをつぐるか鶯の声きくときぞうれしかりける

『そぞろ言』昭和一〇年三月二七日

湧泉老より

*255 柴の戸を訪ふ人も稀なるに春を忘れぬ庭のうぐひす
 *256 わがために明けをつぐるか鶯の声きくときぞうれしかりける

249 ↓248参照。歌の頭に朱で合点と「」あり。

250 歌の頭に朱で合点と「」あり。

251 ↓248参照。

252 『そぞろ言』にはこの後、児島三郎の返歌として「麗かに光りをうけて淡雪の消ゆるがま、に竹のをの、く」とある。また『書簡集』二三九頁「井深宛児島三郎はがき(昭和一〇年三月二三日付)には、児島の返歌「だまされて蒼はつかし春のゆき」が見える。

253 歌の頭に朱で合点と「」あり。
 254 歌の頭に朱で合点と「、」あり。

255 『そぞろ言』にはこの後、児島三郎の返歌として「人しげき都ながらに物さびて鳥きたりなく白金の里」「朝ぼらけ君は鶯われはまた弦音き、つ、楽しむぞおかし」とある。

257 『書簡集』二四五頁、井深宛児島三郎はがき(昭和一〇年六月一三日付)に「只今俳句拝見最早堂に入りたるものにて候 毎度御無心恐入候へ共ヨルダンの句とナザレ道の句各短冊に御揮毫例の建

『そぞろ言』昭和一〇年六月一三日

井深湧泉翁より遙かに聖地の初夏を偲ぶと前書して、

*257 さみだれやヨルダンの流れ水清し

*258 白ゆりのかほりかんばしナザレ道

右の返句あれど古稀選集に出づ。

〔井深日記〕昭和一〇年六月一八日

児島三郎氏ノ要求ニ依リ鎌倉教会バザーノ為メ短ザクニ俳句二首ヲ書テ贈ル、曰ク

*259 五月雨やヨルダンの流れ水きよし

*260 しらゆりの匂かんばしナザレ道

〔井深日記〕昭和一〇年八月一三日

逗子海岸ハ最早単ニ海水浴場ニ非ズ、半バ以上娯楽場化セリ、長尾半平氏夫妻来訪、近々教文館ヨリ発行ノ筈ノ植村正久伝ニ序文ヲ書クコトヲ委嘱アリ、考慮スベキ旨ヲ返

答ス、又同氏ノ所望ニ依リ、余ガ

*261 白沙青山逗子浜 清風徐來心自閑

ト書シタル楽焼ノ小壺ヲ贈ル

築費へ寄付被成下間敷哉御願申上候 井深湧泉と御記名遊れ度候」とある。
↓257参照。

『書簡集』二七九頁

〔昭和一五年八月二一日付井深花宛児島三郎書簡 井深湧泉翁の雅懐〕のうち

〔昭和〇〇〕
○同年十月十四日

*²⁶² 孫達のつどひめでたしまごたちの〔そのは朱補入〕そのほゝえみやその笑ひこゑ

『そぞろ言』昭和一〇年一〇月一四日

井深翁より、

*²⁶³ 孫達のつどひめでたしまごたちのほゝえみやその笑ひ声かな

『そぞろ言』昭和一〇年一〇月一五日

新京より増雄成人の報あり、よつて井深翁と交歓す。

「豆拾ふほどに育ちし小鳩哉 楚竹

*²⁶⁴ 親に増りてたかく飛ぶらん 湧泉

『書簡集』二七九頁

〔昭和一五年八月二一日付井深花宛児島三郎書簡 井深湧泉翁の雅懐〕のうち

〔昭和〇〇〕
○同年十一月十八日

*²⁶⁵ 霜月の小春日とおもひきやけふは真夏のあつさなりけり

262 歌の頭に朱で合点と「ゝ」あり。
264 『書簡集』二四九頁、「井深宛児島三郎はがき（昭和一〇年一〇月一八日付）」に「小鳩の附句、当意即妙近來之傑作と存上候 殊に増の字は能く利きて嬉し」とある。
265 歌の頭に朱で合点と「ゝ」あり。

〔井深日記〕昭和一〇年二月六日

横山かめのサンへ約束ノ明治天皇御製

²⁶⁶ いつはらぬ神のこゝろをうつせみの世の人みなにうつしてしかな

の歌ヲ揮毫ス

昭和一一年（一九三六）

〔井深日記〕昭和一一年一月冒頭

^{*267} 八十二年又加一 衰老幸値更生春

^{*268} 初日影仰くぞうれしけさの春

〔井深日記〕昭和一一年一月一日

実ニ珍シキ上天気ナリ、東天慶雲タナビキ元旦ニ申分ナキ上天気ナリ、

^{*269} 東雲や昔なからの雲柱

早朝ヨリ木村肇、重健、健明、貞雄等年賀ニ来ル、正彦ハ年賀廻礼ノ為メ外出、今日ハ肇ノ誕生日ノ由ニテ揮毫ヲ需メタリ、依テ短冊ニ右ノ一句ヲ書シテ与フ、

〔井深日記〕昭和一一年一月二三日

午後明治学院ニ行キ、ドクトル（オルトマンズ）オルトマス夫婦及ビ（ハナフオールド）ハナツホールド氏、鷺山氏に面会ス、鷺山氏ハ自分ト共ニ宅ニ来リ、暫時談話ノ後辞去ス、話題ハ主トシテ芭蕉俳句ノ特

²⁶⁶ 『明治天皇御集』（宮内省、一九二二年）所収。一九一一（明治四四）年の詠草。詞書「神祇」。

長ニ関シタリ、今日モ亦二階ノ縁側ヨリ眺メタル夕焼ハ実ニ立派デ神々シキ者アリキ、
依テ

*270 夕焼や昔なからの火の柱

〔井深日記〕昭和十一年一月二十七日

雪後トシテハ存外ノ温暖ナリ、実ニ

*271 冬枯れの空に小春の恵みかな

『そぞろ言』昭和十一年二月六日

井深湧泉翁より歌あり、句にて返す。

*272 今朝よりは春と思へば何のそのシベリヤ嵐もの、数かは

シベリヤより雪の貢や君が春

『書簡集』二七九頁

〔昭和十五年八月二日付井深花宛児島三郎書簡 井深湧泉翁の雅懐〕のうち

○昭和十一年二月六日

*273 今朝よりは春と思へば何のそのシベリヤ嵐ものの数かは

273 歌の頭に朱で合点あり。

『書簡集』二七九頁

「昭和一五年八月二一日付井深花宛児島三郎書簡 井深湧泉翁の雅懐」のうち

（昭和一二）
○同年二月七日

*²⁷⁴ 降る雪にゆくべき宿のなかりせば来れ吾家のまらうどとせん

〔井深日記〕昭和一二年二月二〇日

午前九時、議院選挙、白金小学校へ行き候補者渡邊鍊蔵氏ニ投票シタリ、同氏ハ一面識
モナケレトモ学識人格共ニ相当ニシテ他ノ候補者ニ比シテ謙色（遜色）ナシト思ハル、

*²⁷⁵ 老が身も人には負けじと選挙かな

〔井深日記〕昭和一二年三月二七日

理髪店ニ行ク、其時ノ狂歌

*²⁷⁶ 刈る程にあるやなきやの毛ながらも刈らぬ訳にもゆかぬ髪かな

〔井深日記〕昭和一二年四月二二日

中村獅雄氏ヨリ復活祭ノ祝トシテ美観ナル藤樹ノ盆栽ヲ贈リ来ル、右ニ付

*²⁷⁷ 藤の花はたゞ紫とおもひしが香ひけだかき花にぞありける

の一首をよみて贈る

274 歌の頭に朱で合点あり。

275 当該歌は、井深が大川正に送った一九三六（昭和一一）年三月一九日付書簡にも含まれる（『明治学院時報』第九九号、一九四〇年一〇月二〇日発行）。第二句「人にまけじと」。

〔井深日記〕昭和十一年六月六日

午前五時三十分戸隠山上ヨリ鶯及郭公等の鳴声ヲ聴キケレバ読ム

*²⁷⁸市隠朝まだき戸隠山の頂になく鶯の声をきくかな

是れもラヂオの御蔭なりけり

〔井深日記〕昭和十一年六月七日

寄宿舎ノ小使丸橋ニ左ノ一句ヲ書シテ与ヘシニ大ニ喜ビタリ、彼ハ常ニ鶯ヲ飼テ楽メリ、

白金の初夏

*²⁷⁹目に青葉耳にうくひす手に団扇

〔井深日記〕昭和十一年六月八日

真野氏ヨリ白金初夏の拙句に対する反句ニ

²⁸⁰夏山になく鶯の声きけば昔の春のしのはるゝかな

²⁸¹池に蓮鉢ニハ金魚庭ニ犬代々木の森ハ雀むれゐる

トアリ、

『書簡集』二七九頁、昭和十一年六月九日

〔昭和十五年八月二日付井深花宛児島三郎書簡 井深湧泉翁の雅懐〕のうち

○^(昭和十)同年六月九日 放送をきけりとして

278 戸隠山(とがくしやま)は、

長野県長野市にある山。一九三三年から、NK長野放送局によって、この戸隠山の野鳥の声がラジオで放送され(深山の朝の風景その儘・放送 戸隠山中へマイクを据ゑ 珍案・ラヂオ登山)(『信濃毎日新聞』一九三三年六月五日付)、一九三五年からは全国へも

早朝に中継されるようになった(深山の霊鳥を電波で聴く)『読売新聞』一九三五年五月二十九日)。

279 参考「目には青葉山ほととぎす初鰹」(『素堂家集』、享保六年自序)。当該歌は真野文二にも贈っており、『蜂聲集』四四頁に見える。「井深梶之助より」目に青葉耳に鶯手に団扇」代代木の森はいかがといひおこせければ、「池に蓮鉢には金魚庭に犬代々木の森はずめむれゐる」。

281 『蜂声集』四四頁所収。

*282 朝まだき戸隠山の頂いただきに鳴くうぐひすの声をきくかな

〔井深日記〕昭和二年八月一九日

午前八時過、英男君辞去、帰京ノ途ニ就ク、好個ノ青年也、夕刻ヨリ海岸ニ於テ再ビ花火大会アリ、内ヨリ能ク之ヲ見タリ、夜ニ入り俄カニ涼サヲ感ジタリ、愈残暑ト成リタルナリ、左ノ二首ヲ贈ル、逗子浜ニテ拾ヒタル真砂ト貝カラニ添ヘテ

*283 幾千とせ逗子の浜辺に打寄せし涛にみがける真砂なりけり

*284 その昔世の宝とてめでられし海の宝の形見なるらん

〔井深日記〕昭和二年八月二五日

○今ヨリ五年後ノ祝賀ヲ予想シテ読メル

*285 八木の字と毘の字重ねて祝ひかな凡ては神の御みめぐみにして

〔井深日記〕昭和二年八月二六日

和田仙太郎へ贈ルベキ当茅屋ノ実景

*286 修竹円屋海光入窓

ノ八字ヲ揮毫ス

〔井深日記〕昭和二年九月二〇日

午後真野咲子入来、緩談ノ後辞去、序ヲ以テ余ガ逗子海岸ニテ拾集メタル真砂ト貝殻ト

282 ↓278参照。歌の頭に朱で合点と「ミ」あり。

ヲ分贈ス、左ノ狂歌二首ヲ添ヘテ

- *287 ○幾千年逗子の浜辺に打よせし濤にみがきし真砂なるらん
*288 ○そのむかし世の宝とてめでられし海の宝の形見なるらむ

井深梶之助和歌「幾千とせ」(D3202200018) 額装 昭和十一年盛夏

「逗子浜の真砂子に題す」

- *289 幾千とせ逗子の浜辺に打寄せし濤にみかきし真砂子なるかな
昭和十一年盛夏 湧泉老人

〔井深日記〕昭和十一年一〇月一四日

上天気トナル、

- *290 秋雨ハ隈なく晴れて今朝の小春かな

〔井深日記〕昭和十一年一月三日

- *291 今日こそは昔ながらの小春かな明治佳節の名もありかたく

午前明治学院創立記念式挙行セラル、ホキエ院長ノ要望ニ依リ一場ノ演説ヲ為セリ

昭和十二年（一九三七）

〔井深日記〕昭和十二年一月二五日

児島氏へ左ノ狂歌ヲ贈ル

*²⁹² ○正月もはや半分は過ぎにけりいざや待たなん連子桜さく日を

〔井深日記〕昭和十二年三月九日

早朝より小雪降ル、時シモ一羽ノ鶯庭前ノ梢ニ来リ囀ヘヅルアリ、

*²⁹³ 花ならで雪にさえづる鶯の声の一入うるはしきかな

〔井深日記〕昭和十二年四月一八日

庭前研究所内ノ八重桜方々爛漫ナリ、

*²⁹⁴ 古への奈良の都にあらねども朝日に匂ふ八重桜かな

〔井深日記〕昭和十二年六月一〇日

午前五時半ラデオニテ北海道野幌〔原〕元始林ヨリ中継ニテ鶯ノ啼声ヲ聴ク

*²⁹⁵ 朝まだきゑぞが島根の樹立より鳴く鶯を聴く世なり〔るかな〕けり

294 参考「いにしへのならのみや
こにあらねども我が身ふるればと
ふ人もなし」〔隣女集（雅有）〕一
五九三番歌・詞書「都」、「いに
しへのならの宮このやへざくらけ
ふこのへにほひぬるかな」
〔金葉集三奏本〕五八番歌・作者
「伊勢大輔」、および「百人一首」
六一番歌。

『書簡集』二八〇頁、昭和十二年一月二日

「昭和十五年八月二日付井深花宛児島三郎書簡、井深湧泉翁の雅懐」のうち

○昭和十二年十一月十一日

*²⁹⁶めづらしく今日は小春の日和かな菊の色香もいやまさりつゝ、

『書簡集』二八〇頁、昭和十二年二月三日

「昭和十五年八月二日付井深花宛児島三郎書簡、井深湧泉翁の雅懐」のうち

○（昭和一二）同年十二月十三日 暴逆不信の政権は遂に倒れたりと前書して

*²⁹⁷バビロンの城は落ちたり古へも今日も（もは朱補入）変らぬ教なるかな

昭和十三年（一九三八）

〔井深日記〕昭和十三年の冒頭

元旦

*²⁹⁸八十四年又加一 拜^レ天歡迎八十五年ノ春

*²⁹⁹八とせあまり五とせの春を迎ふる（身）は世にもまれなる幸とこそしれ 湧泉

『書簡集』二七〇頁、昭和十三年三月六日

「児島三郎宛井深梶之助はがき」所載

296 歌の頭に朱で合点と「、」あり。
297 歌の頭に朱で合点と「、」あり。「バビロンの城は落ちたり」は『旧約聖書』「エレミヤ書」五一章に拠る。中華民国政府の首都南京が陥落したことをバビロンの滅亡になぞらえて詠じた。

*300 日曜と地久節にて二重奏シベリア寒波も跡を収めて 湧泉

『書簡集』二七〇頁、昭和一三年三月七日

「児島三郎宛井深梶之助はがき」所載

狂歌一首

*301 御多数に洩れずおのれも風邪かなシベリヤ寒波よはやくされく 湧泉

『書簡集』二七〇頁、昭和一三年三月一〇日

「児島三郎宛井深梶之助はがき」所載

*302 冬すきて春来にけりと思ひしに又もきたれる銀世界かな 湧泉

『書簡集』二七二頁、昭和一三年三月二六日

「児島三郎宛井深梶之助はがき」所載

*303 南欧風雲将欲急 唯願莫為世界戦因

御機嫌如何

〔井深日記〕昭和一三年三月二七日

早朝ラヂオニテ笠城山ヨリ春ノ小鳥ノ啼声聴取シタリ、

*304 ○朝まだき小鳥啼合ふかさぎ山（仁徳天皇御陵所在地）

302 参考「寒過 暖来良思 朝鳥 指 滓鹿能山尔 霞軽引」（『万葉集』一八四四番歌・読人不知）、「われひとりむすぶいほりと思ひしに又もすみけりやまの井の水」（『雅有集』七二八番歌・詞書「山家水」）。

304 井深は日記中で「かさぎ山」を「笠城山」と書き、歌の中では「仁徳天皇御陵所在地」と注記するが、仁徳天皇陵は大府堺市に所在しており、「笠城山」ではない。後醍醐天皇碑の建つ京都府の「笠置山」のことか。

これもラヂオノいさをしにして

『書簡集』二七二頁、昭和一三年四月二一日

「児島三郎宛井深梶之助はがき」所載

*³⁰⁵ きのふけふいかなる寒波のたゝりにや

彼岸過ぎての冬支度、御自愛く

『書簡集』二七二頁、昭和一三年四月二三日

「児島三郎宛井深梶之助はがき」所載

*³⁰⁶ 「何事ぞ花見る人の」冬仕度時は四月の只中にして

(あれも非常時、これも非常時)

随分時下御自愛肝要と奉存候

『書簡集』二七二頁、昭和一三年四月二六日

「児島三郎宛井深梶之助はがき」所載

*³⁰⁷ 春風春雨能開花 春雨春風又散花とかや

庭前之落花今飛で如雪

306 参考「何事ぞ花見る人の長刀」(去来発句集「阿羅野」所収)。

『書簡集』二七三頁、昭和一三年四月二七日

「児島三郎宛井深梶之助はがき」所載

*³⁰⁸散際のすこし見苦し八重桜桜ハやはり吉野なりけり 湧泉

作成年未詳・その他

〔井深梶之助回顧録〕(ID1201610147)

八月廿三日朝敵軍の城下に攻入つた時、予而覚悟を極めて居た事とて頼母殿の母律子(中風にて臥床、身体の自由を失ひ居たり)を始め妻千重子(三十四才)、妹みす子(廿六才)、同いふ子(廿三才)、長女たへ子(十六才)、次女たき子(十三才)、三女たづ子(九才)、四女とは子(四才)、末子源吾(二才)、枕を並べて自尽した、その悲惨の状態は想像に余りある、其時千重子の辞世として伝へられた歌がある

³⁰⁹なよ竹の風にまかする身ながらも撓まぬ節はありとこそ知れ

その壮烈の気象は此の一句にも能く表はれてゐる

〔説教講話集〕(ID1201610173) 於麴町教会ほか

〔馬可伝第十二章第三十四節〕のうち

第三、神ノ国ニ近キ者ハ其中ニ入ルヲ勉ムベキ理由、天国ヲ離ル、コト遠クシテ兎テモ之ニ達シトテ失望スル者アレバ之ヲ離ル、コト遠カラザルガ故ニ既ニ其中ニ入タリト思テ安心スル者アリ、世間ニハ唯物事ヲ正直ニサヘスレバ其ニテ事足レリト思ヒ救ノ道ニハ更ニ及ザル者往々有之、

³¹⁰ 心だに真の道にかなひなば祈らぬとても神や守らん

トハ其之ヲ謂フナルベシ

『蜂聲集』六頁

井深梶之助大人より

*³¹¹ 鶯もなかなりけり時ならぬ雪やみぞれになやまされつつ

代代木の森は如何にといひおこせければ

鶯の聲はきこえてふりつもる雪にも春はうもれざりけり

『書簡集』二八〇頁

〔昭和一五年八月二六日付井深花子宛真野文二書簡〕所載

〔上部アラビア数字および傍記の○は朱書〕

〔欄外〕いづれ御目ニ掛り御話を申上ます 文二

1 *³¹² 主召さはいつにても行かんと思ふ身のなとて心のかくもみたる、

2 削「後二同じ意味之ものあれば」〔この一行朱書〕

3

4 *³¹³ 小夜ふけてひとりふすまにいのるとき父の御はしのうるはしき哉

5

6 *³¹⁴ ぬは玉のあやめもわかぬ暗のうちにひとりさやけし十字架のかけ

7 *³¹⁵ なからへてなすへき事のあれはこそ八十路までもと願ふなりけれ

310
↓43参照。

8

*316 七十路の齡かさねて子等の為め長き命をなほいのるかな

9

*317 むは玉のやみのうちにもあさやかに見ゆるはイエスの御顔なりけり

10

*318 起きてみよ汝の針はいつこそとさけひし人のこゝろまなはむ

11

*319 主の召ゆるしたまは、道の為め八十路はおるか百とせまでも。

12

13

14

15

16

17

18

19

20

*320 夢ならしうつゝなりけり大神のみむねかしこみいそしめる身は

*321 かぎりなき命のみちに入りしよりはや五十年を歩み来にけり

昭和十五年八月二十六日

保科近恵和歌「としをへて」軸装 (「伊藤氏寄贈資料集」のうち、ID3202070013)

三十三年の春はかり若松へ帰る道にて 八握髯翁

³²² としをへてかへる雁か音今更にふるさと人は如何に聞らむ

保科近恵和歌「八束ひく」 軸装 (「伊藤氏寄贈資料集」のうち、ID3202070017)

³²³ 八束ひくかい撫なからはまちとりふみみる外になす業もなし 近恵

井深宅右衛門和歌「きてみれは」 軸装 (「伊藤氏寄贈資料集」のうち、ID3202070022)

戦争の後旧宅のさまを見つゝよめる

³²⁴ きてみれは焼のと成し庭の中ニのこるは松のひと木也けり 重義

³²⁴ 重義は、井深の父宅右衛門 (一八三〇—一八九七) のこと。
〔井深日記 昭和八年一月四日条 によると、井深は、当該歌を「旧若松城下ノ記念品」として、西郷頼母(保科近恵)の和歌とともに、返子の経師屋堀田愛古堂へ掛軸にするよう依頼している。〕

資料編2 「聖書俳句集」二種

I. 〔聖書俳句集〕(ID1201610469)

昭和十一年二月廿六日より聖書之史実若クハ記事ヲ背景トシテ取入レタル俳句ノ真似

○天地創造、元旦

創世記第一章一節に曰く、元始に神天地を造り給へり、

*³²⁵ 天地の始めを偲ぶ初日影 湧泉

同第三節に曰く、神光あれと言給ひければ光ありき、

*³²⁶ 光あれと仰せたまへば光あり 湧泉

○元旦 慶雲

*³²⁷ 東雲しのめや昔ながらの雲ばしら 湧泉

〔ネヘミヤ〕
ネヘミア記九ノ十二に曰く、又昼は雲の柱をもて彼らを導き、夜は火の柱をもて其往く道を照し給ひき

*³²⁸ 夕焼や昔ながらの火の柱 湧泉

創世記三の六ニ曰く、婦樹を見れば食ふに善く目に麗はしくかしこからん為に慕はしき樹なるに依りて遂に其果実を取りて食ひ云々

○禁止の果実

*329 禁制の果実食たや人の子よ

創世記三の九に曰く、エホバ神アダムを呼びて之に言給ふ、汝は我が汝に食ふ勿れと命じたる樹の果を食ひたりしや、アダム言けるは汝が与へて我と偕ならしめたまひし婦彼その樹の果実を我に与へたれば我食へりと、

*330 今もなほ人を責むるやアダムの子 湧泉

創世記三の十五に曰く、エホバ神言給ふ、又我汝と婦の間及び汝の裔と婦の裔の間に怨恨を置かん

*331 いつまでも蛇は女の仇かな 湧泉

創世記三の廿三に曰く、エホバ神彼をエデンの園より出し其取りて造られたる所の土を耕さしめ給へり

*332 〇パラダイス追出されし祖先かな

創世記十八の三に曰く、身を地にかゝめて言けるは我が主よ我若し汝の目の前に恩を得たらば請ふ僕を通過すなかれ云々、

ヘブライ書十三の二に曰く、或人之により知らずして御使を舎したり、

*333 〇知らずして天使もてなすアブラハム

創世記十九の十六に曰く、ロトの妻は後を顧へりみれば塩の柱となりぬ、
戒めの塩の柱

*334 ○末世まで恥さらしけりロトが妻 湧泉

創世記廿七の一乃至四六、
イサク老いて目くもりて見る能はざるに及びてその長子エソウを呼び云々、

*335 ○年寄りて耄碌したるイサクかな 湧泉

創世記廿七の六乃至廿三、

*336 ○依怙ひいきおつと鼻胤夫あざむくりベカかな 湧泉

創世記三十二の六乃至十一、
是によりヤコブ大に恐れ且苦み云々

*337 ○偽りの報か恐るやヤコブなかな 湧泉

○信仰

ヘブル書十一の一に曰く、夫れ信仰は望む所を確信し見ぬ者を真実とする也

*338 ○信仰は望む所を疑はず

*339 ○信仰は見ざる所を真とす

*340 ○信仰によりて義となるアブラハム 湧泉

ヘブル書十一の廿三に曰く、信仰に由て両親はモーセの生れたる時……王の命を畏れず
三月の間之を匿したり、

*341 ○信仰に由りて救はるモーセかな 湧泉

同十一の四に曰く、信仰に由りてアベルは：死ぬれども今尚語る、

*342 ○信仰に由りて今尚物かたる

同十一の七、信仰に由りてノアは方舟を造り云々

*343 ○信仰に由りて出来たるノアの方舟 湧泉

(以上十一年三月十五日迄)

*344 ○信仰に由りて海路も陸地もかななる〔其語〕 湧泉

註、ヘブル書十一の廿八に曰く、信仰に由りてイスラエル人は紅海を乾ける地の如く渡りしがエジプト人は然せんと試みて溺れ死にたり、

II. 聖書俳句集 (ID1201610120)

聖書俳句集

一 旧約書之部、

元旦：天地創造

*345 ○天地あめつちの始めを偲ぶ初日影 湧泉

註、創世記一章一節に曰く、元始に神天地を造り給へり、

光の始

*346 ○光あれと仰せ給へば光あり 湧泉

註、創世記一章三節に曰く、神光あれと言給ひければ光ありき

元旦、慶雲

*347 ○東雲や昔ながらの雲柱。 湧泉

*348 ○夕焼や昔なからの火の柱。 湧泉

註、ネヘメヤ〔ネヘミヤ〕記九の十二節に曰く、昼は雲の柱をもて彼等を導き夜は火の柱をもて其行く道を照し給ひき、

禁制の果実

*349 ○禁制の果実食ひたや人の子や 湧泉

創世記三の六に曰く、婦樹を見れば食ふに善く目に麗しく賢かしからん為に慕はしき樹なる由〔マツ〕よりて遂にその果実を取りて食ひ、亦之を己と偕かしなる夫に与へければ彼食り

責を人に転嫁す

*350 ○今もなほ人を責むるかアダムの子 湧泉

註、創世記三の九に曰く、神アダムを呼びて之に言給ふ、汝は我が汝に食ふ勿れと命じたる樹の果を食ひたりしや、アダム言けるは汝が与へて我と偕かしならしめ給ひし婦彼その

樹の果実を我に与へたれば我食へりと、

蛇は永久女の仇かたき

*351 ○いつまでも蛇は女の蛇仇かな 湧泉

*352 ○エバの子か木の实欲しがる子供かな

*353 ○五月雨にや入梅(ママ)やノワの日暎ふ大雨なかな

資料編3 「明治二十三年渡米日記」のあとに記された古歌

月催懐旧 千蔭

³⁵⁴ 秋のよの月をみつゝも其名のみさやにのこる人をしそおもふ

対月懐旧 〃

³⁵⁵ おもかけをあふきてしのひふることをふしてハ思ふ袖の月哉

月前懐旧 宣長

³⁵⁶ めくりこし月にとは、やこそそのけふ雲かくれにし人のゆくへを

寄月懐旧 蒿溪

³⁵⁷ 月かけのさしいるかとのなこりさへあらすなりぬる秋そかなしき

宣長

³⁵⁸ 夜半の月過にし人は影も見す涙あやなき袖のうへ哉

寄風懐旧 宣長

³⁵⁹ きえにける露のむかしのよかたりも身にしむ風の秋の夕くれ

寄時雨懐旧 千蔭

³⁵⁴ 『うけらが花初編』一三六九番歌・詞書「荷田在満が五十年の忌に、月催旧情といふ事を」という詞書で所収。第四句「さやかにのこる」。

³⁵⁵ 『うけらが花初編』一三六八番歌・詞書「父君うせ給ひて十あまり三年に成りぬる八月十三日、人人をつどへて、月の前にむかしをしのぶといふ題にて歌よみて手向け奉るによめる」。

³⁵⁶ 『鈴屋集』一五〇二番歌・詞書「人の一周忌に、月を題にて」。

³⁵⁸ 『鈴屋集』一五〇三番歌・詞書「人の一周忌に、月を題にて」。

360 もみちはの過にしこそそのけふをしもしのへハ袖にしくれふる也

寄露懐旧 宣長

361 しのへとてのこしもおかぬ我袖にきえしかたみの露そこほる、

春懐旧 たみ子

362 松の葉の若葉さしそふはることにうえてし人の昔をそおもふ

花下懐旧 千蔭

363 年ふれとあせぬその香をかたみにて散にし花をこふる比哉

対花懐旧 同

364 いにし年はな散しより桜木のもとの心をしる人そなき

寄郭公懐旧 たみ子

365 思ひいて、なかむる空に郭公なくもかなしき去年のふる声

千蔭

366 ほと、きすなきこそわたれこそその夏ともなき、つる人ハなきよに

寄蟬懐旧 同

367 しのふれハ世をうつせみのなく声も昔に、たる夏にやはあらぬ

364 『うけらが花初編』二二六三・詞書「たみ子が十三回に、花のもとにむかしをしのぶといふ事を縫子がよませけるに」、第四句「もとの心を」

寄枕懐旧 同

368 敷妙のふるき枕にとありけんかくありけんといふかはかなさ

逐日懐旧 契沖

369 きのふさへけふにうつりてしのはれぬいつを昔のかきりとかみん

夢談故人 宣長

370 とひかはす詞の末もなき人を見しやしはしの手枕の夢

往時如夢 枝直

371 わすれえぬおもかけのミハマさしくて現ともなく過し一とせ

哀傷 千蔭

372 かたらひしきのふやうつ、けふやゆめおもひさためぬ世にもある哉

秋哀傷 蘆庵

373 ともにみし人もやとりもなきあとにひとりそすめる秋のよの月

古道

374 からころもたちぬふ人もあらなくに秋はよさむになりまさりけり

寄花無常 たみ子

370 『鈴屋集』一三五六番歌・詞書「夢談古人」。

372 『うけらが花初編』一三八六番歌・詞書「嘯月がにはかにやみて六月の十七日にみまかりければ」。

373 『六帖詠草』一六三五番歌・詞書「松齋が身まかりしを悼みて月を題にて」。

374 『小野古道家集』（佐佐木信綱編、日本歌学全書・続第八編、博文館、一八九九年）には、詞書「夜をふかして」として所収。佐佐木信綱著『和歌世々のあと』（一九〇八年、博文館）五八頁にも当該歌を古道の和歌として掲載するが、『賀茂翁家集』二九一番歌には、真淵の和歌として所収されている。

375 なき人の心と、めしことのはの花をみるにもしのふはるかな

難忘恋 枝直

376 おもかけの月にかけるひ花にそひ夢にうつゝにわすれやハする

千蔭

377 わすれんとしひておもはしわすられぬ思のみこそかたみなりけれ

377 『うけらが花初編』一〇三三
番歌・詞書「難忘恋」。

主要参考文献一覧

- ・『歌ことば歌枕大辞典』 久保田淳・馬場あき子編、角川書店、一九九九年
- ・『和歌文学大辞典』 『和歌文学大辞典』 編集委員会編、古典ライブラリー、二〇一四年
- ・『俳文学大辞典』 尾形仍ほか編、角川書店、一九九五年
- ・『日本キリスト教歴史人名事典』 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、教文館、二〇二〇年
- ・『井深梶之助とその時代』 第一巻―三巻、井深梶之助とその時代刊行委員会編、明治学院、一九六九―一九七一年
- ・『井深梶之助宛書簡集』 秋山繁雄編、明治学院刊、新教出版社（発売）、一九九七年
- ・『明治学院歴史資料館資料集 第1集―井深梶之助生誕一五〇年記念号』 明治学院歴史資料館、二〇〇四年
- ・『井深梶之助伝 明治学院を興した会津の少年武士』 星亮一著、平凡社、二〇一三年
- ・『会津藩士の慟哭を超えて 未来を教育に託す』 荒川紘著、海鳴社、二〇一五年
- ・『基督教短歌鑑賞』 松本宗吉著、教文館、一九四二年
- ・『奥野昌綱先生略伝並歌集』 黒田惟信著、一粒社、一九三六年
- ・『真野博士長寿祝賀会事業報告』 真野博士長寿祝賀会事務所、一九四一年
- ・『松山高吉史料選集 第三巻』 松山高吉史料選集編集委員会編、か
- んよう出版、二〇二二年
- ・『図録 上杉鷹山の財政改革と国と民のしあわせと特別展』 米沢市上杉博物館、二〇一二年
- ・『明治天皇御集』 宮内省、一九二二年
- ・『明治天皇御製集 昭憲皇太后御歌集』 現代短歌全集別巻、佐佐木信綱編、改造社、一九二九年
- ・『よむ』 ことの近代 和歌・短歌の政治学』 松澤俊二著、青弓社、二〇一四年
- ・兒山敬一「キリスト教短歌史論」 『日本精神史論纂』（城戸幡太郎編、岩波書店、一九三五年）所収
- ・桑田秀延「人物評論 井深梶之助」 『説教・評論・随筆 桑田秀延全集』 第七巻（桑田秀延全集刊行会編、キリスト教新聞社、一九七六年）所収
- ・園部不二夫「人物評論 井深梶之助」 『園部不二夫著作集』 第一巻（園部不二夫記念事業委員会編、キリスト新聞社、一九七九年）所収
- ・安森敏隆『新島襄の短歌―和歌的発想と短歌的発想―』 学校法人同志社新島基金運営委員会編、学校法人同志社、二〇〇〇年
- ・安森敏隆「新島襄「新島襄の短歌」『キリスト教文学を学ぶ人のために』（安森敏隆・吉海直人・杉野徹共編、世界思想社、二〇〇二年）所収
- ・小林幸夫「明治和歌とキリスト教『聖詠』の問題」 『上智大学国文学論集』 三七号（二〇〇四年一月）所収

- ・ 小林幸夫「新題和歌「洋教」と歌句集『聖詠』」『文学』九卷四号（二〇〇八年七月）所収
- ・ 小林修典「信仰を詠んだ人々―キリスト教短歌に関する文献の解説」『キリスト教文化研究所年報』No. 31（二〇〇九年三月）所収
- ・ 中澤伸弘「明治天皇の和歌に関して」『明治聖徳記念学会紀要』復刻第四九号（二〇一二年一月）所収
- ・ 前田繁則・小寺直樹・平野恭平「民俗文化・古武道の伝承活動における教歌の検討 宝蔵院流槍術の歌伝書を事例として」『近畿民俗』一八八号（二〇一二年三月）所収

か行			
かぎりなき	321	
かたらひし	372	32
かちてしむ	178	
かどまつは	9	
かなざわの	252	250
からころも	374	
かるいざわ	111	
かるほどに	276	
がんじつや	155	
きえにける	359	
ききてよし	131	
きてみれば	324	
きのふけふ	305	
きのふこそ	35	
きのふさへ	369	
きみかよの	56	
いくちよこめて	5	
ちとせをいはふ	349	329
きんせいひの	349	
くしきかな	242	
かみのめぐみそ	243	
かみのめぐみの	272	
けさよりは	273	

けふこそは	291	
ここまでも	112	
こころあてに	151	143
こころだに	310	43・57・61・88
〔こころなき〕	147	
こそこのけふ	33	
うきよをあとに	38	
ひちのさごろも	301	
ごたすうに	110	
このとげを	137	
このはちり	238	237
こまうしの	129	
さがみのうみ	129	
うなばらとほく	119	
かなたはるかに	130	
ふりさけみれば	207	
さくはなに	189	
ささきさへづる	21	16
さなきだに	30	
さのみやは	34	
いかでなげかん	34	
ものなおもひそ	34	

さまざまの	50	
なやみはひとの	37	
はなはあれども	259	257
さみだれや	313	
さよふけて	19	
さんぜんり	153	
しきしまの	46	
やまとごころを	368	144
ふるきまくらに	347	269
しなばいま	201	200
しののめや	201	197
しのふれは	361	4
しのへとて	255	253
しはとうし	169	
しばのとを	164	
しはまさに	265	
しづがきも	319	
しもつきの	134	
しゆのめし	312	
しゆめさは	93	
いまゆきなんと	292	
いつにてもゆかんと	312	
しょうがつも	333	
しらくもに	333	
しらずして	333	

しらゆりの	258
しんこうに	260
よりていまなほ	
よりてかいろも	342
よりてぎとなる	344
よりてすぐはる	340
よりてできたる	341
しんこうは	343
のぞむところを	338
みざるところを	339
すえつひに	29
すぎしよは	191
そでのうらに	120
そとなるは	105
そのむかし	284
288	
た	18
たこまなだ	
たちかへる	102
たまのゐの	179
ちかひてし	96
ちたびみて	145
ちづのうが	230
ちにつける	167

ちよろづと	227
ちりぎはの	308
ちりはちりに	168
ちるはなを	
みるにつけても	205
をしみしひとの	196
つきかけの	357
つきみれば	8
つききなん	94
つくさなん	223
つくさばや	219
つくしなん	219
つくづくと	7
つくられし	173
つちのおと	182
つちのねは	183
つまらぬと	97
つゆとおき	10
てんにます	45
としふれと	63
としよりて	363
としをへて	335
とひかはす	322
とびこんだ	370
ともみし	142
とりもかよはぬ	373
6	

とればうし	39
な	
ながきよの	
なかなかに	15
なからへて	20
なきひとの	315
こころとめし	375
むかしかたりに	85
なきひとを	27
なきもせず	73
なせばなる	74
なつくさや	23
なつすきて	24
なつのよの	54
なつやまに	67
ななそじと	64
ななそじの	138
さかはこゆとも	150
よはひかさねて	114
なにごとぞ	122
まことのみちを	280
はなみるひとの	241
なにごとの	280
59	
306	
72	
316	
126	
21	

なにしおはば	76	まごたちの	262
なにしおふ		ましみずの	263
ちよがみさきの	117	まつせまで	180
わすれなぐさを	208	まつのはの	334
なよたけの	309	みくらいは	362
なんのその	101	みのふみし	177
にしひがし	226	みはふいご	233
にちようと	300	みめくみは	1
にゆうばいや	353	むさしのうみ	174
ぬはたまの	314	むしのこえ	25
↓むはたまの	136	むはたまの	317
のどかさよ	60	↓ぬはたまの	235
	44	58	めくまれし	25
			こうだのかずえ	174
は行			かずえのながれ	1
はしめから	77	めくまれし	209
はちじゅうの	240	なつきにけりとおもひきや	210
はつひかげ	268	はるきにけりとおもひきや	209
はなならで	293	はるきにけりとおもひしに	302
はなのやま	36	ふるいけや	150
はなをめて	148	ふるゆきに	274
はねごろも	188	ほとけもとは	62
バビロンの	297	ほととぎす	366
はらからの	217			
こころつくしにはけまされ		こころづくしにちからつき	220
			パラダイス	332
			はるたちて	246
			はるばると	13
			ひかりあれと	346
			ひとのよの	222
			ひとのよは	346
			ゆめにはあらじあめつちを	123
			ゆめにはあらじきりすとの	146
			ひとのよを	124
			ひとはみな	125
			ひとびとの	236
			ひとりのみ	176
			ふじのはなは	82
			ふゆがれの	277
			ふゆすきて	271
			まごたちの	262
			ましみずの	263
			まつせまで	180
			まつのはの	334
			みくらいは	362
			みのふみし	177
			みはふいご	233
			みめくみは	1
			むさしのうみ	174
			むしのこえ	25
			むはたまの	317
			↓ぬはたまの	235
			めくまれし	25
			こうだのかずえ	174
			かずえのながれ	1
			めくまれし	209
			なつきにけりとおもひきや	210
			はるきにけりとおもひきや	209
			はるきにけりとおもひしに	302
			ふるいけや	150
			ふるゆきに	274
			ほとけもとは	62
			ほととぎす	366
			まごたちの	262
			ましみずの	263
			まつせまで	180
			まつのはの	334
			みくらいは	362
			みのふみし	177
			みはふいご	233
			みめくみは	1
			むさしのうみ	174
			むしのこえ	25
			むはたまの	317
			↓ぬはたまの	235
			めくまれし	25
			こうだのかずえ	174
			かずえのながれ	1
			めくまれし	209
			なつきにけりとおもひきや	210
			はるきにけりとおもひきや	209
			はるきにけりとおもひしに	302
			ふるいけや	150
			ふるゆきに	274
			ほとけもとは	62
			ほととぎす	366
			まごたちの	262
			ましみずの	263
			まつせまで	180
			まつのはの	334
			みくらいは	362
			みのふみし	177
			みはふいご	233
			みめくみは	1
			むさしのうみ	174
			むしのこえ	25
			むはたまの	317
			↓ぬはたまの	235
			めくまれし	25
			こうだのかずえ	174
			かずえのながれ	1
			めくまれし	209
			なつきにけりとおもひきや	210
			はるきにけりとおもひきや	209
			はるきにけりとおもひしに	302
			ふるいけや	150
			ふるゆきに	274
			ほとけもとは	62
			ほととぎす	366
			まごたちの	262
			ましみずの	263
			まつせまで	180
			まつのはの	334
			みくらいは	362
			みのふみし	177
			みはふいご	233
			みめくみは	1
			むさしのうみ	174
			むしのこえ	25
			むはたまの	317
			↓ぬはたまの	235
			めくまれし	25
			こうだのかずえ	174
			かずえのながれ	1
			めくまれし	209
			なつきにけりとおもひきや	210
			はるきにけりとおもひきや	209
			はるきにけりとおもひしに	302
			ふるいけや	150
			ふるゆきに	274
			ほとけもとは	62
			ほととぎす	366
			まごたちの	262
			ましみずの	263
			まつせまで	180
			まつのはの	334
			みくらいは	362
			みのふみし	177
			みはふいご	233
			みめくみは	1
			むさしのうみ	174
			むしのこえ	25
			むはたまの	317
			↓ぬはたまの	235
			めくまれし	25
			こうだのかずえ	174
			かずえのながれ	1
			めくまれし	209
			なつきにけりとおもひきや	210
			はるきにけりとおもひきや	209
			はるきにけりとおもひしに	302
			ふるいけや	150
			ふるゆきに	274
			ほとけもとは	62
			ほととぎす	366
			まごたちの	262
			ましみずの	263
			まつせまで	180
			まつのはの	334
			みくらいは	362
			みのふみし	177
			みはふいご	233
			みめくみは	1
			むさしのうみ	174
			むしのこえ	25
			むはたまの	317
			↓ぬはたまの	235
			めくまれし	25
			こうだのかずえ	174
			かずえのながれ	1
			めくまれし	209
			なつきにけりとおもひきや	210
			はるきにけりとおもひきや	209
			はるきにけりとおもひしに	302
			ふるいけや	150
			ふるゆきに	274
			ほとけもとは	62
			ほととぎす	366
			まごたちの	262
			ましみずの	263
			まつせまで	180
			まつのはの	334
			みくらいは	362
			みのふみし	177
			みはふいご	233
			みめくみは	1
			むさしのうみ	174
			むしのこえ	25
			むはたまの	317
			↓ぬはたまの	235
			めくまれし	25
			こうだのかずえ	174
			かずえのながれ	1
			めくまれし	209
			なつきにけりとおもひきや	210
			はるきにけりとおもひきや	209
			はるきにけりとおもひしに	302
			ふるいけや	150
			ふるゆきに	274
			ほとけもとは	62
			ほととぎす	366
			まごたちの	262
			ましみずの	263
			まつせまで	180
			まつのはの	334
			みくらいは	362
			みのふみし	177
			みはふいご	233
			みめくみは	1
			むさしのうみ	174
			むしのこえ	25
			むはたまの	317
			↓ぬはたまの	235
			めくまれし	25
			こうだのかずえ	174
			かずえのながれ	1
			めくまれし	209
			なつきにけりとおもひきや	210
			はるきにけりとおもひきや	209
			はるきにけりとおもひしに	302
			ふるいけや	150
			ふるゆきに	274
			ほとけもとは	62
			ほととぎす	366
			まごたちの	262
			ましみずの	263
			まつせまで	180
			まつのはの	334
			みくらいは	362
			みのふみし	177
			みはふいご	233
			みめくみは	1
			むさしのうみ	174
			むしのこえ	25
			むはたまの	317
			↓ぬはたまの	235
			めくまれし	25
			こうだのかずえ	174
			かずえのながれ	1
			めくまれし	209
			なつきにけりとおもひきや	210
			はるきにけりとおもひきや	2

や行

やぎのじと	285
やぞじやま	218
やそのはる	203
やつかひく	323
やとせあまり	299
ゆきにふし	245
ゆふやけや	348
ゆめならし	320
よいものは	42
よきにつけ	26
よしのやま	90
かすみのおくはいかならん	90
つゆのおくはしらねども	91
よのなかは	65
よのなかを	108
よはのつき	358
よもすがら	132
よをしらで	190
ら行	
らんたいの	86

わ行

わかきより	202
わかざかり	232
わがために	254
わけのぼる	170
わするるな	206
わすれえぬ	371
わすれむと	166
おもへはいとと	165
しひておもはし	377
わたつうみの	185
われはたれ	172
沿澗涛声喧戸外	224
山光照檻海色入窓	140
死生雖有命不可知	69
自古人生似航海	(215)
修竹凹屋海光入窓	(216)
春風春雨能開花	231
生来五十三	286
生来五十始臥病	48
男兒立志出鄉関	307
東海春秋七十二	216
東海春秋八十一	95
	229
	127
	215
	216
	48
	307
	286
	231
	69
	(215)
	(216)
	231
	286
	48
	216
	95
	229

藤木二邨合為一	214
南欧風雲將欲急	303
白沙青山逗子浜	261
七十四年又加一	156
七十九年又加一	211
八十一年又加一	239
八十二年又加一	267
八十四年又加一	298
有山有海又泉石	160
有山有海又有泉	159
静観自得壺中天	163
卜得湘南壺中天	181
蝸角卜居心自閑	193
去年盛暑病魔襲所	244

2023年3月31日発行

明治学院歴史資料館資料集【第19集】

編集代表 長谷川 一
発行者 鶴殿 博喜
発行所 明治学院歴史資料館
東京都港区白金台1-2-37
電話 (03) 5421-5170
印刷所 株式会社白峰社
東京都豊島区東池袋5-49-6
電話 (03) 3983-2312

